
WとOOOで学園物2

水分補給

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WとOOOで学園物2

【Nコード】

N5729Q

【作者名】

水分補給

【あらすじ】

ダブルとオーズのキャラたちの心温まるハートフルストーリー。
見て損はないかもしれない。

第一回目（前書き）

前回の出来が余り納得いくでじやなかったのもう一回書きました。面白いかは置いといて、前回よりはましかなと思います。あ、あと相変わらず地の文はないです。

第一回目

鴻上「パッピバーズデイ！！ようこそ鴻上学園へ私が理事長の鴻上だ。私が言いたいのは、ただひとつ！！自らの欲望に忠実に生きるという事だけだ、以上！！」

翔太郎「話短つ！！」

アキコ「まあまあ、いいじゃん早く終わっただしさ。」

鴻上「里中君、例の物を生徒たちに。」

里中「わかりました。後藤さん、お願いします。」

後藤「なぜ俺なんだ。というかこんな事をしていて本当に学園の平和が守れるのか？」

里中「ほら、早くしないと生徒の皆さんまちくたびれてますよ？」

後藤「くっ、これからみんなにケーキを配って行く。受け取った物から教室に戻ってくれ。」

翔太郎「おいおい、勘弁してくれよ。ハードボイルドの俺には甘い物なんて似合わないぜ。」

アキコ「とかいって、翔太郎君1番にケーキ取りにいったくせに。」

翔太郎「あ、あれは受け取らないと教室に戻れないからだし、食いたいかないし。」

フィリップ「もういいよ、翔太郎。にしてもこのケーキの入ってる箱大きいな、ワンホールはいつているんじゃないかい？」

アキコ「ワ、ワンホールも！？わ、私いそんなに食べれないよお。」

翔太郎「嘘つけえ。にしても1人にワンホールとはすごいな。」

教室

真里奈「あ、翔ちゃん高校でも同じクラスになったね。」

翔太郎「おう、よろしくな。」

アキコ「みんな同じクラスで良かったね。」

翔太郎「というか知っている奴ばっかだな。おやつさんだろ、サンタちゃんにウオツチャマン、クイーン、エリザベスにその他もろもろ。」

ガラッ

アंक「おい、お前ら早くしろ。遅刻しても知らないぞ。」

映司「お前が、ケーキよりアイスのほうがいいってただこねたからだろ？そのせいで後藤さん、近くのローソンまで買いに行くハメになったんだから。あとであやまつとけよ？」

アंक「誰がするか！」

翔太郎「お前ら遅かったなってなんだ格好!？」

映司「だから、アंक制服きてこいていたのに。」

アキコ「いや、アंक君もだけど映司君その・・・」

フィリップ「どうして君は、パンツ一丁なんだい？」

映司「いや、学校に来る途中でホームレスの人に会っちゃて寒そうだったんであげました。」

アキコ「ちょっと、比奈ちゃんとめてあげなよ。」

比奈「私も止めたんですけど、困ってる人を見捨てておけないって聞かなくて・・・」

アキコ「だからって・・・」

翔太郎「自分が困った事になってるじゃねえか・・・」

映司「いけますって！パンツさえあればどこにでも。」

翔太郎「確かに、警察署には、いけそうだな・・・」

アキコ「二人とも、保健室にいつてくれば？多分代わりの制服あると思うし。」

映司「じゃあそうするか。アंक」

アंक「誰がそんな面倒な事するか。」

比奈「アंक、いつてきなよ。」

アंक「俺に命令するな！」

翔太郎「分かった、アイスやるから行ってこい。アंक」

アंक「本当だな？ならいつてやるか。」

ガラッ

翔太郎「やつといつたか。」

比奈「すいません、翔太郎さん。」

翔太郎「いや、きにするなよ。」

アキコ「翔太郎君もちよつとはいい所があつたんだね。」

翔太郎「うるせえ。」

ガラッ

伊達「お前ら席つけー。今日からお前たちの担任をすることになった、伊達明だ。よろしくな。あーこれで全員か？」

アキコ「あ、映司君とアंक君が保健室に行きました。」

伊達「保健室だと？最初の犠牲者はそいつらになりそうだな。まあいいや、何か質問あるか？」

フィリップ「何か今物騒な言葉が聞こえたんだけど・・・」

翔太郎「奇遇だな。俺もだ。」

真里奈「先生は何の授業の担当なんですか？」

伊達「あー先生は、女子の体育を担当します。女子の皆よろしく。」

若菜姫『ハァー？男が女子の体育担当とかふざけてんの？殺すぞ。ガンッ

フィリップ「翔太郎？また何か聞こえたような気がするんだが。」

翔太郎「いや、あれは空耳だ。俺達の若菜姫が殺すぞとか机を蹴るなんてするはずがない・・・」

アキコ「なんで先生が女子担当なんですか？」

伊達「いや、本当なら男の方をやりたかったんだが、もう一人の体育の先生が男子の体育は全部自分が見ると聞かなくてな。」

アキコ「そうなんですか。」

一方保健室

映司「すいませーん、制服かりにきたんですけど・・・」

京水「誰？誰このイケメン？しかも、パンツ一丁とかこの私を誘っ

てるのかしら？」

アंक「こいつ、なにいつてんだ？」

京水「い、イケメンがもう一人嫌いじゃないわ。」

京水「いいわあ、こうなったら私が貴方達2人を楽しませてあげる。
」バサア

映司「おい、何でこの人服脱いだんだ？」

アंक「知るか、俺に聞くんじゃない！」

京水「ほら、早くしないと私が風邪引いちゃうわ、早くそのたくましい胸板で温めて頂戴。」

映司「なあ、俺達制服借りにきたんだよな？どうしてこうなった・・・」

アंक「わからないが、早くしないと俺達がぐわれちまうってのは確かだ。」

映司「どーするんだよアंक？」

アंक「俺に考えがある。任せろ！」

映司「大丈夫なんだろうな？」

アंक「ああ、そのオカマ、制服の場所を教えろ。そうしたらいい事教えてやるぞ？」

京水「あそこのロッカーに入ってるわ。で、いい事って何かしら？」

アंक「実はな、この男もホモなんだ。」

映司「ちょ、ちょっとアंक！？」

アंक「制服借りにきたなんて言っただけど、実はこいつは最初からあんたが狙いだったんだ。」

映司「」

京水「まあ、嬉しい事言ってくれるじゃないの。」

映司「ここから助かる方法を思いついたんじゃないかよ。アंक」

アंक「ああ、助かるさ。俺はな？お前はあのオカマとよろしくやってる。」

アंक「まあ、この程度でくたばる様ならお前はそれまでって事だ。おれはこんな奴で童貞卒業するわけにはいかないんだよ。じゃあな、映司」

映司「刑事さんってまだ童貞だったんだ。じゃなくてあ、アंक。」

京水「私のネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を見てくれ、こいつをどう思う？」

映司「す、すごく大きいです・・・」

映司「アーツ!!」

翔太郎「今誰かの断末魔が聞こえた様な？」

アキコ「翔太郎君寝ぼけてたんじゃない？」

翔太郎「それもそうだな。」

伊達「はい、皆注目！転校生の、照井竜君だ皆仲良くしてやれよ。」

照井「照井竜です、よろしく。」

翔太郎「どこからきたんだ？」

照井「俺に質問するな。」

翔太郎「な、なんだとお？」

伊達「はいストップ。実は彼は幼い頃にある出来事が起きて心に大きなトラウマが出来てしまったんだ。だけど根はいい奴だから、皆仲良くしてやる様に。」

翔太郎「・・・お前困った事があったら何でも言ってくれよ？」

アキコ「竜君・・・かわいそうに。」

比奈「私もトラブルがあったら言ってください、すぐ相手潰しに行きますんで。」

映司「俺のお気に入りのパンツあげるよ。」

照井「・・・何この皆の視線痛い・・・」

照井「あ、ありがとうみんな。」

翔太郎「いいってことよ。」

ガメル「みんな、なかよしこれがいちばん」

メズール「あら、ガメルそんな言葉を覚えたの？偉いわねえ。」

ガメル「えへ、えへへへへ。」

カザリ「全く、メズールはガメルに甘いね。」

メズール「あら、貴方も可愛がつてあげるわよ？」

女子トイレ

ウヴァ「女子トイレ・・・ハアハア」『お前の欲望を解放しろ』

アキコ「お前が解放してどーするの！」パソコン

翔太郎「とうとう、この日が来てしまった。」

フィリップ「どうしたんだい？翔太郎」

翔太郎「バレンタインデーだろうが。全く、今日は何個もらえる事やら。困ったなあもって帰るのが大変そうだ。」

フィリップ「・・・翔太郎？去年は何個もらえたんだい？」

翔太郎「一個。」

照井「そこからどうしてあれ程の自信が来るのが教えて欲しいな。」

翔太郎「そういうてめーは何個もらったんだよ？」

照井「一個だが、俺は、妹から貰えれば充分だ。」

フィリップ「翔太郎の負けだね。」

アキコ「なーにしてるの？」

フィリップ「翔太郎g翔太郎」言うな言うんじゃねえ！！」

アキコ「ふーん、まあいいや。今日はバレンタインという事で、みんなにチョコをもって来ました。義理だけだね？」

翔太郎「まじかよ？って五円チョコじゃねえかじゃねえか・・・」

アキコ「義理だもん、そんな事言つなら翔太郎君にはあげないよ？」

翔太郎「別にお前から貰わなくても、貰えるからいらねーよ。」

フィリップ「そんな事いつていいのかい？翔太郎、去年は一個しかもらえなかったんだろう？」

アキコ「そんなんで貰えると思ってたの？翔太郎君バカだね」。あ、竜君のはこの特別のチョコだよ？」

照井「いつも悪いな。所長」

翔太郎「いつも？いつもってなんだよ。」

フィリップ「知らないのかい？アキちゃんいつも照井竜に弁当作ってたんだよ？」

翔太郎「そうだったんか・・・」

アキコ「じゃあ、フィリップ君、じゃあね」。翔太郎君はチョコ貰えるといいね（笑）」

フィリップ「まあまあ、僕も貰ってないから、元気出しなよ。」

翔太郎「な、なんで、もらわなかったんだ？」

フィリップ「君が貰ってないのに、僕がもらえるわけないだろ？僕たちは、相棒なんだから。」

翔太郎「あ・・・相棒。」

若菜姫「あ、こんな所にいたんだ、フィリップ君。」

フィリップ「あ、若菜さんどうしたんですか？」

若菜姫「ちよつと渡したい物があるんだけどいいかな？」

フィリップ「はい、全然大丈夫です。行きましょう若菜さん！あ、じゃあ翔太郎あとでね。」

翔太郎「・・・」

メズール「ほあら、みんなのために今日はチョコを作ってきたのよ
くたっぷり食べてね？」

ガメル「わーい、メズールのチョコだーおでが全部くう。」

メズール「ほら、あんまり急いで食べると喉詰まらせるわよ?」

ガメル「だいじょうぶ? むぐっ!」

メズール「ほらほら、ゆつくりだべないからよ?」ポンポン

ガメル「メズールありがとう。」

メズール「ほら、カザリ、ウヴァもチョコ食べなさいな。」

カザリ「じゃあ遠慮なく貰うね。」

ウヴァ「メズールさんの太ももハアハア」『俺も食べるとするか』

映司「アंक、お前はいなくていいのか?」

アंक「ふん、チョコなんか興味ないね、アイスなら考えたが。」

メズール「そういうと思ってチョコ味のアイスもちやんと用意してるわよ。だから、アंकも来なさいな。」

アंक「何だと!?!それを早く言え!溶けてたりしたら承知しないからな?」

メズール「はいはい。」

映司「全く、アंकも素直じゃないな。」

比奈「あ、映司君。」

映司「あ、比奈ちゃんどうしたの？」

比奈「あの、映司君に渡したいのがあって。」

映司「え？本当に！？なんだろう、嬉しいな」

比奈「あのチョコ作って来たから食べて欲しいなーなんて。」

映司「うおー、ありがとう。本当に嬉しいよ。」

翔太郎「・・・」

アキコ「どーしちゃったの？翔太郎君。」

フィリップ「分からない、僕が戻ったらすでにそうになっていた。」

翔太郎「・・・」

フィリップ「まさか本当にチョコ一個ももらえないとは思わなかったからなー、翔太郎。」

アキコ「あ、そういえば、真里奈ちゃんは？翔太郎君に幼馴染のよしみであげると思ったんだけどなあ。どうせ去年の一個だって真里奈ちゃんなんしょ？」

真里奈「い、いえいつもあげようと思ってたんだけどあげるタイミングが・・・」

アキコ「ならいましかないよ！あげて来なつて、そうしたら翔太郎君も元に戻るよ。たぶん」

真里奈「あ、あの翔ちゃん？」

翔太郎「なんだ・・・真里奈か、お前も俺を笑いに來たのか？」

フィリップ「相当落ち込んでる様だね。」

アキコ「こりゃ、一個もらっただけじゃなおんないかもね。」

真里奈「翔ちゃん、チョコつくってきたんだけど、どう？」

翔太郎「な・・・なんだと？」

真里奈「チョコ作って來たからどう？っていったの。」

翔太郎「ま、まじかよいつもはくれなかったのに、どうだフィリップ、アキコ俺だってチョコ貰えるんだよ。アハハハハハ」

フィリップ「直ったね、翔太郎。」

アキコ「まあ翔太郎君バカだからな。」

照井「そういえば、真里奈ちゃんから貰ってないなら去年は誰から貰ったんだ？」

アキコ「あ、そうだよ。誰から貰ったの？」

翔太郎「・・・自分」

フィリップ「な、なんていったんだい、翔太郎？」

翔太郎「自分・・・自分から貰ったって言ったんだよ」

みんな「・・・」

アキコ「う、ごめんね？来年からはちゃんとあげるから。」

ガメル「メズール、ここわかんない、おしえて」。

メズール「はいはい、後ちよつとで洗い物終わるからそれまで待つてね」

ガメル「待てない」メズールはやく」

メズール「もう困った子ねえ。」

カザリ「ここは、僕がやつとくから、メズールはガメルの所にいてあげなよ。」

メズール「あら、じゃあお願いするわね？」

カザリ「任せといてよ。」

ガメル「メズール、メズールはやくはやく。」

メズール「はいはい、いまきたわよ、でわからない所はどこ？」

ガメル「こことここと・・・」

シュラウド「莊吉、昔みたいに文音って呼んでよ。」

莊吉「だからいやだと何度いったらわかるんだ？シュラウド。」

シュラウド「文音」

莊吉「シュラウド」

シュラウド「ふみね」

莊吉「シュラウド」

シュラウド「ふみね」

莊吉「文音。」

シュラウド「シュラウド……あ」

莊吉「分かったシュラウドな。」

シュラウド「も〜莊吉のいじわる〜でも……」

莊吉「？」

シュラウド「やっと文音って呼んでくれたね。」

莊吉「たく、今回だけだからな。文音」

文音「うんッ？」

第一回目（後書き）

読んでくれてありがとうございます。今回も若干のキャラ崩壊します。ですがグリード達の所は書いて楽しかったです。続きがかけたらかきたいと思います。

第二回目（前書き）

また、書いてしまいました。とりあえず、一人でも見てくれるうちにはまあ話思いついたらただけ書いて行きたいなと思います。

第二回目

翔太郎「野球しようぜ？」

アキコ「あ、その卵焼き美味しそう、フィリップ君貰っていい？」

フィリップ「ああ、いいよアキちゃん。」

翔太郎「野球しようぜ？」

照井「所長の作ってくれる弁当はいつも美味しいな。」

フィリップ「そういえば照井竜、君はいつも弁当箱2箱食べてるね、何故なんだい？」

翔太郎「野球しようぜッ！！」

照井「ああ、これは妹がいつも作ってくれるんだ。所長に作って貰ってるからいらないと言ってるのに聞かなくてな。」

アキコ「も、もしかしてお弁当作ってくるの本当は迷惑だった？」

照井「そんな事はないぞ？一個だとならないと思ってたからな。作って来てくれた時は嬉しかったたぞ？」

フィリップ「よかったね、アキちゃん。」

アキコ「そういえば、比奈ちゃんは、アंक君にお弁当作ってあげてたりするの？」

比奈「作ってないですね。アंकってばアイスしか食べないし。」

アキコ「そういえば、アंक君が、アイス以外食べてるところあんまりみないね。」

照井「確かに。こんなに寒いのに、さも当然のようにアイスを今も食べてるしな。」

フィリップ「興味深いねえ。」

映司「そうも言ってもらえないですよ、アंकのアイス代全部俺が払ってるんですよ？本当、月のアイス代半端ないんですから。」

アキコ「アंक君、映司君にアイス代払わせてるの？」

翔太郎「・・・野球してくれよ・・・」

アंक「映司とは、そういう約束してるからな。」

若菜姫「何も考えてないように見えて結構苦労してるのね、映司君。」

比奈「若菜さん！？ヒーリングプリンス毎回聞いてます！」

翔太郎「／／／」

アキコ「うーむ、じゃあさみんなで料理作ってアंक君に食べさせようよ。そんでもって世の中にはアイスよりももっと美味しい物があるって事を教えてあげようよ。」

アंक「勝手に決めんな！アイスよりうまい物なんてこの世に存在しねエ。」

映司「まあまあ食っただけなんだからさいいじゃんかアंक。」

比奈「そうだよ、一応その体はお兄ちゃんの何だからちゃんと栄養はとって貰わないと。」

フィリップ「どうすればゆづ事を聞いてくれるのか・・・興味深いねえ。」

アキコ「そうだ！！」

比奈「な、何か思いついたんですか？」

アキコ「アイスあげるっていえば食べてくれるよきつと。」

フィリップ「アイスよりも美味しいのを教えるために食べさせるのにそれだとなんか違うような？」

アキコ「大丈夫だってアंक君食べてるウチに忘れるよ。」

照井「鳥は三歩歩けば忘れるっていうしな。」

アキコ「そうそう、それぞれ」

フィリップ「いや、それは、犬の様に芸が出来たり、物真似をする程利口でもなく人のいう事も聞かない事から物覚えが悪い人、或い

はすぐに忘れる人に当てられるようになったらしいよ？あ、あと鳥じゃなくて鶏だけをさすっばいよ？」

アキコ「うーん、そうだったのか・・・」

比奈「でもアंक人のいう事聞かないし、あるいみあってるかもしれないですね。」

アキコ「そうそう、いけそうだよね？」

映司「他に案無いし、それでいいんじゃないですか？」

アキコ「よし、アंकくくんアイスあげるからこっち来なよー」

アंक「アイスだと？とでもいうと思ったか、めんどくさいのは嫌なんだよ。」

映司「アंकが、アイスに引っかからないだ？」

アキコ「どうしょ？」

フィリップ「あれ？そういえば翔太郎は？」

アキコ「あれ、そういえばいないね。」

比奈「そういえば、何か言っていましたよね。」

フィリップ「うーんなんて言ってたんだろ。」

照井「・・・確か、やき・・・だったような。」

アキコ「やき？なんだろ。」

フィリップ「うーん、焼き芋とかかな？」

アキコ「あゝそれだよ。確かに焼き芋美味しいもんね。きっと1人でこっそりと作ってアंक君に食べさせてあげようとしてたのかな。」

フィリップ「翔太郎、君って奴は・・・」

照井「俺は、今まであいつの事を誤解してたのかもしれない。」

比奈「待ってください。もしかしたら焼き土下座かもしれないですよ？」

翔太郎「アハハハハ、たくいきなりそんな強く投げるなよ。まだ肩あつたまってないだろ？」

ピッチングマシン「シューン↑ボール投げる音

翔太郎「たく、本当お前は加減を知らないなほらよ。」ポイツ

ピッチングマシン「ポトッポトッコロコロコロ

翔太郎「たくちゃんと取れよな、いやたさしかにさっきは俺のコントロールミスだけどさあ、わかったよ俺がボールとってくればいいんだろ。」

翔太郎「・・・」

ピッチングマシン「

翔太郎「・・・」

ピッチングマシン「

翔太郎「・・・帰ろ。」

翔太郎「あれ、たしか後藤とかいう人じゃないか。おーいなにしてるんだ?」

後藤「誰だ?お前は。」

翔太郎「あ、あれ？人違いか？でもあのもじやもじやを見間違っ
ないしなア。」

後藤「俺の髪は、そんなにもじやもじやしていない。」

翔太郎「あれ、俺声に出してました？」

後藤「出てた。」

翔太郎「あちゃー、でこんな所でなにしてるんだ？」

後藤「実はゲームを買って来いと頼まれてな。買いに行く所なんだ。」

翔太郎「いわゆるパシリって奴か・・・」

後藤「・・・」

翔太郎「・・・」

翔太郎「あ、そ、そういえばなんのゲーム買いに行くんだ？」

後藤「DSで出てるラブプラス+とか言う奴だ。」

翔太郎「ら、ラブプラス+？なんだそりや。」

後藤「俺もよくわからない、だが今できる事をコツコツやって行けばいつか、パシリから解放されるそう信じてやって行く事にしたんだ。」

翔太郎「ふん。」

後藤「じゃ、俺はこれで。」

翔太郎「まてよ、暇だから俺もいつてやるよ。」

後藤「いいのか？」

翔太郎「いいつて事よ。俺達友達だろ？」

後藤「あ、ありがど。」

翔太郎「たく、泣くなよな。これくらいで」

後藤「す、すまない。じゃあ行こうか。」

翔太郎「ああ。」

アキコ「もう翔太郎君の事はほっとこうか。」

照井「そうだな、ここにいない奴の事を考えてもしようがないからな。」

比奈「問題は、どうやってアंकに食べさせるかですね。」

アंक「あれ、まだそれやってたんだ？もうとっくに諦めてたと思
ってたぜ。」ボリボリ

アキコ「ま、またアイス食べてるよ・・・」

映司「しかも、床にかなりのアイスの棒落ちてるし、このままじゃ
パンツ買う金もなくなっちゃうよ。」

アキコ「うーん。」

照井「・・・」

比奈「・・・」

映司「・・・」

フィリップ「・・・」

アंक「ほら、もう諦めるよ。お前達じゃ何年かかって俺に食わ
せる事はできない。」

アキコ「キィ、意地でも食べさせたくなつた。ねえなんかない？」

フィリップ「こうなつたらもう実力行使しかないんじゃないかな？」

アキコ「実力行使？」

フィリップ「ああ、比奈ちゃんの馬鹿力でアंकのくちを開けて無
理矢理詰め込む。アंकも怒るかもしれないが、料理が美味しけれ

ば問題ないだろう。」

照井「名案だな。」

アキコ「さすがWいちの頭脳派、よっ日本一。」

フィリップ「あはは、そんなに褒めても名案しか出てこないよ?」

映司「流石ですね! ね、比奈ちゃん。」

比奈「う、うん。」『そうかなあ?』

アキコ「じゃあさっそく料理作ろつか、冷蔵庫の中身はぐな、ない。私聞いてないよ」

アキコ「シェフは機嫌を損ねた帰る。」

フィリップ「え? あ、アキちゃん! ?」

照井「所長、さっきまでは張り切っていたのにどうしたんだ。」

アキコ「だって食材が無いんだよ? そりゃ誰だって萎えるよ」。

アंक「おう、帰れ帰れ。」

比奈「アキコさん、仮に食材が無いとして一体何がいけないんでしょうかね。」

アキコ「いや、料理作れないよ! ?」

比奈「そこをなんとかお願いします。」ジャンピング土下座

映司「お、俺からもお願いします。」冷やし土下座

アंक「映司、何俺のアイスの上で土下座してんだ。ふざけんな、とけんだろ！」

アキコ「そこまで言われちゃしょうがないね。アंक君の舌を唸らせるような作っちゃうよ!!」

数十分後

アキコ「出来た、はい具なしカレー!!」

比奈「・・・え？」

映司「これはひどい・・・」

フィリップ「さすがにこれはないよ、アキちゃん・・・」

照井「所長、気でも狂ったか。」

アキコ「みんな何気にひどいね・・・私なりの考えがあるんだよねには。」

照井「では聞かせてもらおうか、所長。」

アキコ「アंक君ってアイスが好きじゃん？だから、なんかごてごてしてるのよりだったらシンプルなほうがいいのかなみたいな。」

アキコ「というわけで、あったかいウチにはやくはやく。さ、比奈

ちゃんアंक君の口広げるのお願い。」

比奈「はいわかりました。」ガシッ

アंक「は、離せ！一氣にいれたらや、火傷するううう。」

アキコ「じゃあ、入れるよ。」

アंक「あばばばばば。」

照井「鍋一杯は流石にキツそうだな。」

映司「でも、俺達のアंकならきつと耐えてくれますよ。」

フィリップ「ああ。」

アंक「・・・」

アキコ「で？アंक君どうだった？」

アंक「熱すぎて味なんか味わう暇無かったわボケ！」

フィリップ「もういいだろ？早く帰ろうよお」

照井「はあ、ここからがいいとこなのにお前冷たいねえ」

照井「と言う冗談はおいといて。どうするんだ？もう諦めるのか？」

アキコ「うーん、今日はもう遅いしいいや、でも絶対に諦めないからね。私たちの戦いはこれからだ。」

愛花く左君、ねえこれからあなたの事名前で読んでいいかな？

翔太郎「ああ、いいぜ？」

愛花くじゃあ・・・翔太郎君、これからもよろしくね。

翔太郎「おう、よろしくな、愛花。」

愛花くあの、せっかくだし今度の日曜日デートしてくれないかな？

翔太郎「お前の頼みを断る訳ないだろ？」

愛花くありがとう・・・翔太郎君、これからよろしくね。じゃあね、バイバイまたね。

翔太郎「ふふふ・・・バイバイ。」

愛花く翔太郎君、これからは・・・ずっと一緒だね。

翔太郎「・・・ふふふ。」

愛花<翔太郎君、おはよう。

翔太郎「ああ、おはよう愛花。」

愛花<さあ、行こう？

翔太郎「行くか。」

真里奈「あ、翔ちゃんおはよう。」

愛花<今日も一日よろしくお願いします。

翔太郎「ああ。」

真里奈「ちよつと寒くなってきたね・・・」

愛花<手、繋ぎたくなつちつたかも・・・なんて。

翔太郎「じゃあ手繋ぐか。」

真里奈「・・・え？」『子供の時によく繋いでたけど、今繋ぐのはちよつと恥ずかしい・・・よね。』

愛花<ホントは、手、離れた方がいい？

翔太郎「なんだよ。恥ずかしいのか？」

真里奈「そ、そんな分けないじゃない。手くらい繋げるわよ。」

愛花<だって、もし無理してくれてるなら・・・やっぱり、いや離さない。

翔太郎「たくお前は、かわいいな。」『てかなんでこいつ手繋いできたの？まあ顔見なきゃ愛花と繋いでるみたいでこれも悪くないな』

真里奈「え？」『何かいつもと違うな、翔ちゃん。そういえば、何のゲームしてるんだろ。イヤホンしてるしわかんないや。』

翔太郎「なあ、なんだか二人つきりばいな。」

真里奈「・・・」『え？ほんとにどうしたの？今日の翔ちゃん。』

愛花<だから？

翔太郎「キスしようぜ。」

真里奈「・・・キスとかって、付き合っていないとダメっていうか手を繋ぐとはレベルが違うと思うんだけど。」

翔太郎「」

真里奈『聞こえてないのかな、ならイヤホンを取って。』ぶちっ

愛花くもくしょうがないn

翔太郎「てめ、なにすんだよ。」『あゝ顔みちゃった。もうこの手を愛花と思えない。さらばおれの幻想^{ルナア}』

真里奈「キスとかは付き合ってからの方がいいと思うな。」

翔太郎「はあ？俺たち付き合ってるだろ。だから、手を繋いでたんじゃないか。」『お前も勝手に手を繋いだけどな。』

真里奈「え・・・じゃあ、付き合ってたんだ翔ちゃん。」『私と』

翔太郎「ああ、付き合ってもいないのにキスしようなんて言わないさ。」

真里奈「へえ、そうだったんだ。」『でもそう言う事はちゃんと面と向かっていって欲しかったな。』

真里奈「でも、なんで付き合ったの？」

翔太郎「何でって、可愛かったからな。手を繋いでる時なんか顔真っ赤にしちゃってさ。」『愛花が』

真里奈「もう、恥ずかしいよ。／＼／」

翔太郎「ああ、悪いいな。」『確かに人のノロケ話は聞きたく無いよな。』

真里奈「まあ、いいけどね。」

翔太郎「そっぴやまだ手を繋いだままだった。この手は愛花、この手は愛花、この手は愛花ああ、愛してるうううう」

真里奈「あ、愛してるなんて／＼／」

フィリップ「朝から元気がいいねえ、二人とも。」

アキコ「もう、手なんか繋いじゃって熱々だねえ」

翔太郎「まあな、付き合ってるからな。」

アキコ「へえ、まさか翔太郎君と真里奈ちゃんが付き合うとはねえ。」

フィリップ「・・・ぞくぞくするねえ」

真里奈「／＼／」

翔太郎「・・・え？いまなんて？」

フィリップ「ぞくぞくするねえっていったんだよ。翔太郎。」

翔太郎「お前じゃねえよ！アキコだよ、アキコ！」

アキコ「へえ、まさか翔太郎君と真里奈ちゃんが付き合うとはね

え。って言ったんだよ。言わせんな、恥ずかしい。」

翔太郎「え〜と、誰と誰が付き合ってるって？」

アキコ「だ〜か〜ら〜翔太郎君と真里奈ちゃんがってさっきから言ってるじゃない。」

翔太郎「何でそうなる・・・」

フィリップ「翔太郎、さっき自分で言ってたじゃないか、それにほら手も繋いじやって。」

真里奈「／／／」

翔太郎「あ・・・」『そ、そうだった・・・厳密に言えばこれは愛花の手ではなく、真里奈の手だったんだ・・・』

翔太郎「ちげえよ、真里奈と付き合ってるなんて冗談だろ？冗談は顔だけにしてくれよな、アキコオ。」

アキコ「な、な、なんですってえ？」

真里奈「・・・」

フィリップ「じゃあ、翔太郎。君は誰と付き合っているんだい？」

アキコ「そーだよ、てか私はすれ違った人が10人いたら10人は振り返る美少女だっつーの。」

翔太郎「アッハハハ、アキコは冗談がうまいなあ。」

アキコ「ムツキイイ！！翔太郎君、許すまじ。」

フィリップ「冗談はそのくらいにして、本当は翔太郎、誰と付き合っているんだい？」

アキコ「フィリップ君まで・・・」

真里奈「・・・」

翔太郎「まあ見せてもいいが、特にフィリップ。俺の彼女に惚れるなよ？」

フィリップ「そーかい。早く見せてくれよ、翔太郎。」

翔太郎「せかすなせかすな。今明かされる翔太郎の彼女！！チャンネルはこのまま、かみんぐすーん！！」

アキコ「うつさい、だまれ。さつさと見せろよ。」バゴーン

翔太郎「いたっ！？わかった、わかった見せてやるよ。」

翔太郎「じゃーん、これが俺の彼女だあああああ？」DSどーん

愛花くもっ、恥ずかしいよー

フィリップ「・・・」

アキコ「・・・」

真里奈「・・・」

アキコ「えっ？どこどこ」

フィリップ「さ、冗談はそのくらいにして、実際はどの子なんだい？」

真里奈「・・・」

翔太郎「はあ？ここにいるじゃねえか。あ、わかった、お前ら俺の彼女があまりにも可愛買ったもんで認めたく無いんだな？ハハーンそーかそーか。アッハハハ」

フィリップ『だ、駄目だこいつ。早くなんとかしないと・・・』

アキコ『翔太郎君は私が思ってる以上に可愛いそうな子だったんだね、今度からは優しくしてあげよう・・・』

真里奈「・・・」『私、こんなのに負けたんだ・・・』ぐすん

後藤「あいつがあそこまではまるとはな、愛花と言うセンスも悪くない。だが凜子、お前がNo.1だ？」

照井「ほう、貴様何か知っているみたいだな。詳しい話を聞かせてもらおうか。」ガシッ

後藤「くっ、俺には拷問は効かないぞ。絶対に言わないからな。」

照井「ほう、その心意気だけは褒めてやろう。だがこれならどうかな？」ガサコソ

後藤「な、なんだと？そ、それはもしかして俺の？」

照井「ああ、こいつを壊されたくなければ洗いざらいはいてもらおうか。」

後藤「り、凜子おお。こ、このひとでなし。血も涙もないのか貴様は？」

照井「どうとでもいえ。で？言うのか言わないのかどっちだ」ミシミシ

凜子「痛いよ。慎太郎助けてよ。」

後藤「き、聴こえる俺にも聴こえるぞ！凜子の悲鳴が・・・くそおりんこお・・・凜子おおお。おれは、どうすればいいんだ・・・」

照井「壊されたくないなら、言えいいだろう？言っちゃまえよ、楽になるぜ？凜子ちゃんを助けたいんだろ？」ククク

凜子「ちゃんくた、助けてよ。慎太郎は凜子の王子様なんでしょ？早く助けてよ。」

後藤「くそお、くそお、凜子おおお、俺は、おれはああ」

照井「そこで悩むって事はお前は、凜子ちゃんがどうでもいいんだな？わかった。なら凜子ちゃんは可哀想にさよならだな。」ピシッ

後藤「わ、わかった言う。言えはいんだろ？クソっ？」

照井「たく、手間かけさせやがって。言うならさっさと言えバカヤロ！」

照井「ほう、そんな事があつたのかなるほどなあ。」

後藤「も、もう知っている事は全部いったんだ。凜子を返してくれ。」

照井「ふん、返してやるよほらっ。ていうとおもったか。いい渋った罰だ。こいつは返してやんねー」

凜子ちゃんくい、いやー慎太郎助けてよー

後藤「な、なんだと？お前は、鬼だ。悪魔だ。最低だ。凜子おおお、りんこおおお。」

照井「ふん、俺を最低呼ばわりする前に俺から凜子ちゃんを取り返せない己の無力さを嘆くんだな。」ははは

後藤「くそお、くそお、俺に力さえあれば、くそおおおおお」

愛花く・・・学校だよ？そついの良くない。

翔太郎「校則にのつてないぜ？」

愛花「もう、悪いんだから。」

翔太郎「はは、いいだろ？」

フィリップ「これは、重症だね。」

アキコ「なんか、棒啜えてなにしてるんだろ？」

愛花「また甘やかしちゃった。」

翔太郎「はは、いいじゃねえか。」

愛花「もう、バカ！」

翔太郎「・・・ふふふ。」

愛花「また、すぐあえるよね？じゃあね？」

翔太郎「ああ、いつでもそばにいるぜ？」

比奈「え〜と、翔太郎さんどうしちゃったんですか？」

アキコ「うーん、なんか、何時の間にかあーなってたんだよね。真里奈ちゃん？」

真里奈「わ、私が今日会った時にはもう、私がもつとしっかりしてたら翔ちゃんはこんな事には何なかったのかもかもしれません・・・」

アキコ「そんな、真里奈ちゃんのせいじゃないよ。」

フィリップ「たぶん、あのゲームのせいだね。」

照井「ああ、後藤と言う奴に聞いてきたが、どうやら昨日1人で帰ったときにそいつに会い、そのときのゲームの存在を知ったらしい。」

アキコ「へえ、流石竜君だね。」

フィリップ「あとは、どうすれば翔太郎が元に戻るか、だね。」

照井「それも、俺に考えがある。任せてくれないか？」

フィリップ「ほあ、もうそこまで考えていたとは。」

アキコ「竜君がんばってね。」

照井「ああ、任せといてくれ。」

照井「では、行ってくる。」

フィリップ「ああ、頑張ってくれ。あんな翔太郎を見てるのはツライ。」

愛花「好き・・・大好き。」

翔太郎「・・・ふふふ。」

照井「任せておけ、俺を誰だと思っている。」

フィリップ「そうだったね。」

照井「・・・フヒヒ、可愛いなア。寧々さんは。もう、寧々さんがいねばそれでいい。愛花とかないわー、愛花とかないわー」チラッ

翔太郎「はは、愛花は可愛いなア。」

照井「聞こえてないだろ？」

フィリップ「・・・」

アキコ「・・・」

照井「お、翔太郎お前もそれやってるのか？ラブプラス+。実は俺もやってるんだ」。ふん。お前、愛花選んだんだ？センスないな」

フィリップ「・・・」

アキコ「・・・」

翔太郎「お前は、俺を怒らせた。」

照井「まあまあ、そう言うなって。愛花なんてどこがいいんだよ。一番は、寧々さんだろうが。」

翔太郎「はあ？あんなやつのがいいんだよ。何が本当の傘の使い方教えてあげようか（笑）だよ。」

照井「・・・」

翔太郎「いや、本当なら愛花がどんなに可愛いか、愚かなお前に千の言葉を用いて教えてやりたいよ。でもいかんせん、俺のしたはそんなに早く回らないんだ。齒がゆいぜ、もっと言いたい事はあるのに愛花可愛いに全てを込めるしか無いんだ。できる事なら愛花のどこが可愛いのか万の言葉を用いてレポートをまとめてやるよ。でもなあ、俺はそんなに暇じゃないんだ、悪いなバカヤロー」

照井「くそ、だが、ただでは終わらんぞ。既成事実を作ってしまったえば、もうあんな物にうつつを抜かす事はないだろ。」

翔太郎「え？ちょ、ちょっと待つてっば！いやマジ勘弁して下さい。」

照井「振り切るぜ、いや振り切らせてください。」ブチュ

翔太郎「う、うわあああああ。」

フィリップ「・・・」

アキコ「・・・竜君何が言う事は？」

照井「い、いや、あのあれには、俺なりの考えがあつてだな？左にもラプラス+をやっている奴をはたからみせることによって俺もこんなキモいのかつて事を知らせようとだな。」

アキコ「・・・何が言う事は？」

照井「・・・すいません。」

アキコ「本当に謝罪の気持ちがあるなら例え焼けた鉄板の上でも土下座できるよね？竜君。」

照井「え？」

フィリップ「いやいや、いくらなんでもいいすぎだよ？アキちゃん。」

真里奈「そうですよ、いくらなんでも言い過ぎですよ。」

アキコ「所長、気でも狂ったか（笑）。」照井風に

照井「も、もしかして所長、き、気にしてたのか？言われた事。」

アキコ「まあ、さっきの竜君に比べたら狂ってなかったよね？」

照井「い、いやあのその。」

アキコ「狂ってなかったよね？」

照井「は、はい。すみませんでした。」

アキコ「あーWii欲しいなあ。」

照井「それを買ってきたら許してくれるのか？所長。」

アキコ「えゝ、誰も竜君にたのんでないよゝ」

フィリップ「アキちゃん、流石にそれは照井竜が可哀想じゃないかい？」

アキコ「だってさ、あのせいで、翔太郎君もつとのめり込んじゃったじゃん。」

愛花「どうしたの？わたしでよかったらいつて？」

翔太郎「なあ、おれけがされちまったよ。」

愛花「私はいつでもあなたの味方よ？」

フィリップ「まあそうかもしれないけど。」

照井「いやいいんだ、フィリップ。買わせてくれ、いや買いたいんだ。」

フィリップ「・・・照井竜。君は・・・」

アキコ「じゃあ、行って来てねゝ。あ、なるべく早く帰って来てね。」

うーん、5分55秒いないって事で。」

照井「5分55秒それが俺の絶望までのタイムか・・・振り切るぜ。」

アキコ「うーん、どうしようか、次は誰が行く？」

映司「じゃあ俺行きます。」

アキコ「映司君いたんだ？」

映司「さっき来ました。翔太郎さんの事は任せて下さい。」

フィリップ「何か秘策があるのかい？」

アキコ「まあ、さっきの竜君よりは絶対にマシだろうね。」

映司「じゃあ、俺行きます。」

映司「翔太郎さん、なにやっているんですか？」

翔太郎「おお、映司じゃないか。そういえばまだ紹介してなかったな、俺の彼女の愛花だよろしくな、こいつ恥ずかしがり屋だから画面の中から出て来ないけど気にしないでくれな。」

映司「聞いてた以上にひどいなこれは。」

映司「えーと、そんなのより俺のパンツのほうがいいですよ？それ

と交換しませんか？モンシロチョウの柄がいいでしょ？どうですか？」

翔太郎「いらん。」

映司「・・・」

アキコ「まあ、あれじゃあしょうがないよ。映司君、次がんばろ？」

フィリップ「そうだよ、照井竜よりは幾分ましだったよ。」

真里奈「次私が行きます。」

アキコ「あー真里奈ちゃんなら次で終わりだね。がんばってね。」

フィリップ「ああ、頑張ってくれ真里奈ちゃん。」

真里奈「はい、頑張ります。」

バン

照井「ハアハア、しょ、所長買って来たぞ。」

フィリップ「はやかったね、照井竜。」

アキコ「で、買ってきたWi-iはどこ？」

照井「ああ、こちらに。」

フィリップ「・・・え？買って来た物ってそれかい？

」

照井「ああ、渡された金額だとたくさん買えたからな、いっぱい買
って来たぞ。」

アキコ「ねえなんで十秒メシ買って来たの？ねえなんで？バカ？バ
カなの？」

アキコ「ねえ、なんで？なんで十秒メシ買って来たのかな？それ別
に十秒で飲めてもトライアルの訓練にはなんないよ？」

フィリップ「な、何もそこまで怒らなくても、ほ、ほらウイダーお
いしいよ？」

アキコ「フィリップ君は、黙ってて。」

フィリップ「はい・・・。」

照井「あの、俺の行ったところには売ってなくてな名前がにてるし
安いから数的にはこっちのほうがいっぱい買える、と思ってな。」

アキコ「それで買って来たの？」

照井「・・・はい。」

アキコ「まさか竜君がここまでバカだとは思わなかったよ・・・
もう一回チャンスあげるよ。それで買って来れなかったら、どう
なるか・・・わかってるね？」

照井「はい、分かりました。」

アキコ「言つとくけど、自腹だからね？」

照井「・・・はい。」

フィリップ「たしかに、こればかりは、どうしようも無いね。」

真里奈「・・・駄目でした。」

アキコ「なにをしたの？」

真里奈「いや、普通に好きですって言ったら、ふーんそうなんだ。俺もう彼女いるから悪いなって言われました。」

アキコ「ド、ドンマイ？」

フィリップ「で、次はどうするんだい？」

比奈「私が行きます。」

アキコ「ほう、では作戦を聞こうか。」

比奈「作戦なんてありません。あるのはただ、己の拳のみ。」

アキコ「駄目だよそれ。絶対ダメ。」

比奈「どーしてですか？壊してしまえばいいじゃないですか。」

フィリップ「壊しても翔太郎の心があゲームから完全に離れてしまわない限り、何度でも買って無駄だからね。」

比奈「でも、もしも翔太郎さんが俺の愛花は、あの壊れた愛花だけだ。買った所でそれは別物だ、俺の中の愛花は、あいつだけだ。みたいな人かもしれないですよ？」

アキコ「それだと翔太郎君の心に大きな傷ができるかもしれないじゃない？その後のアフターケアが面倒くさいからダメ。」

比奈「残念だなあ。」

アキコ「ふっふっふ。とうとう私の番だね？」

フィリップ「アキちゃん、何か考えがあるのかい？」

アキコ「まっかせなさい。」

アキコ「翔太郎君。」

翔太郎「ん？今度はアキコか、どうしたんだ？」

アキコ「あ、間違えた。ねえ、左くん。」

翔太郎「ん？今度はアキコか、どうしたんだ？」

フィリップ「さっきのやりとりを無かった事にした、だと？」

アキコ「左君、ねえこれからあなたの事名前で読んでいいかな？」

翔太郎「・・・」

アキコ『よ、よし。たぶん掴みは、バッチリ?』

アキコ『じゃあ・・・翔太郎君、これからよろしくね。』

翔太郎「あ、あのsアキコ」あの、せっかくだし今度の日曜日デートしてくれないかな?」

フィリップ「翔太郎に何も話させないきか?」

アキコ「ありがとう・・・翔太郎君、これからよろしくね?」

アキコ『よし、最後に。』

アキコ「翔太郎君、これからは・・・ずっと一緒だね?」

アキコ『完璧?私将来役者向いてるかも?』

翔太郎「え?まじお前なにしてんの?」

アキコ「え?その子より可愛かったでしょ?」

翔太郎「はあ?お前と愛花じゃ月とスッポンだったの。』

アキコ『おちつけ、落ち着くんだ私、あんなの翔太郎君の戯言。気にしちゃ駄目!クールになるんだ私。』

アキコ「だめだった・・・」

照井「買ってきました。今度こそ買ってきましたよ」
は？」

アキコ「うるさああああいー!!」「ドゴッ

照井「グハッ!!」

アキコ「何が言う事は？」

照井「あ、ありがとうございます。ご褒美ありがとうございます！
」

アキコ「うるさくしてすいません、でしょ？」

照井「ご指導頂きありがとうございます!!うるさくしてすいませ
ん。」

フィリップ「あ、アキちゃんは、頑張ったよ。たまたま、相手が悪
かっただけさ。」

比奈「そうですよ、あーあの時のアキコさん、最高に輝いてたなあ。
」

アキちゃん「そうかな？」

フィリップ「そ、そうだよ。僕なら今ので、惚れてたなあ。」

比奈「わ、私もし男だったら今のでアキコさんの事好きになっ
てました！」

アキコ「そくだよね！たく翔太郎君は、何もわかってないんだから、参っちゃうよ。」

フィリップ「はあ」

アキコ「うん。じゃあどうしようか。もう、フィリップ君しか残ってないけど・・・」

フィリップ「・・・分かった。準備してくるからちよつと待ってて。」

比奈「すごい気迫でしたね。」

アキコ「う、うん。これは期待できるかもしれない。」

比奈「そうかもしれないですね。」

フィリップ「待たせたね、じゃあ、行ってくるよ。」

フィリップ「しょうた」

ガシャアアン

大道「こいつはお」フィリップ「うわーうわーしょ、翔太郎」助けてくれ殺される」ちょ、どこ触っているんだうわ」助けて」わかったな？来なかったらこいつの命はないと思え。」

翔太郎「・・・」

アキコ「……」

比奈「……」

比奈「窓ガラス割って入ってくるとかすごかったですね。」

アキコ「う、うん。心臓口から飛び出るかと思ったよ。」

比奈「あはは、私も思いました。」

翔太郎「なあ、さっきのなに？」

アキコ「ちょ、翔太郎君早く行つてあげなよ。フィリップ君ころされちゃうかもしれないんだよ。」

翔太郎「いや、行こうにもあいつ、フィリップの叫び声でなんて言ってるかわかんなかったし、それに、俺には愛花が居るからいいや。」

アキコ「……翔太郎君がそこまで腐っていたとは思わなかったよ。」

翔太郎「はあ？なにいつてんだよお前。」

アキコ「相棒のフィリップ君が連れ去られたのに、翔太郎君は何も思わないの？どっちの方が大切くらい翔太郎君でも分かるでしょ？」

翔太郎「うゝん、愛花だろ」キリッ

アキコ「もういい、私1人で行く。」

翔太郎「おう、頑張れな」

アキコ「・・・ねえ翔太郎君本当にいいの？そこは、待てよお前だけにいい格好させるかよ俺も行くぜくらい言ってみなよ。」

翔太郎「いや、女の覚悟に、水をさすわけにはいかないだろ。な、愛花」

アキコ「こんな物があるから、翔太郎君が駄目になるんだ。そんな翔太郎君修正してやる！」パシィ

翔太郎「プレッシャーで体が動かせなかったと？やめろ、俺の愛花に何するつもりだ。やめろおおおお。」

アキコ「こんな物があるから、こんな物があるからあああああ！」「バキィィィ

翔太郎「あ・・・ああ、なんてこつたい。」

比奈『結局、無理矢理壊すんだ・・・』

翔太郎「てめえ、愛花の弔い合戦だ。死ぬ覚悟は、できてるんだろうなア？」

アキコ「なによ、そんな物また買えばいいじゃない。でも、フィリップ君は死んだら戻ってこないんだよ？翔太郎君はそれでもいいの？こんなに言っているのにまだフィリップ君よりもそんな物が大事だって言うならまずはその幻想をぶち殺す。」そげパンチ

翔太郎「あべしっ!!」

翔太郎「俺が間違ってた・・・フィリップはこんな物とは比べられないくらいの思い出を沢山くれていたのに、アキコ今まで迷惑かけたな。」

アキコ「ううん、わかってくれればいいんだよ翔太郎君。さ、フィリップ君助けに行くよ!!」

翔太郎「ああ、待ってるよフィリップ!!」

比奈「こんなでいいのかな？」

映司「飽きたんじゃないですかね？」

比奈「これからフィリップ君も助けに行かなきゃいけないしね・・・」

翔太郎「おい、そういえばフィリップどこにいるんだ？」

アキコ「ちよっと待ってて・・・」ピポパ・・・プルルル

アキコ「あ、フィリップ君？どこに居るの？・・・うん、うん、えー？あーはいはい、りょーかい。すぐ助けに行くからね、待ってて、フィリップ君」

アキコ「翔太郎君、分かったよ！屋上だって。あと寒いから早くしてだつてよ。」

翔太郎「ああ、任せな!!」

照井「ここを通りたければ、俺を倒してからにしてもらおうか。左」

翔太郎「な、お前知ってるのか？フィリップが捕まっているんだぞ？」

照井「ああ、知っている。俺も元ねばーだからな。フィリップを連れて行ったのはねばーという組織だ。」

翔太郎「お前、フィリップを連れて行ったのは、そいつらだって知っててやってるのかよ。お前それでもいいのか？」

照井「ああ、俺はそのためにフィリップに、近づいたのだからな。」

翔太郎「それでも、ずっとフィリップと過ごしてきて、なんとも思わないのかよ。なんとも思わないっていうならアキコからうけつくだぞげぶパンチだああ。」

照井「ふつ、そうかそうだったな。俺は、ずっとこんな仲間が欲しかったのかもしれないな。」

翔太郎「そうか、お前は気付いてないかもしれないがもうそんな物とづくに手に入ってたんじゃない？」

照井「なるほどな、お前に教えてもらうとは俺も落ちたものだな。いけ、左。フィリップは、屋上に居る。」

翔太郎「うん、知ってる。」

堂本「ハアアアア!!」

翔太郎「ホアア・・・」

堂本「そうじゃない、そうじゃないんだ?」

堂本「ハアアアア!!」

翔太郎「ホアアアア!!」

堂本「合格だ。通れよ。」

翔太郎「・・・師匠。俺、師匠の分も頑張ります。」

堂本「ああ・・・これで安心していける、ガハッ」

翔太郎「師匠、師匠おお。どうしてこんなになるまで・・・」

堂本「昔の古傷がちよつとな・・・」

数分前

比奈「・・・」ボコボコ

堂本「ちょ、い、いたい。いたいですって勘弁してください。」

比奈「今度から相手見てもの言えよな、わかったか。」

堂本「は、はい。自分調子こいてました。すいませんでした。」

堂本「俺は、勝てなかったがお前なら勝てる翔太郎！」

翔太郎「ホアアアア！！」

堂本「ハハッ、いい返事だ。行け、屋上でフィリップが待ってる。」

翔太郎「ホアアアア！！」

芦原「・・・ゲームスタート。」カキカキ

翔太郎「・・・え？これ読めって？えゝとなになに・・・ジャンケン三回勝負をして勝てたら通っていいです・・・か。」

照井「左、ゲームセットまでのカウント（どっちが何回勝ったかみたいな感じ）は俺が数えてやる。」

翔太郎「ジャンケンポン！！」×3

芦原「・・・ゲームオーバー。」ガクッ

翔太郎「え？まさかストレート勝ちするとはなあ。」

芦原「・・・」カキカキ

翔太郎「なにになに、屋上でフィリップが待ってるってこれみんな、言わなきゃいけない決まりでもあるのか？」

レイカ「待ってたよ。あんたがここまで来るの。」

翔太郎「で、次はなにするんだ？」

レイカ「うーん。」

翔太郎「考えてなかったのかよ。」

レイカ「だって来るの早いんだもん。」

翔太郎「さっきは待ってたとかいってたくせに・・・」

翔太郎「早くしてくれよ、こっちは相棒待たせてるんだ。」

レイカ「ちょ、そんなに急かさないでよ。こっちだって急にやって欲しいって言われたんだから。うーん、じゃあ、100m走？」

翔太郎「あーじゃあそれでいいや。」

レイカ「スタート前は、床に伏せてスタートと同時に立って走る、これでいい？」

翔太郎「おう！うわ、床つめてえ。」

レイカ「なんつった？」

翔太郎「つめてえ？」

レイカ「私の体が冷たいのは心があつたかいからだあああああ？」
バキイイ

翔太郎「ちょ、誰もお前の事いつてな・・・」『も、モロに入つた・
・これは死ねる。お父さん、お母さん先立つ不幸をお許し下さい。』

」

フィリップ「早くしろおお、どうなつても知らんぞおお！！」

翔太郎「ハッ！！なんだ、夢か・・・」

フィリップ「翔ちゃん、翔ちゃん、翔ちゃん、翔ちゃん。」

翔太郎「え？なにお前怖いんだけど・・・」

フィリップ「翔ちゃん、翔ちゃん、翔ちゃん。」ペチペチペチ

翔太郎「ちょ、いたいって、いたいいたい。」

真里奈「翔ちゃん、翔ちゃん。」ペチペチ

翔太郎「ハッ！！夢か・・・っていたいって！！」

真里奈「翔ちゃん、廊下で倒れてたけどどうしたの？」

翔太郎「いや、びくつくりで、夢にフィリップと言われながら翔ちゃんされるとはペチペチした」。

真里奈「翔ちゃん、なにいつてるの？」

翔太郎「・・・そうだった、フィリップ、フィリップはいずこに。」

真里奈「え？フィリップ君？知らないなあ。」

翔太郎『ま、まさかまだ屋上にいるのか？』

翔太郎「わりい、フィリップ、フィリップが俺を待っているんだじゃあな。」

真里奈「待つて、実は翔ちゃんの事が好きだったの。」

翔ちゃん「・・・え？」

真里奈「翔ちゃんは、私の事嫌い？」

翔ちゃん「いや、いきなりいわれてどうすればいいのか・・・」

真里奈「・・・ねえ、いいでしょ？」ピタ

翔ちゃん「ちょ、くっ付くな、胸が重い！！え？胸が重い・・・」

翔太郎「ハッ！！・・・また夢、ループって怖くね？てか、なんでお前は俺の上に座ってんだ！降りろ！！」

レイカ「だってあんたが起きないから。というかこついう場合、むしろ感謝するんじゃないの？」

翔太郎「誰が、尻に敷かれて興奮したって言ったんだよ！」

レイカ「・・・あの、近づかないでくれる？」

翔太郎「そうゆう話ふってきたくせになに？その反応、傷つくんだけど。」

レイカ「あー、ごめんね？」

翔太郎「というか、お前にだけやけに尺とってどう終わらす気だ？ふざけんなよ。」

レイカ「あー、じゃあ負けでいいや、で？これ言っただけ？屋上でフィリップが待ってる。」キリッ

翔太郎「・・・うざっ！とはいわないでおこつ。」

レイカ「聞こえてるけど？」

ばああああん

翔太郎「フィリップ？」

フィリップ「翔太郎？」

翔太郎「てめえ、フィリップに、なにさせてやがんだ？」

大道「見てわからないのか？テストで赤点を取ったからな。その課題をやらせているんだよ、データ人間と呼ばれるこいつの頭脳なら楽勝だろ？」

翔太郎「それが、連れ去った理由だって言うのか？」

大道「ああ、そうだ。」

フィリップ「くそつ。もう、文字を見ただけで身体が拒絶反応を起こすようになってしまった。う、うわあああ。」

翔太郎『連れ去った理由しょぼ・・・』

大道「どうした？恐怖で声も出ないのか？まあ、相棒がこの有様では仕方ないがな。」

翔太郎「フィリップを、解放しろ。」

大道「できない相談だな、それとも代わりにお前がこの課題の山を片付けてくれるのか？」

翔太郎「自分でやるという選択は、ないのか？」

大道「ないな？」

翔太郎「なら、力づくでやるまでだ、ホアアアア！！」

大道「な、なんという気迫。立っているのがやつとだ・・・だが、負ける訳にはいかん。シャアアアアア！！」

翔太郎「ホアアアアアアアアアア！」

大道「シャアアアアアアアアアアア！」

数分後

翔太郎「ハアハアハアハアハアハアハアハアハアハアハアハアハアハアハア」

ハア・・・」

大道「ハアハアハアハアハアハアハアハアハアハ
ア・・・」

翔太郎「なっ、ハアハアなかなかやるな。ハアハア。」

大道「お、お前ハアハアハアだつてハアハアなかなかやるな。」

翔太郎「だが、次で白黒つけようぜ。」

大道「ああ、かかって来い！！」

翔太郎「……ライダーパンチ、ホアアアア！」

大道「……」かちや、バンバンバン

翔太郎「拳銃だど・・・」ガクツ

フィリップ「翔太郎も、引っかかるなんてまだまだ子供だね、って」

あれ？翔太郎死んだ？あれ、ちょ義兄ちゃん、弾はいったまま撃つたの？」

大道「いや？ちゃんと抜いたぞ？」

フィリップ「義兄ちゃん、やっていい事と悪い事があるでしょ。」

大道「いや、本当に抜いたぞ？信じてくれよフィリップ。」

翔太郎「・・・」ムクツ

フィリップ「死人が生き返ったあああ、やったのは義兄ちゃんです。僕は関係ありません。勘弁して下さい。」土下座

大道「いや、弾はいつてないと思ってたんです。本当です殺す気は無かったんです。」スパイラル土下座

翔太郎「・・・はあ？なにいつてんだ。俺は、生きてるっての。」

フィリップ「いや、みんな、最初は自分は生きてるって思っただよ。」

大道「経験者は語るってか？」

翔太郎「いや、まじで生きてるから！！ほら、打たれたあとないだろ？服にも穴空いてないし。」

フィリップ「本当だ・・・よかった、人殺しの家族にならなくて。」

大道「だからいったじゃねえか。俺は殺してないって。」

フィリップ「じゃあ、なんで翔太郎打たれたあと倒れたままだったんだい？」

翔太郎「あ、あれは、お前らに引つかかってやったんだよ。」

大道「本当は、音にびびって気絶してたんだろ？正直に言えよお（笑）」

翔太郎「うるせえ。ホアアアア！！」

フィリップ「アハハハハ。」

シュラウド「はい、あーん」

莊吉「あーん。」

シュラウド「どう？おいしい？」

莊吉「ああ、おいしい。」

シュラウド「そう、作ったかいあったな、次は、何食べたい？」

莊吉「ア、ア、アレトコ……ベタイ」

シュラウド「どうしたの？調子悪いの？」

莊吉「・・・」シュウン・・・ガシャン

シュラウド「電池切れか、む、虚しい。」

第二回目（後書き）

今回自分的には結構長くなってしまいました。すいません。まあ才能も無いのに適当に書くなって事です。ね書きながら翔太郎どうやって戻すんだよとか、最後どうしよとか考えてるうちに若干グダグダになってしまいました。オチも弱いし、最後まで読んでくれてありがとうございます。

第三回（前書き）

Time judged all かけえ。早くCDでないかな。

第三回

亜樹子「今回からアキコ改め、亜樹子、出来る女にレベルアップします。」

翔太郎「わかりづらい、レベルアップだな。」

フィリップ「でもなんで、いちいちそんな事をいったんだい？」

亜樹子「だって、いきなり変わったら驚くかなと思って。」

翔太郎「じゃあ、今度こそ野球するぞ！！丁度今度、野球大会あるしな。」

亜樹子「さすがに、また無視するのは可哀想だからやってあげようか、フィリップ君。」

フィリップ「別にいいけど、僕たち3人はやるとして、後の人数はどうするんだい？」

翔太郎「そこら辺は抜かりはなあってい。えーと、俺だろ？亜樹子にフィリップ、照井、サンタちゃん、ウオツチャマン、クイーン、エリザベス、あとは・・・真里奈でいいか。あと、監督に MARIA さんと呼ぶって事でどうだ完璧だろ。」

フィリップ「MARIAさんだって？翔太郎、見直したよ。」

翔太郎「見直したって何だよ・・・」

亜樹子「翔太郎君の、普段の行いが悪いからだよね、フィリップ君。」

フィリップ「そうそう。でもこれ、主催の所謎の財団Xって明らかに怪しいよ。出るのやめない？」

翔太郎「バカヤロー、怪しすぎて逆にギリギリセーフなんだよ。それに、優勝したら、賞金10億だぞ？」

亜樹子「10億って・・・本当？」

フィリップ「うーん、本当にくれるのかな？」

亜樹子「10億あつたら・・・翔太郎君、フィリップ君絶対に優勝するよ?」

当日

翔太郎「こ、こねえ。サンタちゃんもウオッチャマンもクイーン、エリザベス、真里奈誰も来ねエ。ついでにマリアさんもこねえし。」

亜樹子「ちょっと、ちゃんとみんなに確認とった？」

翔太郎「いや、どうせみんな暇だろうなと思って・・・」

亜樹子「ありえないよ、翔太郎君・・・」

フィリップ「ちょっと、話が違うじゃないか翔太郎。今日はマリア

さんがくると聞いて勝負パンツはいてきたのに。どうしてくれるんだ、翔太郎。」

亜樹子「勝負パンツって・・・フィリップ君。」

翔太郎「フィリップ、心配すんな来てもそんな事にはなんなかった。」

照井「待たせたな。みんな」

亜樹子「あ、竜君。よく来てくれたね。」

照井「まだ、全然揃ってないなどという事だ？」

亜樹子「実は、翔太郎君、相手の予定確認しないで入れちゃったらしいんだよね。」

照井「なんだと？それではどうするんだ？」

フィリップ「そうだよ、 MARIAさんくると聞いて今日は勝負p亜樹子「それはもう聞いたからいいよ、フィリップ君。」

亜樹子「うーん、でも本当にどうしよう。大会開始まで時間がないよ。」

翔太郎「そうだよなあ。どうすっかな」

フィリップ「そもそも、翔太郎がやりたいっていったんじゃないか。それなのにメンバーは揃わない、MARIAさんは来ないで散々だよ。もっと計画を練りなよ。」

翔太郎「そこまでいう事ないじゃねえか。それにお前もマリアさん、マリアさんうるせえんだよ。」

亜樹子「二人とも喧嘩はやめなつて。」

フィリップ「大体、翔太郎が野球やろうつていわなきや今頃マリアさんから、誘いの電話が来てキャツキャツウフフな展開になつてたかもしれないかったのに。」

翔太郎「それはないな。お前、妄想激しすぎ。」

フィリップ「何だつて？もう一回言つてみなよ、翔太郎。」

翔太郎「んだとお？」

亜樹子「もう、本当にいい加減にしなよ二人とも。」

翔太郎「亜樹子は、黙つてろ。これは、俺とフィリップの問題だ。」

亜樹子「な、なんですつて？私は、二人の事を思つていつているのに。」

フィリップ「そうだよ。アキちゃん、これは僕たちの問題だ。」

照井「これは、野球どころではないな。」

亜樹子「大体、翔太郎君がもっとしっかりしていたらよかつたのに。」

翔太郎「なんだとお？もつかいいってみろ！！」

亜樹子「何度でも言っただけよ、翔太郎君がもっとしっかりして
いたらよかったのに！」

フィリップ「なんで、僕の周りの人たちはこんなのはっかりなんだ。
マリアさんに会って癒されたい。」

???「・・・」バンバンバン

照井「な、拳銃だと？誰だお前達は！！」

カチッヒート！！

???「人目を奪うこの美貌！」

カチッメタルウー！！

???「メツチャ強いぞ、俺達は！」

カチットリガー！！

???「・・・特になし。」

カチツルナア！！

「ルックス良ければいただきます！（男限定）」

カチツエターナル！！

「えっと、・・・さあ、地獄を楽しみなあ！！」

翔太郎「か、かつこいい？」

フィリップ「君達は誰だい？」

「俺達はNEVER。話は聞かせてもらった。その足りない、五人のメンバー俺たちが出よう！」

照井「ねばーだと？」

「ちがう、NEVERだ。」

照井「だから、ねばーといっているだろ。」

「ちがう、NEVERだ。」

照井「だから、ねばーといっているだろ。」

「全然ちがう、NEVER。」

照井「どうちがうんだ、ねばー」

???「ちがうちがう、リピートアフタミ、NEVER、はい。」

照井「ね、ねばあ。」

???「ちがうちがう、全然と亜樹子「もういいから、それ。」

亜樹子「で？名前はなんていうの？」

大道「フィリップ、ひどいじゃないか。わかんないなんて。」

フィリップ「あ、義兄ちゃん！てことはほかのひとも？」

翔太郎「フィリップ、フィリップ！！」

フィリップ「どうしたんだい？翔太郎。」

翔太郎「フィリップ、これなんてどうかな？」

カチツジョオオカアア！！

翔太郎「情熱たgってフィリップ聞いてくれよ。」

フィリップ「まったく、翔太郎は子供だな、ねえ照井リョカチツア
クセル！！

照井「あんた、ばkってちがうこれはだな・・・」

フィリップ「いや、気にしないから。」

亜樹子「うん、見なかったことにしとくよ。」

翔太郎「これで、あとは監督だけだな。」

フィリップ「しかし、マリアさん以上の、人材となると困ったな。居ないんじゃないかい？」

大道「心配するな、監督もちゃんと連れて来た」

亜樹子「ほ、本当？」

レイカ「しかも、フィリップ君の好きなマリアさんに似ている人よ？」

フィリップ「何だって？それは本当かい？」

大道「それでは来てもらおうか。」

京水「いらっしやい、いらっしやああい。」

大道「それでは、どうぞオオオ？」

シュラウド「来人・・・」

フィリップ「・・・チェンジ。」

シュラウド「来人・・・ひどいじゃない・・・」

フィリップ「ちょっと、これはどういうことだい？私聞いてな〜い。」

亜樹子「ねえ、フィリップ君。それ私の真似？」

大道「言ったじゃないか、おふくろに似てる人って。お前最初おふくろとシュラウド間違えただろ。」

フィリップ「あのときは、本当マリアさんにひどいことをしてしまっただけじゃないか。おふくろ気にしてないってよ。」

フィリップ「そうか、ならよかった。」

翔太郎「これで、人数は揃ったな。一時はどうなるかと思ったけど。」

亜樹子「じゃあ、次は、誰がどこのポジションか、決めようよ。」

翔太郎「まず、俺はエースで4番だろ？あとは、うーん、てきとーにくじでいいだろ。」

亜樹子「翔太郎君は、ほつといてピッチャーは、私だよね？」

フィリップ「アキちゃん、野球やったことあるのかい？」

亜樹子「うんうん、全然！打たれる自信あるもん。」

翔太郎「いばるところかよ・・・。」

大道「なら、フィリップはライト、翔太郎は、レフトこれは決まりだな。」

翔太郎「おい、外野って超暇そうなんだけどたまとんでくんのか？」

レイカ「なら、亜樹子ちゃんピッチャーにしたら飛んで来るんじゃない？」

翔太郎「あー、なるほど。その手があったか」

亜樹子「ちょっと、それどうゆうこと？この私が打たれるって？よからう、ピッチャー任された！」「計画どおり・・・くくく」

照井「なら、俺がキャッチャーをやるう。」

亜樹子「え、竜君がキャッチャー？」

照井「ああ、よろしくな、所長。」

亜樹子「う、うん。」「竜君、私と人生のバッテリーも組んでくれないかな？なんちゃってね。」

芦原「・・・なら、俺はショートをやる。」

大道「じゃあ、あとはてきとーに堂本はファースト、レイカがセクター、俺がセカンド。で、京水がサードだ。いいか？」

レイカ「あたしはいいよ。」

堂本「俺もいいぞ？」

京水「サードって強い打球が飛んで来るそうじゃない。私怖い、翔太郎ちゃん。」

翔太郎「ぎゃあああ、くっ付くな、馬鹿野郎！」

シュラウド「なら次は、打順ね。」

フィリップ「あ、まだいたんだ？」

シュラウド「来人、ひどい・・・」

亜樹子「たぶん、フィリップ君照れてるだけですよ。」

フィリップ「ちよっ、アキちゃん？」

シュラウド「そう・・・そうだったの。私もまだまだね。」

フィリップ「ちがうから、そんなことよりも打順決めようよ。」

翔太郎「ポジションは、譲ることになったがこれは譲れないな。俺が4番だろ？」

亜樹子「いや、どう考えても翔太郎君より、堂本さんの方があつてるでしょ。」

堂本「ハアアアア。」

翔太郎「ホアアアアア、こればかりは譲れないな。俺が4番だ！

！」

亜樹子「翔太郎君、何時ものことだけど面倒くさいね。じゃあ多数決にしようか。」

翔太郎「め、面倒くさい・・・だと？」

亜樹子「はい、じゃあ4番が翔太郎君じゃない方がいい人！」

翔太郎「はいはいはい！俺が4番の方がいいです！！」

亜樹子「じゃあ、全員手を上げたので、4番は堂本さんに決定！」

翔太郎「はあ？」

フィリップ「翔太郎気づかなかったのかい？翔太郎じゃない方がいいってアキちゃんはいったんだよ？」

翔太郎「だ、騙された・・・」

亜樹子「ちょっと、人聞きの悪いこといわないでよね。ちゃんと聞いてなかった翔太郎君が悪いんじゃない。」

翔太郎「てか、多数決とか反則、卑怯やり直しを要求する。」

亜樹子「翔太郎君だって、てあげたくせに。」

翔太郎「だから、あれは間違ってたんだって、だからやり直そ？」

レイカ「あんた、いつまでもグダグダいつて小学生以下？」

翔太郎「なんだとお？」

フィリップ「翔太郎、抑えて抑えて。じゃあアキちゃんはピッチャーだから、打順9番がいいんじゃないかな？」

大道「そうだな、9番が1番打順まわってこなさそうだしそれでいいんじゃないか？」

亜樹子「私はそれでいいよ。」

堂本「なら、1番は芦原でいいんじゃないか？目いいし。」

大道「だな、いけるか？」

芦原「・・・了解。」

大道「じゃ、俺、5番もーらい。」

照井「なら、6番は、俺がもらう。」

フィリップ「7番あたりでいいかな。」

京水「なら、あたしが3番ね。」

レイカ「じゃあ、私が2番か。」

翔太郎「何で俺が、下位打線の8番なんだよ！それで何でお前が2番なんだよ！」

レイカ「なんでって私の方があんたよりうまいからに決まってるじゃない。それにあんた打てるの？」

亜樹子「そうだよ、翔太郎君3、4番で点を取るためにも1、2番はなるべく塁に出なきゃだめなんだよ？」

翔太郎「う、打てるさ、たぶん。」

大道「いや、無理だな。」

照井「左、背伸びをするな。お前はお前に出来ることをするんだ。」

京水「流石に援護できないわ。ごめんね？翔太郎ちゃん。」ガシッ

翔太郎「だから、くっ付くなって言ってる。馬鹿野郎！」

フィリップ「落ち着くんだ、翔太郎！8は、4の倍数だろ？」

翔太郎「ああ、それがどうしたんだよ。」

フィリップ「つまり・・・」

翔太郎「つまり？」

フィリップ「表向きの4番は、4番だが、8番とは裏の4番ってこと。」

翔太郎「な、なんだと？それは確かか？」

フィリップ「ああ、本当さ。皆翔太郎の事をボロクソに言っただけ
ど実は皆期待してるんだよ。ねえみんな！」

大道「ああ、俺達は皆お前の事期待してんだぜ？」

亜樹子「そつだよ！翔太郎君にしか8番は務まらないよ。」

照井「左、お前は8番の器だ！！」

レイカ『まだだ・・・まだ、笑うな・・・しかし。』ふふっ

堂本「ハアアアア。」

芦原「・・・8番は、任せた。」

京水「翔太郎ちゃんは、皆に愛されてるのよ？もちろんあたしも
ガシッ

翔太郎「くっ付くなと何度言ったらわかるんだ！馬鹿野郎！！」

フィリップ「翔太郎にしか8番は無理なんだよ、やってくれるね？」

翔太郎「ああ、8番にそんな設定があつたとはな。俺に任せとけ。」

亜樹子「ねえ、そんな設定本当にあるの？フィリップ君。」

フィリップ「あるわけないじゃないか。つまり・・・」

亜樹子「つまり？」

フィリップ「そんな事に引っかかる翔太郎は・・・」

亜樹子「翔太郎君は？」

フィリップ「正真正銘の馬鹿って事さ。」

亜樹子「ですよー」

大道「じゃああとはチーム名だな。」

フィリップ「いや、もう決まってるみたいだよ？アキちゃん、このHって何の略だい？」

翔太郎「そんな事もわからないのか、フィリップ。それは、左翔太郎と愉快的仲間達、もしくは、ハードボイルドな翔太郎たちのHだろ？」

亜樹子「ちがうよ、チーム風都だよ。」

翔太郎「悪くはないけど、俺がさっき言った方がいいと思うけどなあ。皆どう思う？」

レイカ「・・・Hって／＼／」

翔太郎「お前も小学生以下だよなあ、そうだよなあ？おい！」

フィリップ「まあまあ、いいんじゃないかな。チーム名アキちゃんので。」

亜樹子「でしょ？シンプルイズベストだよねえ。」

アंक「おい、映司早くしろ？」

比奈「アंक、やけに気合入ってるね。」

映司「まあ、10億あったらアイスいっぱい買えるからだろうね。あーでも、10億あったらいたいパンツ何枚買えるのかってのは気になるかも。」

比奈「へえ、そうなんだ。」

ガメル「おれやきゆうするのはじめて。たのしみ！」

メズール「あらあら、じゃあ頑張らなきゃね。」

カザリ「僕も初めてだけど、何とかなるよね。」

ウヴァ「あんまり、可愛い子いないな。やっぱ1番はメズールか・・
・」『俺も初めてなんだ。』

後藤「何で俺がこんなことを、しかも、凜子取られたまんまだし・・
・」

比奈「あ、あそこに居るの翔太郎さんたちじゃない？」

映司「本当だ。あの人たちも出るのかな。」

アंक「会つと面倒だ。ほつとこつぜ！」

亜樹子「あ、おーいアंकく〜ん。」

アंक「見つかった・・・」

映司「見つかったもんはしょうがないから行こつ。」

比奈「だね。」

翔太郎「おう、お前らも出るのか？」

映司「うん、アंकがどうしてもって聞かなくて。」

アंक「10億だぞ？10億！そんだけあつたらアイス食い放題じゃねえか！！」

翔太郎「はは、でこれでメンバー全員？」

アंक「誰がお前に教えるか！あつち行け。」

映司「いいから、アंक。えーと俺に、比奈ちゃん、アंक、カザリ、ウヴァ、ガメル、メズール、それに、後藤さん。」

映司「翔太郎さんたちのチームは？」

翔太郎「あつちにいるぜ？」

映司「あ、本当だ。ってうわっ。」

アंक「どうした、映司。ってげ。なんであいつが……」

京水「あら、映司ちゃんにアंकちゃんじゃない。あなたたちもでるの?」

比奈「知り合い?」

映司「まあ、ね」

ウヴァ「あ、あつちのチーム可愛い子が居る。」『こんな所でも知り合いと会っなんて世の中狭いもんだな。』

亜樹子「かわいいだなんて、本当の事でも照れちゃうよ」

翔太郎「亜樹子がかわいいって冗談だろ?」

亜樹子「翔太郎君が見る目ないだけだよ。それに引き換えあつちの子は見る目あるなあ。」

翔太郎「いや、あいつが見る目ないのか、亜樹子の勘違いか、さあどっち?」

フィリップ「うーん、僕は、アキちゃんの勘違いだと思うけどなあ」

亜樹子「フィリップ君まで、ひどい!」

照井「所長、俺は所長の事かわいと思うぞ。」

亜樹子「竜君・・・」

照井「所長・・・」

翔太郎「なぐに二人で良い雰囲気だしちゃってるんだか、で、本当の所どうなんだ？その緑。」

ウヴァ「あの綺麗な太ももで挟まれない。」『俺にはウヴァって名前があるんだよ。』

カザリ「こいつの名前はウヴァっていうんだよろしくね。」

翔太郎「まあ、何にせよ、これでウヴァが言ってたのは亜樹子じゃなくてレイカって事になったな。」

亜樹子「ちよつと、まだ太ももと言っていないじゃない。何でそうなるのよ！はっ、まかさ。」

フィリップ「ああ、そのまかささ。翔太郎も、レイカさんの足綺麗って思ってたって事さ。」

翔太郎「ち、ちげえよ。つつか、なんだよまかさって。」

レイカ「へえ、そんなめを見てたんだ。翔太郎のえっちい。」

亜樹子「まあ、翔太郎君だから仕方ないよ。」

フィリップ「今度から翔太郎とは二人きりにならないほうがいいね。危険だ。」

翔太郎「こ、こいつら。」

大道「まあ、その話はそこで終わりにしてあの、俺気づいたんだけど、」

映司「どうしたんですか？」

大道「いや、お前らのチーム8人しかないじゃないか。」

映司「え？八人でやるんじゃないんですか？」

翔太郎「なわけないだろ！」

フィリップ「え〜と、ポジション言ってみてくれる？」

映司「いいですけど、えーとまずピッチャーにキャッチャー、ファースト、セカンド、サード、レフト、ライト、センターの8個じゃないんですか？」

亜樹子「一個足りないよ・・・」

映司「えー、なんだろ。」

翔太郎「ショートだよ、ショート。」

フィリップ「こんなんでは試合出来るのかな？」

亜樹子「で、足りない人数はどうするの？」

映司「うーん、どうしようか。」

後藤「伊達さんと監督に真木さんでどうだ？」

映司「お、後藤さん。いいですね。」

比奈「なんとかかなりそうですね。」

アंक「たく、しっかりしてくれよな！映司。」

亜樹子「というか翔太郎君、最初にメンバー聞いた時に気づかなかったの？」

フィリップ「そこは、翔太郎だからさ、許してあげなよアキちゃん。」

亜樹子「そうだね。」

翔太郎「そうだねってなんだよ！」『そんなことがあり、なんだかんだで最初の試合は俺たちのチームと映司たちのチームが戦う事になった。』

シユラウド「ちゃんと自分のポジション覚えてる？」

1番 芦原・ショート

2番 レイカ・センター

3番 京水・サード

4番 堂本・ファースト

5番 大道・セカンド

6番 照井・キャッチャー

7番 フィリップ・ライト

8番 翔太郎・レフト

9番 亜樹子・ピッチャー

シュラウド「わかったかしら？」

フィリップ「だれも教えてなんてたのんでないじゃないか。」

シュラウド「来人・・・」

亜樹子「あー、ここまで来るのけっこう長かったから作者自身誰がどこのポジションとか打順か、忘れかけてたから丁度いいって言っていましたよ。」

シュラウド「ありがとうね、亜樹子ちゃん。」

翔太郎「亜樹子のやつなに言ってんだ？」

フィリップ「さあ？」

伊達「遅くなっただなすまんすまん。」

真木「キヨちゃんのお洋服選んでたら遅くなりました。」

映司「いや、間に合ったんですからいいですよ。あ、打順とか決めといたんでみといてください。」

伊達「おう、どれどれ？」

1 番 カザリ・センター

2 番 ウヴァ・レフト

3 番 伊達・サード

4 番 比奈・ライト

5 番 ガメル・セカンド

6 番 後藤・ショート

7 番 映司・キャッチャー

8 番 アンク・ピッチャー

9 番 メズール・ファースト

アンク「なんで俺が8番なんだよ。」

映司「しょうがないじゃないか、くじできめたんだから。それいつたら俺だってキャッチャー嫌だよ。ガメルとかの方があつてと思うし。」

伊達「く、くじできめたんだ・・・」

翔太郎「じゃおれたちが先攻だ。頑張れよ！」

芦原「・・・ああ。」

映司「行くぞ、アंकピッチャー頑張れよ。」

アंक「アイスいっぱい食べるんだそのためならやってやるぞ。」

審判「プレイボール!!」

アंक「いくぜ。おらぁ!」ぶんっ!

芦原「・・・」カキーン

アंक「・・・あ。」

映司「アंक、ドンマイドンマイまだ一塁。」

亜樹子「おお、さすが!次は、レイカちゃんだね、がんばって。」

レイカ「うん。」

アंक「女だからって手加減しないからな。」ぶんっ

キンッ

アंक「マジかよ・・・」

大道「おお、次おまえだろ？京水。」

京水「ええ。行ってくるわ。」

翔太郎「よし、このままいけ！」

アंक「こ、こいつはおい。」

京水「なにかしら。」

アंक「映司がお前の事好きだつてよ。」ぶんっ

京水「な、なんですって？」

審判「ストライク。」

アंक「このままいくぜ。」ぶんっ

京水「でも、私には克己ちゃんが・・・」

映司「なんか、ずるいような気がするな。」パシン

審判「ストライクツー。」

アंक「あと一球！」ぶんっ

京水「わ、わたしも映司ちゃんの事嫌いじゃないわ。」だきっ

映司「え、ちょ、ちょっと。」

審判「デットボール。」

アंक「はあ？あいつあたりにいったようなもんだろ？が！ふざけんな？」

審判「ルールは私だ！」

アंक「なにいつてんだこいつ。」

翔太郎「たく、あいつなにやってるんだよ。」

亜樹子「でも満塁だよ？」

比奈「アंक、落ち着いて〜」

アंक「わかってるよ、行くぞ、映司！」ぶんっ

堂本「ハアアア。」カキン！！

ガメル「あ、おれしってる。これホームランっていうんだ。」

メズール「あら、ガメルは頭がいいわねえ。」

翔太郎「おお、スッゲー」

亜樹子「ほら、やっぱり堂本さんの方がよかったでしょ？」

大道「よし、これで4 - 0だな。」

亜樹子「竜君、頑張つてね。」

照井「ああ、所長。」

大道「俺を忘れるな。」

亜樹子「あ、そうだった、ごめんね。」

ぶんっ

キンッ

大道「よし、一罌。」

亜樹子「じゃあ、今度こそ頑張つてね。竜君！」

照井「ああ」

映司「たかが4点すぐ取り返せるって。だから頑張れよアंक。」

アंक「ああ、」ぶんっ

照井「ハアア！」キンッ

カザリ「流石にもう点はあげられないね。」パシッ

メズール「カザリ、よくとったわね。」

ウヴァ「メズールに褒められるとは羨ましい。」『これでワンアウ

トだ。がんばるぞ』

照井「みんな、すまん。」

亜樹子「まあ、しょうがないよ。」

フィリップ「次は僕の番か。」

アंक「やっとで、アウトとれた。」

映司「ああ、あと二つアウトとるぞ?」

フィリップ「あんまり期待しないでね、みんな。」

アंक「オラっ。」

フィリップ「くっ、」キンッ

審判「ファール。」

アंक「オラっ。」ぶんっ

映司「おお、アंक調子出てきたんじゃないか?」パシッ

審判「ストライクツー。」

アंक「おう、これで終わりだ。」ぶんっ

審判「ストライク。バッターアウトオオ!」

フィリップ「みんな、ごめんね。」

亜樹子「気にしないでよ。フィリップ君。だれにだってあるよ。」

翔太郎「ああ、俺に任せとけ。」

レイカ「打っただけでいいから。」

亜樹子「そうそう、無理しないでつなげるだけでいいから。」

翔太郎「任せとけて!」

翔太郎「お前らは、」

ストライク

翔太郎「つなげるだけでいいといったが、」

ストライクツ―

翔太郎「別にhストライク。バッターアウトオオオオオ!!」

翔太郎「アウトになっても良いんだよな?」

亜樹子「良くないよっ!!翔太郎君のバカア。」

アंक「なんだあいつ、シヨボいな。」

翔太郎「えゝと、みんなごめんね?」

亜樹子「翔太郎君ってまさか・・・」

フィリップ「僕もアウトになったから翔太郎の事言えないけど、まだその判断は早いと思うよ？」

亜樹子「そうだね、仮にも自分からやりたいっていったんだもんね。そんなわけないよね。」

フィリップ「うん。」

大道「ほら、今度は守りだぞ？亜樹子はピッチャー頑張れよ？」

亜樹子「うん、私のピッチング得とご覧あれ。」

堂本「ハアアア、まあ、ドンマイ次頑張れよ翔太郎。」

翔太郎「ホアアアア、はい、師匠！」

亜樹子「行くよ！！竜君！」

照井「ああ、所長！」

カザリ「ふーん、女の子がピッチャーなんだ。まあ、それなりに手加減してあげるよ。」

亜樹子「カッチーン。そういえば、亜樹子は打たれるとかほざいていたやつもいたね。いいよ、私の真の実力見せてあげよう。」

翔太郎「なにいつてんだか。どうせ打たれるんだろ？」

フィリップ「準備しときなよ？翔太郎」

照井「周りの奴らは気にするな。所長。」

亜樹子「うん。いつくよう！」ぶんつ

カザリ「な、なにに？」

照井「よ、予想以上に早い。」

翔太郎「すげえ。早い。」

フィリップ「アキちゃん、なかなか良い球を投げるだけど・・・」

映司「ノーコンだ・・・ってアंक大丈夫か？」

アंक「いてて、あのアマアノーコンってレベルじゃねえぞ？」

審判「ボール。」

アंक「おい、審判ふざけんじゃねえぞ？なに普通にボールいってんだ！当たったんだぞ？痛かったんだよお。」

翔太郎「どうすりゃボールがベンチの方に飛んでくんだよ。」

大道「これは、ひどいな。」

フィリップ「アキちゃん。落ち着いて」

亜樹子「ありやりや、失敗失敗。」

アंक「失敗？おい、聞いたか？人に物あてといてありゃ、失敗失敗。だってよふざけんな？」

亜樹子「あ、アंक君ごめんね」

アंक「ごめんね」で済むなら警察はいらないんだよ。ふざけんな？」

映司「アंक、ちょっと落ち着けて。」

比奈「そうだよ、落ち着きなつて。」

メズール「ほらほら、あとでアイス買ってあげるからその辺にしろきなさいな。」

アंक「絶対だかな？」

メズール「はいはい。」

ウヴァ「メズールさんとデート？羨ましい。しかもアイス買ってもらうとかこ、これは、間接キッスあるで？」『たく、アंकは子供だな』

比奈「いや、ただアイス買ってもらっただけでしょ・・・」

映司「にしても、アंकの中のアイスの価値ってどれくらい高いんだろう。」

レイカ「亜樹子ちゃん、打たせていこ？」

亜樹子「うん。」ふわっ

カザリ「もらいつ！」カキーン

フィリップ「翔太郎！」

翔太郎「任せろ！！」スカッ

大道「おいおい、マジかよ。」あのボールのどこまでダッシュ！

翔太郎「ドンマイ！」

フィリップ「って翔太郎だろ？」

亜樹子「一気に二塁までいかれちゃったよ・・・」

照井「心配するな。まだ一回それに相手は0点だ。まだ焦る時じゃない。」

亜樹子「そうだね。」

メズール「次は、ウヴァでしょ？頑張つてね。」

ウヴァ「メズールに褒められた。これは打たねばなるまい。」『まあ、あんまり期待するなよ？』

バシンバシンバシン

審判「ストライクスリー。バッターアウトオオオオオオ!!」

ウヴァ「メズールに叱られるならそれもまた良しっ!」『すまんな、みんな。』

メズール「まあ、まだ一回だから、気にする事ないわよ?」

ウヴァ「可愛いし優しい!メズールはきつと目にいれてもいたくないんだろっな。」

比奈「さっきからこの人なにいつてるの?」

映司「さあ?」

アंक「まあ、友達にたくない部類のやつってのははっきりしてるけどなあ。」

亜樹子「やった〜アウト一個とったよ〜」

照井「ああ、その調子だ、所長。」

伊達「さーて、点稼ぎに行きますか!」

映司「伊達さん頑張ってください。」

伊達「おうよ。」

亜樹子「おりゃ。」ぶんっ

伊達「よいしょおお。」キンッ

フィリップ「翔太郎次は頼むよ?」

翔太郎「だから、任せとけて!」スカッ

大道「やっぱりなあ?」ダッシュ!

アंक「あいつ、前も取り損ねてたよな。」

映司「あー、そうだった?」

カザリ「よし、これで1点返したつと。」

比奈「おゝ。」

亜樹子「やっぱり翔太郎君って・・・」

フィリップ「ああ、翔太郎は・・・」

亜樹子・フィリップ「すごい下手だ?」

フィリップ「しっかりしてくれよ、翔太郎!」

大道「ちよつと翔太郎寄りにいよ。」

アंक「おい、次お前の番だよな?」

比奈「うん、そうだけど・・・どうかしたの？」

アंक「レフトよりに打てってやっぱりお前はいいか。」

比奈「？まあいつてくるね？」

映司「比奈ちゃん頑張ってるね」

亜樹子「おお、次は比奈ちゃんか。なら手加減してあげるよ」

比奈「いえ、手加減なんていららないですよ？」

亜樹子「いいからいいから」亜樹子に任せて」ぽいっ

比奈「じゃあ打ちますよ？」カキーン！！

フィリップ「あ・・・」

翔太郎「場外ホームランだとおお？」

大道「なんだあいつ、化け物か？」

レイカ「すご・・・」

亜樹子「比奈ちゃんすごいな」

映司「比奈ちゃん凄いな！」

アंक「あれ俺の妹なんだぜ？ 凄いだろ？ なあなあ凄いだろ？」

映司「・・・凄いけど、アंकの妹ってわけじゃないだろ・・・」

メズール「比奈ちゃん凄いわね、アंकが自慢したくなるのもわかるわあ」

後藤「もう、あの子だけで良いんじゃないかな？」

カザリ「まあ、これで4 - 3だね。」

ガメル「つぎおれ」

メズール「頑張つてね。ガメル。」

亜樹子「どうしよ、1点差になっちゃったよ。」

照井「大丈夫だ。所長。まだ一回だ。」

亜樹子「そうだね。」ぶんつ

ガメル「いけ」カキーン

大道「はいはい、任せて」パシッ

ガメル「あー、とられたー」

照井「よし、あとアウト一個だ。」

後藤「次は俺か。」

比奈「後藤さん頑張ってください。」

後藤「よし、」こん

翔太郎「バントかーショボいな」

レイカ「当たりもしなかったあんたにいわれたくはないと思うわよ？」

翔太郎「なんだとお？」

レイカ「なによ。」

映司「俺だ、」

アंक「おい、映司！レフトより打て。理由は聞くな。とりあえず打て。」

映司「ああ、レフトな？右、だっけ？」

アंक「馬鹿！レフトは左だ？」

映司「ああ、そうだったそうだった。」

比奈「映司君、パンツだけじゃなくて勉強もしたほうがいいよ？」

映司「う、うん。」

亜樹子「じゃ、いつくよー。」ぶんっ

映司「えーととりあえず、レフトだったよな。」キンッ

フィリップ「翔太郎行ったよ。」

翔太郎「おっしゃー」スカッ

フィリップ「予想どおりだったけどね。」

大道「だよなー。」

亜樹子「ちよつと翔太郎君しっかりー。」

比奈「やりましたね、同点ですよ。」

アंक「あとは、俺が打つだけだ。」

亜樹子「このー」ぶんっ

アंक「いてえ？」ごん

審判「デットボール！」

亜樹子「あ、ごめんね？」

アंक「またか、この野郎！」

亜樹子「野郎じゃないよ、アंक君！こっ見えても女の子なんだか

らね？」

アंक「そういう事じゃねえよ！お、女を本気で殴りたいと思ったのは生まれて初めてだ・・・」

比奈「でも、これで1、2塁ですよ？もっと点とれるんじゃないですか？」

カザリ「いや、でも次はメズールだよ？しかもツーアウトだし。」

ウヴァ「おい、メズールが打てないってのか？たとえ打てなくても可愛いこれで十分だろ？」『だな、この回はこれでおしまいか・・・』

アंक「おい、俺がボールに当たってまで繋いだんだ！打てなかったらアイスだかな？」

亜樹子「見た目、こんな女の子だけど、比奈ちゃんのパターンあるからなあ。」ぶんっ

審判「ストライク、」

亜樹子「あ、この子は普通なんかな？」

堂本「あ、あ、あんなのがそそそ、そんなにいてたまるかよ。」

亜樹子「よしっ！」ぶんっ

審判「ストライクツー。」

ウヴァ「おい、メスール打てなくてさつきから、喋ってないじゃないか。いいだろ？ちよつと打たせるくらい。かわいそうだと思わないのか？」

カザリ「ちよつと黙ろうか？」

審判「ストライクバッターアウトオオ。」

亜樹子「やつとでチェンジだよ・・・」

照井「いや、所長は良くやったと思うぞ？まだ同点いけるぞ。」

フィリップ「そうだよ。」

翔太郎「ああ、俺が点取り返してやるよ！」『そんなこんながあり、なんだかんだで俺のミス、俺のミス、俺のミスで5 - 10で最終回となった。』

翔太郎「げふん、えゝととりあえず、みんなごめんね？」

亜樹子「とりあえずなんでこんな下手なのに、野球やりたいって言ったの？」

翔太郎「でもさ、俺以外の責任もあると思うんだよ？」

フィリップ「いや、あっちのチーム明らかに翔太郎あなの存在に気づいてたよね。」

大道「あー、確かにレフトばっか狙ってたな。」

亜樹子「そろそろ翔太郎君いじるのやめようか。さ、私の番だから
いつてくるね？でも、やっぱり負けるのは嫌だよね。」

アंक「ははっ、これは勝ったな。」

メズール「油断は禁物よ？アंक。」

ぶんっ

キンッ

亜樹子「やった。一塁！」

芦原「・・・」キンッ

アंक「くそっ！」

映司「大事なのはホームをふませなければいいだけなんだから、大
丈夫だって、アंक。」

レイカ「まあ、確かに負けるのは嫌。」キンッ

カザリ「まあ、僕たちに勝てないのしょうがないよね？」パシッ

フィリップ「ああ。おいしい。」

翔太郎「えーと次は。」

京水「私よ？翔太郎ちゃん。」だきっ

翔太郎「うざい。」

アंक「おらっ！」ぶんっ

バシンバシンバシン

審判「ストライクバッターアウトオオ。」

京水「ごめんね？翔太郎ちゃん。」だきっ

翔太郎「・・・お前はいつからそれを左翔太郎だと錯覚していた？」

京水「え？こ、これは・・・理科室の人体実験人形？」

堂本「さて、おれの番か。」

映司「こいつは、4番だ。気おつけろ？」

アंक「ああ、わかった。」ぶんっ

堂本「ハアアアア。」こん

アंक「な、4番がバントだと？」

大道「満塁ね、ナイスな展開じゃないか。」

アंक「くそおおお。」ぶんっ

大道「絶望がお前たちのゴールだ！」カキーン！！

照井「ちょ、それ俺のパクリ。」

アंक「ホームランだと？」

映司「マジかよ。」

亜樹子「おお、一気にあと、1点差になったよ。」

大道「おし、照井もフィリップも出たし次はだれだ？」

翔太郎「俺だ!!」

亜樹子「負けるのは嫌だけど私たち頑張ったよね？」

レイカ「ええ、頑張った。」

翔太郎「なんで負けた気になってるんだよ。そんなんじゃ勝てる試合も勝てないぞ？」

堂本「いけるのか？翔太郎」

翔太郎「おう、いけるさ！」

亜樹子「だから、翔太郎君の自信はどこから来るんだろうね。」

レイカ「馬鹿だからしょうがないよ。」

翔太郎「よし、行ってくるぜ!」『くそ、ここまでの打率0さすがにこれ以上迷惑かけるわけにはいかないよな。』

アंक「なんだこいつか、なら打たれないな。」ぶんっ

翔太郎「当たれえ。」こん

審判「ファール。」

アंक「当てるとはなかなかやるな。」ぶんっ

翔太郎「うおおお。」こん

審判「ファール。」

亜樹子「翔太郎君なかなか粘るね。」

大道「おう、これはもしかするともしかするかもな。」

レイカ「もしかしちやいますかね。」

亜樹子「私は、信じてたよ。ベンチ出て行く時の翔太郎君の目マジだったもん。」

大道「こいつう、調子良いやつだな。」

アंक「くそつ。あいつ、もう、20球目だぞ？いつまでファール出してる気だ。」ぶんっ

翔太郎「いける、今の感覚で行けばいつか前に打てる。」こん

審判「ファール。」

アंक「ハアハア」

映司「すいません、タイムいいですか？」

審判「タイム！」

映司「どうした？アंक、疲れたか？」

アंक「別に疲れてねエよ。」

映司「なら、いけるか？」

アंक「でも、無理だ。もう打たれる。」

映司「なんだ？諦めたのか？」

アंक「諦めてなんかねえよ。」

映司「どっちだよ。」

アंक「どうせ、お前らもう俺じゃあいつ、抑えれないって思ってたんだろ？」

映司「何かつてに決めてんだよ。諦めてないとか言つて、一番諦めてるのはお前じゃないか。諦めたらそこで試合終了だぞ！」

アंक「じゃあ、どうすれば良いんだよ！」

映司「周りを見てみるよ。あいつらが諦めているように見えるか？あいつらがお前が打たれたからって責めるような奴らか？もし、お

前があいつらの事そんな風に見えるなら眼科にいったほうがいい、
良い所紹介してやるから。」

アंक「映司……」

伊達「そうだぜ？もつと俺達を信用しろよアंक。」

アंक「アंकだ……」

カザリ「そうだよ、べつに君が抑え切れるなんて思っ
てないしね。」

アंक「カザリ……」

ガメル「アंकともだち、おれたち信じろ」

アंक「ガメル……」

メズール「今まで貴方が迷惑かけなかった事があつたかしら？それ
に比べたら対した事ないわ。」

アंक「メズール……」

ウヴァ「メズールの言葉はいつも胸に響くなあ。」『そう
だぜ？お前が打たれても俺たちがカバーしてやるよ。』

アंक「ウヴァ……きめえ。」

後藤「おまえが、そんな調子だところちまで狂うんだよ。しっ
かりしてくれ。」

アंक「えっと・・・誰だっけ？」

比奈「アंक、お兄ちゃんの体使ってるんだからしっかりしてよね。」

アंक「比奈・・・」

映司「わかったか？アंक。みんなおまえの事を思ってるんだよ。だから、打たれたっていいじゃねえか。負けたっていいじゃねえか。だから、もっと俺達を信用しろよ。もっと頼れよ、アंक！」

アंक「たく、なに説教たれてんだよ。映司のくせに。」

映司「俺だって似合わないってのは知ってるよ。」

アंक「ははっ、わかってんならやんなよな。」

映司「よし、行けるか？アंक」

アंक「ああ、打たれても俺のせいじゃねえかな？」

映司「分かってるよ。」

映司「あ、タイム終了で。」

翔太郎「やっと、終わったか。さあ来いよ。」

アंक「いくぜ、魔球1号！」ぶんっ

翔太郎「あ、ありのまま今起こった事を話すぜ。！俺が球を打とう

としたら、アंकの腕を打っていた。アंकはマウンドで倒れてるし、てか刑事さんの、元の髪型ってあんなだったのか。」

アंक「いてえよ。」

映司「えつと、つまり球を腕ごとなげて、球を魔球みたいに動かそうとしたって事？」

アंक「失敗したけどな。」

映司「でも、球を打ったんだから、それでタッチしたらアウトになるんじゃない？」

アंक「そうか。」タッチ

翔太郎「・・・え？それってあり？」

審判「アウトオオ。ゲームセット！」

亜樹子「まさか、あんなにあっさり負けるとはねえ。」

翔太郎「だよなあ。でもあそこで俺たちが勝つっていうのもだめだよな。」

フィリップ「たしかにね。」

亜樹子「でも、よかったの？アंक君たちあのあと棄権したんでし

よ？」

アंक「腕が痛かったからな、それに10億なんかじゃ買えない物を手に入れたような気がしたからな。」

映司「おまえ、さつき良い事言っただけだな事思っただけ？」

アंक「うっせえよ。」

比奈「アंकったら照れちゃってまったく。」

アंक『でも、たまにはこういうのも悪くないんじゃないかなって気がする。』

映司「腕大丈夫なのか？病院いなくていいのか？」

アंक「病院とか、全然平気だし。」

比奈「嘘いわないの。」ばん

アंक「いてえ！」

比奈「ほら、痛がつてる。」

映司「そりゃ、比奈ちゃんに叩かれりゃそうなるよ。」

第三回（後書き）

途中のネバーの下りはひとつ！非道な悪事を憎み！みたいなことをやりたかったんだけど微妙になっちゃったようないな？まあ、最後まで読んでくれてありがとうございました。

第四回目（前書き）

キャサリン難しい・・・

第四回

受付「アंकさーん、アंकさーん。」

アंक「は、はい。」

受付「こちらがお薬になります。朝昼晩の三回忘れずに患部に塗ってくださいね。お大事に。プッ」

アंक「なっ・・・」

亜樹子「それでね？」

比奈「あれ？」

映司「どうしたの？比奈ちゃん。」

比奈「あれ、アंकじゃない？」

ヤス「あ、ほんとだ。刑事さーん。」

アंक「なっや、ヤス？」

映司「お前こんなとこでなにしてた？」

比奈「アंकどこが悪いの？」

アंक「な、みんなまで。」

亜樹子「ん？その紙袋、もしかして薬？」

アंक「な、なんでもない！」

ヤス「刑事さん、具合が悪いなら、このヤス、誠心誠意看病して差し上げますよ。」

アंक「だあああ、離れろおお！」

ヤス「あ、アंकさん？」

アंक「あ、いや、これはだな、前に映司が目の病院行けっていったら？」

映司「ああ、それがどうしたんだよ。」

アंक「それでいってみたんだ。そしたら、もらいものをもらっていたらしくてな、空気感染してお前らに移すわけにはいかないからな。今日はもう帰らなきゃ。」

映司「もらいもの？ものもらいだろ？」

亜樹子「というか、空気感染はしなかったような？」

アंक「新種のもらいものなんだ。」

映司「ものもらい、だろ？」

アंक「そうそう、そうともいう。」

比奈「ちょっと、アंकそれお兄ちゃんの体なんだからね？気を付けてつかってよね？」

アंक「というわけで、うつしたらいけないからな家に帰って養生するから。またあしたなあ！」

ヤス「あ、刑事さん。」

比奈「行っちゃった・・・」

映司「何だったんだ？あいつ。」

亜樹子「怪しい！」

映司「え？」

亜樹子「たとえ、お天道様は騙せてもこの鳴海亜樹子の目はごまかせないわよ？あれは、何か隠してる態度だよ！」

映司「いや、誰が見てもそうですよ？」

亜樹子「これは、真相を暴くありそうだよっ！」

比奈「私も手伝います。お兄ちゃんの体に何かあったら、私・・・」

亜樹子「うむ、よかるう。行くよ！！比奈ちゃん、映司君！」

映司「え？俺も？」

亜樹子「つべこべいわずについてくる！」

ヤス「刑事さん・・・」

翌日

亜樹子「アंक君、ものもらい治った？」

アंक「お、おお、一晩寝たら、この通りすっかり治ってしまったよ。」

亜樹子「へえ」

アंक「な、なんだよ。その目は！」

ガラッ

亜樹子「あれ？どこ行くの？」

アंक「どこへ行こうと俺の勝手だろ。」

亜樹子「じゃあ、私も」

アंक「なんでついてくんだよ。」

亜樹子「どこへ行こうと私の勝手でしょ？」

アंक「くそっ！」

男子トイレ

アंक「まさか、この中まで入って来るんじゃないだろうなア？」

亜樹子「そ、そんなことするはずないでしょ！私が、トイレのルール教えてあげようか？」

アंक「間に合ってる。」

亜樹子「ムツキイイ？絶対になんか隠してるよ。」

比奈「うーん、やっぱり何もなかったんじゃないですかね？」

映司「たしかに、別にいつもとかわんないし。」

亜樹子「いゝや、絶対に変だよ！」

比奈「変って何か気づいたんですか？」

亜樹子「ほら、昨日アंक君が出て来た病院、眼科じゃなくて皮膚科だったんだよ！」

アंक「不覚だった・・・誰にもしられないようにあんな小さな病院を選んだというのに、速攻で見つかるとは・・・絶対に知られてはならない。特に比奈にはこの刑事のお尻におできができてしまったなどと知られた日には、殺されかねん。」

映司「はあ、皮膚科ですか。」

比奈「普通、ものもらいで皮膚科にはいかないですね。」

亜樹子「そう、やっぱりものもらいって言うのは嘘だね。」

比奈「でも、見た所アंकどこも悪そうには見えないけど・・・」

霧彦「あいつの事だから、どうせお尻におできでもできたんじゃないかな？」

比奈「お尻って・・・」

亜樹子「まあ、何言ってるの。尻彦さん。」

霧彦「いや、俺の名前は霧彦だから。」

比奈「まったく、変な冗談やめてくださいよ、尻彦さん。」

あははは

ヤス「そんなはずはねえ！」

映司「や、ヤスさん？」

ヤス「あのお方はなアそんなちゃんけな事でくよくよ悩む人じゃないんだ！きつとなにか俺達には言えないような秘密を抱えているんだ。そうに違いない！」

亜樹子「そうかな？」

比奈「お兄ちゃんだったらありえたけど、いまはアंकだからなあ」

映司「俺も、それはないと思いますよ？」

ヤス「何だよ！仮にも刑事さんの体使っているんだ。アंकだって良いやつに決まってまさすよ。まったく、皆してアंकの事悪く言つて、バカバカもう知らないあい！」

比奈「ヤスさん……」

亜樹子「……行っちゃった。」

映司「どこまで行く気なんだろ……。いろんな意味で。」

亜樹子「と言うわけで、部の総力をあげてアंक君が何隠しているか探すよ！翔太郎君、フィリップ君！」

翔太郎「前から言おうと思ってただけだな、なんでお前が部長ズラしてんだよ！俺が部長だろ、普通？」

亜樹子「何言ってるの、翔太郎君に出来るわけないでしょ？それに私は部長じゃなくて、所長！はあ、この部でまともなのは竜君だけか・・・」

フィリップ「アキちゃん、僕はマトモだよ？」

亜樹子「ああ、そうだったね、竜君とフィリップ君だったね。ごめんごめん。」

翔太郎「久しぶりに切れちまったよ。お前ら表出る？」

亜樹子「翔太郎君、私に勝てると思っているの？この鍛え抜かれたスリッパ捌き。翔太郎君はかわす事できるかな？」

翔太郎「そつちこそ、ハードボイルド舐めんな！」

比奈「ちよつと話ズレてますよ！」

映司「そうですよ、アंकの事どうすんですか？」

亜樹子「あ、そうだった。ごめんごめん、で二人は何かアंक君について気づいた事ある？」

フィリップ「うーん、何かある？翔太郎。」

翔太郎「うーん、あ、そくだ最近アंक丸くなったよな。」

比奈「まあ、そうですね。最初に比べたら随分丸くなりましたよね。」

映司「あー、確かに。それは俺も思っていました。今日とか亜樹子さんに結構しつこく聞かれてたのに切れなかったですしね。」

フィリップ「つまり、丸くなった時期に何かあったと言う事だね。」

翔太郎「丸くなったのいつだっけ？」

亜樹子「野球大会のあとじゃないかな？」

翔太郎「野球大会か・・・なんかあったか？」

フィリップ「そういえば・・・翔太郎、アंकをバットで叩かなかったかい？」

亜樹子・映司・比奈「」「それだっ？」「」

翔太郎「え？てことは俺のせいって事？でもあれは不可抗力だって。」

亜樹子「じゃあそのときできた傷を治すために通ってたのかな？」

フィリップ「たぶんね。」

翔太郎「いや、そういえば亜樹子もアंकに球2回当ててなかったか？」

亜樹子「そうだった？」

フィリップ「でも、それは無いと思うよ？」

映司「確かにあの後、普通にきれてましたもんね。」

比奈「じゃあ、映司君の説教がきいたとか？」

亜樹子「それはないんじゃないかな？」

翔太郎「うん、俺もそれは無いと思う。」

フィリップ「じゃあ、やっぱり翔太郎が叩いたせいだね。」

翔太郎「いや、本当にそうなのか？」

亜樹子「かわいそうに、アंक君。叩いた本人がこれじゃあ、死んでもうかばれないね。おおよ」

比奈「なんか叩いた時ありませんでした？翔太郎さん。」

翔太郎「うーん、なんかつてもな」

映司「何かないんですか？」

翔太郎「あつ！」

亜樹子「なにかあった？」

翔太郎「ああ、刑事さんの元の髪型あんなだったんだと思った記憶がある。」

亜樹子「全然関係ない事じゃない！翔太郎君は、やっぱり馬鹿だ。」

翔太郎「んだとお？」

映司「他に何かなかったんですか？なんでもいいんで。」

翔太郎「うーん？」

亜樹子「今度どうでもいい事を言ったら、スリッパだからね？」

翔太郎「うつせえ、あ、叩いた時確かメダル出てきたような？でも関係無いよな。」

亜樹子「いや、どう考えてもそれ結構重要でしょ・・・少なくとも最初の刑事さんの元の髪型よりは。」

フィリップ「で、そのメダルはどこ？」

翔太郎「拾ってこねエよ、あんなの。」

映司「やっぱり、アイス沢山食べさせればいいんじゃないですか？」

亜樹子「今の発言翔太郎君並に馬鹿な発言だよ。翔太郎君並に馬鹿な発言だよ？映司君。」

翔太郎「なんだよ俺並みて！」

亜樹子「なんかよくわかんなくなってきた。翔太郎君のせいで。」

フィリップ「じゃあ、一回整理する?」

亜樹子「うーん、翔太郎君が、アंक君を叩いたせいで死にかけて今どうやったら治るのか考えてるって事か。なんでメダル出てきたんだろ?」

映司「アंकの手は、メダルで出来てるって聞いたことがあります。」

亜樹子「じゃあ、メダルが減ったから死にかけてるってことかな?」

比奈「多分そうですね。」

亜樹子「なら、メダルを補充してあげれば治るかな?」

翔太郎「どうやって、そのメダルを手に入れるんだよ?」

亜樹子「トイザラス?もしくはジャスコ?」

フィリップ「そんなところで手に入るのかい?」

亜樹子「行って見ないとわかんないよ?さあ、行こう!今すぐ行く?」

映司「ですね。」

翔太郎「なら、行こうぜ。」

比奈「じゃあ、一旦解散して各自でメダルを探すってことで。」

亜樹子「わかったよ！」

翔太郎「まあ、おれが悪ってのもあるしな。」

比奈「そろそろ１時間たつな。みんなを探してみようかな。みんなどこにいるんだろ。あ、映司君だ！おい映司くん！」

映司「な、なんだ、このデザイン。モンシロチョウと同じくらいいいデザインだ。」

比奈「ちょっと、映司君。パンツ見てないでメダル見つかった？」

映司「あ、忘れてた・・・。」

比奈「まあ、いいや。そろそろ１時間立つしみんな探して帰ろ？」

映司「うん。」

比奈「うーん、映司君見たら、みんなちゃんと探してるか不安にな

つてきたな。」

「???「ちよつと、離してくださいよ。これがないとアंक君が、アंक君があああ!」」

店員「困りますよ、お客様。当店ではメダルのお持ち帰りは遠慮させていただいておりますので、カウンターにお預けになられて、また次回きたときに。」

映司「この声、亜樹子さん?」

亜樹子「それじゃだめなんだよ。別にいいじゃん。私がとつたメダルなんだから。」

店員「いや、ダメですよ。規則なんです。」

亜樹子「人一人の命と規則とどっちが大切な?」

映司「アंक、人じゃないよね?」

店員「いい加減にしないと警察呼びますよ?」

亜樹子「いいよ?裁判になってもこつちには私の友達バイト先の店長の後輩に弁護士目指してる人がいるんだから!!」

映司「いるの?そんな人。」

比奈「うーん、どうだったかな?忘れちゃった。」

店長「それ意味ないじゃないですか。本当に警察呼びますよ?」

映司「店長出てきちゃったよ、どうする？比奈ちゃん。」

比奈「うーん、出て行きたくないような気もする。」

亜樹子「まったく、話にならないね。あ、比奈ちゃんに映司君！」

比奈「げ・・・」

映司「あ、亜樹子さん、そろそろ時間ですし帰りませんか？それにそのメダル違いますよ？」

亜樹子「あ、そうなの？でも、メダルゲーム面白かったからまたくるね？」

店員「お断りします。」

亜樹子「え？」

店員「何でもないです。」

亜樹子「あとは、翔太郎君とフィリップ君？」

比奈「そうですね。」

翔太郎「くそっ！たかが切札メモリ一つあと、300円で取ってやる？」ガチャ

翔太郎「また、電王かよ・・・」

亜樹子「ちょ、翔太郎君、怪我させた本人がなにしてんの？」

翔太郎「だって、メダルのガチャガチャ見つからないんだもん。それにメモリのガチャガチャも初めて見たんだよ！やるしかないだろう？」

亜樹子「いや、知らないよ。」

映司「てか、何回やっतんですか？ガチャガチャのから結構あるけど。」

翔太郎「電王×6、ジョーカー×3、サイクロン×2、ヒート×1、ルナ×2、Amazon×2、メタル×1、疾風×1、
電王かぶり過ぎなんだよ・・・せめて、疾風が出てきたのが救いか・・・」

亜樹子「やり過ぎでしょ・・・」

翔太郎「でろ、切札こい、こい。・・・うわ、また電王・・・」

亜樹子「そろそろやめたら？」

比奈「そうですね、そろそろ帰らないと、遅くなりますよ？」

翔太郎「いや、切札出るまで帰れない。あ、電王みんなにあげる。」

亜樹子「じゃあ、先にフィリップ君探してこようか。」

比奈「あ、じゃあ私たちもここで待ってますね？」

亜樹子「うん、じゃあとでね？」

翔太郎「どうやら、切札は俺のここにはきてくれないみたいだ・・・
」ガチャ

亜樹子「フィリップ君どこいるんだろ？」

フィリップ「あ、アキちゃん！これ見てよ。」

亜樹子「え？何それ？」

フィリップ「え？アキちゃん知らない？知らないの？」

亜樹子『ちよつと、イラつときた。』

フィリップ「まあ、知らないというのは悪いことじゃないよ？アキちゃん。これから知っていけばいいんだからね！これはねえ・・・」

亜樹子「知ってるよ！私、それ知ってるから！何それって言ったのは何で持つてるのかって意味でいったんだよ！もう遅いし帰るよ、フィリップ君。」

フィリップ「ちよつと、待ってよ。これかけてるとどれが本物が分からなくなるな。」

亜樹子「それかけても何もかわないでゲソ！馬鹿なことってないでいくよ？」

フィリップ「ゲソ？」

翔太郎「燃え尽きたぜ・・・まっつつつつ白にな・・・」

亜樹子「どうしたの？翔太郎君。」

映司「あれから何回もやったんだけど結局、出てこなかったんですよ。」

比奈「フィリップ君、見つけたんですね。でもなんで3Dメガネ？」

フィリップ「比奈ちゃん知ってるの？すごいんだ！これかけると全てが立体的に見えるんだ！」

亜樹子「だから、3Dメガネかけてるだけじゃ意味ないのに。また、言ってるよ・・・」

フィリップ「なにいつてるんだい。現にこうして立体的に見え・・・触れる？立体的に見えるだけじゃなく触れるようにもなるのか！すごい！すごいよ、翔太郎！」

翔太郎「そーか、よかったな。フィリップ。」

亜樹子「もういいか、疲れた・・・」

比奈「じゃあ、帰りますか。」

映司「何も収穫なかったけどいいか。」

亜樹子「あれ、アंक君じゃない？」

翔太郎「おい、なにしてんだ？アंक。」

アंक「俺は・・・おまえらこそなにしてんだよ。」

亜樹子「もう、隠さなくてもいいんだよ？」

アंक「な、何が？」『刑事の尻におできが出来たことがばれたのか？』

映司「メダルが足りなくてしにかけてたんだろ？」

翔太郎「俺達、メダルのためにここに来てたんだ。あ、電王あげる。」

アंक「誰が死にかけてるって？あ、どうも。」

亜樹子「アंक君だよ。」

アंक「何でそうなるんだよ。」

翔太郎「いや、野球大会の時俺が叩いたからメダルが足りなくなつて死にかけてるんじゃないのかよ？」

アंक「全然そんなことねえよ。」『なんだばれたわけじゃなかった

たのか。」

亜樹子「ちよつと、誰？アंक君死にかけてるなんていったやつ。」

翔太郎「お前だよ！」

亜樹子「いや、翔太郎君だね！」

比奈「どつちでもいいじゃないですか。」

アंक「今のうちに帰ろ。」

ヤス「刑事さん、一人で帰っちゃうとか、ひどいですよ。」

受付「それではやはり、アंकさんは・・・」

医者「ああ、私も驚いたよ。長年医者をやつて来たがあんな患者は初めてだ。」

ヤス「ヤスヤス。」

受付「どうしようもないんですか？」

医者「残念だが、私には手の施しようがない。」

ヤス「・・・え？」

医者「アंक君か、まだ若いのに・・・」

ヤス「そ、そんな・・・刑事さんが、そんな・・・」

医者「はあ・・・いやあ、あんな手の施しようがない横暴な患者は初めてだよ。」

受付「本当ですよ。やれ、ライトが眩しいだの椅子の座り心地が悪いだの待合室ではアイスくらい出せだの。」

医者「まだ、若いうちになんてわがままな、先生マイツチングダワイー！」

ヤス「刑事さん！探しましたよー！」

アंक「な、ヤス？あいつらに続いてお前まで？」

ヤス「どうして隠してたんですか！」

アंक「何をだよ。」

ヤス「病気の事ですよ！」

アंक「な、お前それをどこで・・・」

ヤス「すいません、病院の前で医者達が話しているのを立ち聞きしてしまいました。」

アंक『何だと？このクールでアイス大好きでナイスガイで童貞のこの俺が、お尻におできでも出来たことがみんなにばれた日には・・・』

亜樹子「私がもつと優しくしてあげてレバー。およろしく」

比奈「お兄ちゃんのお尻におでき作るとか・・・アंक、ブチ殺し確定ね？」

メズール「グリードの風上にもおけないわあ。」

翔太郎「奥さん聞きました？あの方お尻におできですって。ぷぷっ」

フィリップ「あら、やだ！お尻におできなんて、末代までの恥ですわ。」

映司「信用しろとは言ったけど、お尻におできはないわ・・・」

若菜姫「あんたって所詮ヤミー探す事しかできないやつよね。しかもこれにはヤミー出てこないから、あんた完全にいらぬ子じゃん。」

真里奈「あのクールで鯔背でナイスガイのアンク君がお尻におできなんて・・・」

尻彦「おい、今日からお前のあだ名は尻だな！おい、尻。とりあえずこれでハーゲンダッツ買って来いや。」

アンク「おい、ヤス。この事は絶対に誰にも秘密だからな？絶対に誰にも秘密だからな？」ダラダラ

ヤス『本当は自分が一番怖いだろくに、みんなに心配かけないとして・・・アンクなんてでっかい男だよ。』「分かりました男と男の約束です！」

翌日

ヤス「刑事さん、アイスキャンデーにございます！」

アンク「お、おう、ご苦労。どうしたんだ、いきなり。」

ヤス「飲むアイスもございます。」

映司「飲むアイスってただのジュースなんじゃ？」

ヤス「いや、あんたは黙ってて？」

亜樹子「ヤス君、いきなりどうしたんだろ？アンク君何もなかった

んだよね?」

比奈「まあ、昨日自分で言っていましたしね。」

ヤス「他に何かないですか?」

アंक「いや、別に・・・」

ヤス「ほら、そのたむろってる女子、早く追加のアイス買って来いや!」

亜樹子「なによ、いきなり。」

ヤス「おい、あんたもパンツ見てないで手伝え。アイス買って来いや!」

映司「え、どうして?」

若菜姫「そんなにアイス食べたいなら自分で買って来なさいよ。」

ヤス「お前ら、刑事さんにもっと優しくしようと思わないのかよ。」

比奈「お兄ちゃんなら、するけどアंकだもんね。」

アंक「おい、どうしたんだよ。落ち着けヤス。」

ヤス「刑事さんは黙っててください。」『言えねエ、刑事さんの病気の事は、でも、でもこのままじゃ・・・』

ヤス「映司さん、ちょっと来て。」

映司「え？」

ヤス「ひそひそ・・・」

映司「何だつて？アंकが？でもあいつ昨日なんともないって。」

ヤス「そんなのあんた達に心配かけないように嘘ついただけだろ！
刑事さんには内緒にしてくれて頼まれたんだけど。」

映司「あいつが・・・不治の病？」

ヤス「俺は最後に刑事さんに楽しい思い出を作って貰いたくて。」
ぐすん

映司「そうとは知らず、俺達は・・・ヤスさん！俺にも協力させて
ください。」

アंक「あー、座ってるのも辛ねえ。」

映司「おい、アंक！」

アंक「？もしかしてきいたか？」

映司「何の事だよ？」

それよりお前が前から欲しがってたアイス柄のパンツ特別にやるよ。

」

アंक「映司？なんだよ・・・突然。というか欲しいなんていった

事ないが。」

映司「遠慮すんなよ、前から俺がはいてたときは、物欲しそうに見てたろ？」

アंक「いや、いらん。」

映司「なら、今度うちに遊びに来いよ。秘蔵のパンツコレクション
みしてやるからさ。な？」

アंक「いや、いい。」

亜樹子「映司君まで、どうしちゃったの？」

映司「あアゝもうみんなちよつときて！」

アंक「おい、みんなしてどこ行くんだよ。」

ヤス「あ、刑事さんはここにいてください。」

アंक「お、俺だけ仲間はずれ？」

映司「くっ……」

亜樹子「アंक君……およろこぶ」

翔太郎「……俺なんて、あいつの方がよっぽどハードボイルドだ
な……」

フィリップ「アंक、君って奴は。」

若菜姫「辛かったでしょうに、辛かったでしょうに……」

照井「一人で死の恐怖に耐えるとはな……見上げた男だ……」

ヤス「みんな泣くな。刑事さんを笑顔で送り出してやろうぜ。」

伊達「話は聞かせてもらった。今日の授業は中止にしてアंक君を祝う会の開催するぞ！」

アंक「なぜ？」

伊達「さあ、グツといけ、グツと。おでん汁だけだな？」

アंक「はあ、ど、どうも。」

亜樹子「アंक君、私のも飲んで？」

比奈「私、一生あなたの事忘れないわ。」

翔太郎「俺、本当はお前の事尊敬してたんだぜ？」

山野「そうだ、今度みんなでピクニック行きましょ？」

鴻上「やはり、君を教師にした、私の目に狂いはなかったようだよ

！伊達君？こんなにいい生徒を育ててくれるとは、素晴らしい？」

伊達「こんだけ、稼がなきゃいけないんで。」ピン↑人差し指立てる音

鴻上「一億！素晴らしい？」ぴと↑人差し指と人差し指くっ付ける音

伊達・鴻上「「いーていー」」

知世子「アंकちゃん、あなた偉いわ。学校の鏡だよ。」

真木「アंक君に良き終わりが訪れん事を。」

里中「あーでも、立派な生徒つてもこれから死ぬんだから学校の鏡いなくなっちゃいますね？」

キヨちゃん（真木裏声）「里中さん、余計なこと言っちゃダメですよ。」

里中「なに？この人形ちよつと引きまゝす。」ぽいつ

真木「うわゝヤーメーロー！」

アंक「おい、ヤス？これどういう事だ？」

ヤス「心配には及びません。みんな刑事さんの事を慕い、思い、愛故にやってくれている事ですから。」

アंक「あ、愛故！これは、みんなが俺を見てくれている。なんて、

なんて暖かい空間なんだ・・・」

映司「泣くなよ。アंक、こんなに楽しい場じゃないか。」

亜樹子「今日は思いっきり楽しんでいつてね？」

アंक「そうか・・・そうだな。みんな、みんなありがとう！今日は今までで生きてきてえー番幸せな日だあああああああ！」

メズール「いい？貴方達、下校中アंकを守りなさいね？」

ガメル「わかった」

ウヴァ「メズールのいう事を聞かない訳ないじゃないか！」『何で俺がアंकを守らなければならないんだ！』

カザリ「まあ、僕に任せてよ。」

和泉「アंक君、また明日。」

佐々木「明日また会おうね？」

アंक「ああ。」

麻生「見て、あの人。」

倉田「ああ、アंकさんだ！」

赤城「ええ？あれが噂の？」

みゆ「アंक、アंक！」

あすか「サインちょーだい！」

フランク白銀「アंक様じゃ、アंक様のお通りじゃ。」

そうじのおばさん「ありがたや、ありがたや。」

アंक「何なんだ？一体みんなの俺に対する態度・・・」

友紀「えー本日は予定を変更して、緊急特番！グリードのアंकさんの秘密に迫るをお送りさせていただきます。」

アंक「なんだこれ・・・どのチャンネルも俺の事ばかりやってる。何これ、怖い・・・」

友紀「しかし、残念です。そのアंकさんがなんと不治の病に犯されているのです。」

アंक「・・・え？」

友紀「アंकさんはこの事を家族や親しい友人にもひた隠し、1人孤独な闘病生活続けていたのです。本日はアंकさんのクラスメイトでもある風都のアイドル、若菜姫をゲストにお迎えしています。」

若菜姫「どうも・・・」

友紀「心中お察します。」

若菜姫「アंक君はいつもクラスの中心にいて、私がお仕事でクラスに馴染めずにいたときもすごく気を遣ってくれて・・・」

友紀「大切なお友達だったんですね？」

若菜姫「そ、そんなアंक君が不治の病だなんて・・・運命はなんて残酷なんでしょう。テレビの前の皆さん、お願いです。アंक君を助ける為にどうか、どうか皆さんの温かい愛を分けてください。」

友紀「愛のアイス募金は現在日本各地で皆さんのご協力をお待ちしております。」

イナゴの女「頑張れ、アंक君！」

リリイ白銀「私たち、貴方の事は絶対忘れない！」

戸川「いつまでもアミィーゴォ」

亜樹子「見える？アंक君。みんなが、みんなが君を応援しているよ！」

若菜姫「アंक君？こんなにたくさんの方が貴方を応援しているわ！くじけないで頑張つて。例えば死が逃れられない運命だとしても！」

アंक「え？なに・・・俺死ぬの？」

ヤス「俺、この貯金箱が一杯になったら刑事さんの分までアイスいっぱい食べるんだ・・・」

アंक「ヤスうううう！」

ヤス「刑事さん・・・落ち着いてください。どうしたんですか・・・」

アंक「俺が、不治の病ってどういう事だ？」

ヤス「・・・」

アंक「嘘だ・・・嘘だと言ってくれよ。」

ヤス「泣かないでください。俺だって辛いんです。」

アंक「だって、医者毎日きちんと塗れば一週間くらいで治るって言ってたぞ！」

ヤス「治る訳ないでしょうが！それはきっと刑事さんを動揺させないように。」

アंक「そんな・・・ただのおできと思っていたのに、まさか不治の病だったなんて・・・そう言われてみれば妙に身体が重くて、呼吸が苦しいような？」

ヤス「刑事さん・・・」

アंक「思えば、復活してから短い人生だったがたくさんの人に惜しまれていけるなんて考えもなかったな・・・」

ヤス「刑事さん。」

アंक「そうだ、アイスも沢山食ったし思い残す事はない！」『思い残す事はない？本当に？本当にそうなのか？』

翌日

亜樹子「映司君、アंक君もう死んじゃうんだよ。好きなだけアイス食べさせてあげなよ！」

比奈「そうですよ。アイス食べさせてあげてくださいよ。」

映司「あのね？あいつのアイス代半端ないんですよ。」

亜樹子「うん、知ってる。」

映司「そして、そのアイス代は、俺が払うんですよ。」

亜樹子「それで？」

映司「ちよっと、ひどくないですか？」

映司「分かりましたよ、食べさせればいいんでしょ。」

亜樹子「よく言った！映司君。」

若菜姫「見てください。今アंक君が私達の前に、いえ己の人生の前に立っています。悔いのない生涯の為に、全力で生きた証の為に彼の勇姿を我々は忘れないでしょう。」

翔太郎「俺がたちあおう。アイスの棒は拾ってやれ。」

映司「アंक・・・」

アंक「よく来たな、映司。思えば、俺が本気で競い合ったのはお前だけだったな。」

映司「アंक、なにを・・・」

アंक「見るがいい、これがおれの覚悟だあああ」

映司「刑事さんを！」

亜樹子「アंक君？」

アंक「男の花道にこんなものは不要！」ばいっ

比奈「こんなもの・・・？」

映司「お前の覚悟。確かに見せてもらった、こいアंक！」

アंक「行くぞ、映g・・・ぐふっ」ばたん

比奈「お兄ちゃんが、こんな物、だと？舐めてんのか？ああ？」ボ
コボコ

アंक「・・・」

比奈「なんとか言いなさいよ。アंक！」ボコボコ

映司「ちょ、比奈ちゃん。アंक死んじゃう。」

比奈「あ・・・いや、アंक。死んじやいや〜!」

アंक「げほっ、なんで俺が死んでお前がパンツパンツ言ってるお前がのうのうと生きつつけるんだ!」

映司「アंक・・・」

アंक「そんな目で、おれを見るなあぁ!」

亜樹子「アंक君!」

アंक「何で俺が、完全復活しないで死ぬんだよ。死ぬのは嫌なんだよおお。」

ヤス「刑事さん!」

アंक「俺には、友達も恋人も居ない」

映司「いや、俺も居ないよ・・・」

アंक「完全復活しないと何時までもこんなのに頼らないといけない、存在自体危ういこんな身体で死ぬのは嫌だもつと、俺にコアメダルくれよおお!」

比奈「だから、こんなのって言うなよっていつてんだろ?」ボコボコ

映司「だから死ぬって・・・」

亜樹子「あ、アंक君？」

アंक「・・・」

ヤス「刑事さん？」

みんな「アंकううう。」

アंक「おう、今日もアイスくれたりするんのか？」

映司「てえ、なんでピンピンしてんだよ。このおでき野郎！」

亜樹子「全くだよね。不治の病っていつておきながら、おできって・
・・」

比奈「お兄ちゃんのお尻におでき作るとか・・・」ボキボキ

映司「さすがにやめとこ？」

アंक「なんだよ、お前らが勝手に勘違いしたんじゃないか！大体俺達グリードがそう簡単に死ぬかよ！ほら、さっさとアイス食べろよ！」

フィリップ「アंक、まるくなる前に戻ったね。」

翔太郎「ああ、でもこうでなくちゃな。」

アंक「はっ！俺がいなきゃこの、お兄ちゃんはどうなるのかなあ

？アイスさつさと持って来い！」

比奈「アंक・・・あんた！」

亜樹子「前よりひどくなってるね。」

映司「はぁー」

ヤス「俺、どんなに性格悪くても刑事さんについて行きます。」

照井「そっいゃ、あいつからとったゲームそのままだったな。やってみよう・・・」

第四回目（後書き）

えーと、分かる人は最初のほうでピーんときたと思いますが、今回の話は瀬戸の花嫁を参考にしました。最初霧彦使うはずだったのになんでアंकにしたんだろ。まあ、オチはいつもの事だとして。次回から本気出す！期待しといてください。なんて言ってみる。まあ、今回も最後まで読んでくれてありがとうございます。

第五回目（前書き）

うわぁ、なれないことするもんじゃないな。前回の本気出すはなしで。

第五回目

翔太郎「・・・全滅だな。」

そう言うと、アंकが

アंक「この連中は、サメヤミー辺りにやられてる。」

すると比奈ちゃんが驚いたように

比奈「サメヤミー？と言う事はメズールのヤミー？」

アंक「来る、10体いや、20体以上はいる。」

アंकが言った。アंकはヤミーを感知する事ができるのである。

フィリップ「どうするんだい？」

翔太郎「迎え撃つ。やれるな？映司。」

帽子の縁を抑えながら翔太郎が言った。

アंक「来る、映司！新しいメダルだ！受け取れえ！」

そう言うと、3つのメダルを映司に投げつける。

映司「いたっ？もうちょっと優しく投げろよな。」

そういつて映司は落ちたメダルを拾うとベルトに入れた。そして、

腰についているオースキャナーでメダルをスキャンした！

映司「変身！」

すると、ベルトから変な声が出て来る

ベルト「クワガタ！カマキリ！バッタ！ガ〜タガ〜タガッタキリバ
ガッタキリバ！」

すると、そこに映司はいなかった！そこにいたのは全身緑色の仮面
ライダーだった。

翔太郎「なんだよ・・・あの歌。」

飽きれ気味に翔太郎が言った。

アंक「歌は気にするな！いけ、映司！メダル稼いで来い。」

と言うが早いか、穴からサメヤミーが飛び出してきた！

映司「俺に任せろ！」

というと全身緑は見た感じ50体くらいに別れる。

映司「うおおおおおお！」

そして、見た感じ50体くらいに別れた全身緑は腰についているオ
ースキャナーでまたメダルを読み込む。

ベルト「~~~~~」

映司「うん、なんとかね・・・」

そうは言っているが、徹夜5日くらいの疲労、大丈夫なわけない。

翔太郎「おい、あぶねえぞ！」

サメヤミーが一匹残っていたのだ、だが映司はもっていたメダジャリバーでぐさりサメヤミーはメダルに還った。

翔太郎「すげーな。お前。」

フィリップ「いや、あれだけの数のヤミーを1人で倒すなんて流石だね。」

映司「みんな、怪我はない？」

フィリップ「ああ、君のおかげで。」

比奈「映司君すごいよ！」だきつ

嬉しさのあまり映司に抱きつく比奈ちゃん、羨ましいぞこんちくしよー

アंक「ああ、こいつはたいしたもんだ。全身緑コンボに耐えるとはなあ。」

映司「ちょ、比奈ちゃん。い・・・息が、でき・・・ない。」がくつ

そうなのだ、比奈ちゃんはすごい怪力の持ち主だったのだ。だが比奈ちゃんに殺されるならそれもまた粹な物だ。

比奈「ああ、ゴメンなさい、映司君！」

翔太郎「救急車、救急車を早く！」

映司『みんなが俺を呼ぶ中意識が途切れていく。お父さん、お母さん。いまそっちに行くからね。』

映司「俺の名前は、火野映司！邪悪なグリー度達を倒すのと明日のパンツの為に戦っている。先代オーズによって封印されたグリー度達が12年の時を経て、復活した。グリー度達を倒す為、何度も部隊が派遣された。だが、勝てなかった。そんなある日、女神シユラウドが現れた。選ばれし戦士としての宿命を俺に授けてくれたのだ。先代のオーズである鴻上会長も俺の力を認めてオーズドライバーを授けてくれたのだ！」

鴻上「素晴らしい！新しい火野君の誕生だよ！」

映司「討伐！グリード討伐！この困難な使命の為に4人の仲間達が集まった。でも、最初は大変だった。」

翔太郎「待な！映司！」

映司の腕をつかむ翔太郎が言った。

映司「え？」

翔太郎「俺は、まだお前を認めたわけじゃない。」

映司「え？」

翔太郎「とう！」

そう言うのと後ろに飛び下がる翔太郎。

翔太郎「リーダーになりたければ勝負しろ。」

映司「いやだ。」

翔太郎「なんで？」

映司「俺は、争いがどれだけ人を苦しめるか知ってる、どうしてもやると言うなら、俺を倒してからにしろ。」

翔太郎「どっちだよ・・・まあ、いい。行くぞ！フィリップ。」

と言うと、ダブルドライバーを腰に巻く。すると、何時の間に巻いたのかフィリップのこしにもついてる？そして、懷から黒くて硬くてキラキラ光っている物を取り出した。鳴る！光る！押せる！俗に言うガイアメモリである！翔太郎がボタンを押すとマダオVoiceが発せられる。

マダオ「ジヨオオオカアアア！！」

フィリップ「全く、しょうがないな。翔太郎は・・・」

こちらは緑色のガイアメモリである。

マダオ「サイクロン！！」

翔太郎・フィリップ「変身！！」

何かこう、二人並ぶとWと見える感じでポーズをとる。そしてフィリップがガイアメモリを腰に巻いている、ダブルドライバーに挿入する。するとどうした事でしよう、翔太郎側のベルトに移動しているではありませんか。そして、翔太郎もガイアメモリを挿入する。そして、ベルトをWの形になるように開く。

マダオ「サイクロンジョオオオカアアア！！」

風が発生したと思えばまた、マダオVoiceが発せられる。すると、フィリップが突然倒れた！翔太郎はフィリップの事はお構いなしにWの形になるようにポーズをとる。すると翔太郎の肉体が変化した。黒と緑の2色のライダーになっていた。

アंक「右が緑で左が黒い。綺麗に半分こ怪人、ぷっ！」

笑うのも無理はない、最初見た時は、なんじゃこりやあああと思う。今では一番好きです！

翔太郎「半分こ怪人いうな！」

比奈「というか、フィリップ君倒れたけど大丈夫なんですか？」

心配する可愛い比奈ちゃん。

フィリップ「ああ、大丈夫だよ。比奈ちゃん。」

半分こ怪人の右側の目が光る。

アंक「映司！あんな半分こ怪人倒しちまえ！」

というとメダル三枚、映司目掛けて投げつける。

映司「倒すとか物騒な事いうなよ。」

ベルトにメダルをいれてスキャンする。

ベルト「タカ！ゴリラ！チーター！」

翔太郎「あれ？あの歌は？」

歌はコンボでしかないのである。

翔太郎「まあ、いいや。さっさと決めんぞ！フィリップ。」

黒いメモリの方をベルトから外すと腰の黒いマキシマムスロット？に挿入する。するとマダオVoiceが鳴り響く！

マダオ「ジヨオオオカアアア！！マキシマムドライブ！」

翔太郎「決めるぜ？」

そしてマキシマムスロットを叩く。空高く飛び上がる半分こ怪人。そしてなんと、半分こに割れたのだ！

翔太郎・フィリップ「ジョーカーエクストリーム！！」

映司「半分こに割れたあああ？」

そう、映司が言ったように半分こ怪人がセンターラインから真つ二つに割れたのだ。

アंक「うへえ、きめえ。」

翔太郎「何だとお？」

フィリップ「ちょっと、二人の息を合わせないと・・・」

アंकの一言に二人の呼吸が乱された事によって失敗してしまった。

翔太郎「うわ、くそっ！ならこれだ！」

そして今度はどこからともなく青っぱいガイアメモリを取り出す。

マダオ「トリガアア！」

フィリップ「なら、僕も変えるかな。」

こっちは赤いメモリを取り出す。

マダオ「ヒート！」

そして緑のメモリと赤いメモリ、黒いメモリと青いメモリを交換する。

マダオ「ヒートトリガア！」

黒と緑の半分こ怪人は青と赤の半分こ怪人になった。

映司「かっこいい！」

うん、確かにカッコいいよね。

アंक「おい、映司！なにかっこいいとかいってんだ！さっさと決めろ！」

アंक、ついにきれる。

翔太郎「お？かっこいいとかわかってんな。映司！おらっ！」

何かいきなり撃ってきた！だが・・・

映司「遅いよ！」

翔太郎「な？後ろに回られたと？」

足をチーターにしてるお陰でめっちゃ早く動けるのだ！そしてゴリラの腕で殴る殴る！

映司「せいやあああ！」

ゴリラの腕で吹っ飛ばされる。

翔太郎「わ、若菜姫の声が最後に聞きたかった・・・」

吹っ飛ばされた、翔太郎、変身解除してしまった。

翔太郎「負けた・・・負けたぜ。お前がリーダーだ！」

比奈・アंक・フィリップ「やったあああ！」

映司「こうして旅の仲間たちは集った。出発前には美しいパンツとの出会いもあった。運命の出会いだった。このパンツを履いていられる時間が永遠に続けばいいと思った。討伐に出向いた、俺達を待っていたのは数々の危機。遙か遠い風都まで長く苦しい旅だった。そんな俺達の前に強敵が現れた！」

照井「俺の名は仮面ライダーアクセル！オースのお前をここから先に通すわけにはいかな。絶望がお前たちのゴールだ。」

めっちゃ赤い奴が現れた！さあどうする？映司！

映司「なんだって？」

照井「聞こえなかったか・・・」

映司「いや、聞こえた。」

照井「よし、では行くぞ！」

重さ20Kgのエンジンブレードを取り出す！

映司「こいつは手強そうだ。」

焦りを覚える映司すると、

フィリップ「ねえ、映司。」

映司「どうしたの？」

フィリップ「実は僕、この戦いが終わったら故郷に帰って若菜さんと結婚するんだ。」

翔太郎「はあ？聞いてねえよそんなの！て事はもう若菜姫は俺達の若菜姫ではなくお前だけのになるってのか？」

翔太郎、切れる。

映司「でも何故いま？」

フィリップ「さあ、行くよ？翔太郎！今回はフアングジョーカーで行くよ。」

すつと差し出した手に何か恐竜っぽいアクエリアス色した物が乗っかってくる。するとそれを変形させてた。その間、時間にしてわずか0・1秒。

マダオ「フアング！」

翔太郎「くそっ！あとで詳しく聞かせてもらっからな？」

黒いメモリを取り出す翔太郎。

マダオ「ジョオオオカアア!!」

そして今にも変身しそうな時、重さ20Kgのエンジンブレードがフィリップ目掛けて飛んできた!

フィリップ「変しん・・・ぐふっ!」ばたん

倒れるフィリップ、

映司「フィリップううう!さん」

翔太郎「No attacking during transformation!」

なんか、英語を喋り出す翔太郎。

照井「さあ、次はドイツだ?」

1人倒せた事でちょっと、調子に乗るアクセル。

映司「フィリップさんは、故郷に帰って図書館を開くと言っていたのに。」

照井「え?」

映司「それを、許さないぞ!覚悟しろ、アクセス!」

怒れ、映司!仲間を殺したあいつを許すな!

照井「アクセルだ！」

映司「アंक、メダルだ！」

アंक「おう、でもあいつ倒したらメダルになるのか？」

考えながらも、メダルを投げる！そしてそれをキャッチする映司。

映司「変身！」

読み込ませる

ベルト「ライオン！トラ！チーター！ラッタラッタラトラーター
！」

そして今度は全身黄色の仮面ライダーになっていた。

映司「これで黄色のコンボでしょ！うおおおおお？」

翔太郎・アंक「カバディカバディカバディカバディ・・・」

突然カバディしだした翔太郎とアंक

比奈「なにやってんですか！わたしもまぜて！」

翔太郎「おお、いいぜ」

翔太郎・アंक・比奈「カバディカバディカバディ・・・」

照井「お前ら緊張感ないよな・・・」

一瞬気がそちらに移る。

映司「今だ!」

ベルト「スキヤニングチャージ?」

全身黄色の前に、3つの輪っかが出現した。そしてその輪っかをどんどんくぐって行き、頭の光でてきの目をくらませつつ、超加速で近づき、

ライオン・チーター「トラさん出番ですよ!」

トラ「あいよ!」

トラクローでトドメ・・・と思ったらリボルスピッキング!

映司「せいやああああ!」

照井「何だと?」

吹っ飛ばされるアクセル。

トラ「え?・・・話してたのと違うじゃん。」

映司「やっぱり、チーターはいいよなあ!」

照井「お前達の勝ちだ!さあ、俺を殺せえええ!」

すると、映司は無言で変身をといた。

照井「何故殺さない？」

映司「勝って初めて分かった。お前の剣には悲しみがある。戦いの悲哀を知っているものを切ることは俺にはできない……」

照井「お前……」

映司「腕を磨け、アクエリアス！」

照井「アクセルだ。」

映司「その時また正々堂々、戦おう！」

照井「なんて奴だ……」

そして俺たちは勝った、フィリップという尊い犠牲をはらい、それでも歩みを止めなかったのは、明日のパンツが俺達に活力を与えてくれたからだ！そして10年の月日が流れた。

そして、やっとグリードたちのアジトへとついた、

映司「みんな、準備はいい？」

周りを見ながら映司が言った。

比奈「うんっ！」

かわいい」

アंक「ああ、メダルがつぱり稼ぐぜ！」

翔太郎「いつでも行けるぜ！」

映司「さあ、俺に続いて！」

真っ先に走る。その後を翔太郎、アंक、比奈ちゃんと続く。すると突然したからなんかに出てきそうだったけど、出てくる前に比奈ちゃんに潰された。そしてどんどん先を急ぐ俺達の前にもっと危険なときが立ちふさがった。

ショッカーグリード「ショッカー！！！」

明らかにレベルが違う。敵が火をはいてきた！

翔太郎「おい、どうすんだ？」

アंक「くそっ！俺のメダルだ、絶対に取られるなよ！」

投げるアंक、受け取ろうとするが火が邪魔で取れなかった。映司、痛恨のミス！

映司「でも、タカだけなら取れたよ！」

アंक「一枚だけじゃ意味ないだろうが！！！」

たしかに。

シヨツカーグリード「シヨツカー!!」

トドメを刺そうとしたその時、何処からともなく現れた、謎のアクセルによって助けられた。

映司「お前は・・・」

その正体とは？

映司「お前は、ロクサス！」

照井「ちがう、アクセルだ！」

だんだん慣れてきたっぽいこの会話。

照井「こんなところで苦戦するとは情けないぞ！俺を倒したお前はその程度だったのか？」

映司「なんで俺を助けたんですか？」

敵である、自分を助けたアクセルのわけわからない行動に映司、心中を吐露する。

照井「お前を倒すのはこの俺だ！誰にも譲る気はない。」

映司「お前・・・」

照井「それと、お前にもう一ついっておくことがある。この戦いが終わったら俺は故郷で所長と結婚するんだ！」

あちゃー

映司「それをいったら・・・」

照井「もたもたしている暇はない、さあいざ！」

火が照井を包み込む

照井「俺の人生終わっちゃった・・・」

ショッカーグリード「はは、次はお前を血祭りにしてやる。」

と火を出す準備をするショッカーグリード

映司「よくも、よくもおお！アंक、メダル！」

メダルを要求する。だがアंकは今それどころではない様だ。

映司「アंक！」

催促する、すると渋々

アंक「くそ！ほらよ！今のうちにさっき落とした俺のコアメダル探せ！比奈！」

比奈「う、うん。」

比奈ちゃんに命令するとか良い度胸してんな。アंक

メダルを取り今度は赤、黄色、緑のメダル三枚で変身する。信号機

見たら思い出せよな！

比奈「赤青黄色ですよ普通。」

映司「变身！」

ベルト「タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バタトバタツトツバ！」

赤、黄、緑の三色の仮面ライダーになった。

映司「せいやせいやせいやあああ」

メダジャリバーでできるきる。しかし、

ショッカーグリード「きかないわあああ！」

はじきとばす。

映司「うわああああ！だめだ！これはぜんぜんだめだ！アंक！ほかのメダル！」

タトバなめんな！それでもコンボなんだぞ！

映司「えーと、ショショショウタショショウタってやつ！」

翔太郎「呼んだ？」

ちがいます。

アंक「ほらよ！使いたきゃ勝手に使え！」

そういつて投げるアंक。

映司「よっと！」

しっかりとつけとる映司。そしてメダルを変えるとスキャンする。

映司「変身！」

ベルト「シャチ！ウナギ！タコ！シャシャウタアシャシャウタア！」

今度は全身青の仮面ライダーになる。

アंक「あいつ、二回ともちゃんと取りやがって俺のだけわざと落としたのか？」

比奈「いいから、メダル探す！」

比奈ちゃんのいう通りだ。

ショッカーグリード「そんなのになったからって勝てると思うのか？」

映司「ああ、勝てるさ。」

すると、腕に着いてるウナギムチで叩く！

ショッカーグリード「うわっ！」

翔太郎「ああんっ！」

叩くだけじゃなく電撃のおまけ付きだ。コレはくる。

映司「もういっちょ！」

またムチで叩く！

翔太郎「あんっ！ってなんで俺に当てんだよ！」

映司「すいません、わざとじゃないんです。」

そう言うともう一回叩く。

映司「すいません、気を付けるんで。」

翔太郎「たく、本当気を付けてくれよな。」

そして、またムチで叩く。

翔太郎「ら、らめえええ！これ以上やられたら逝っちゃううう！」

死ぬ的な意味で

翔太郎「だから、なんで俺に当てんだよ！しかも、敵の方には当たってないし！」

そう、途中から翔太郎にしか当たってないのだ！

比奈「翔太郎さん、良い声で鳴くなあ〜」

アंक「あ？なんかいったか？」

比奈「なにも言っていないよ！」

映司「あーなんか、ムチで叩いてたら、なんか心の中に芽生えて来た。もっかい叩かせてくれませんか？」

翔太郎「無理、マジ死ぬ！」

ショッカーグリード「いつまで、無視している気だ！はアああ」

そう言っていると火を吐く。

翔太郎「やばい、よけない。」

直撃コース、回避、間に合いません！瞬時に間に合わないと思った時、映司が割って入った。

翔太郎「まさか、俺をかばうために？」

と思つたら、当たるといところで、液化化してかわす。

翔太郎「うそおお？」

翔太郎、潔く死亡。

映司「よくも、翔太郎さんまで。」

さっきまで、ムチで叩いてた奴のセリフとは思えない

ベルト「スキヤニングチャージ？」

メダルを読み込むすると、ジャンプして、ムチでショッカーグリードを捕まえ、足を八本にしてドリル状にしたと思うと、それでヤミィを貫いた。

映司「ギガアアアアドリルウウブレイクウウ！」

???「へえ、あのグリードを倒したんだ。」

???「だがここから先は・・・」

セーの

???「我ら、グリード参人衆が相手だ！」

ガザリ「猫系グリードのカザリ。」

メズール「水棲系グリード、メズール。」

ガメル「おれは・・・えーとメズール、これなんで読むの？」

メズール「じゅうりょうけいって読むのよ？」

ガメル「なるほど」ありがとメズール。」

ガメル「じゅうりょうけいグリード、ガメル。」

ウヴァ「ついでに虫頭のウヴァ！」

こいつらは手強そうだぞ？負けるな映司。

アंक「おい、ちゃんと探してんのか？俺のメダル！」

まだ見つからない様子のアंक

映司「お前がてきとーになげるからだろ？」

比奈「あつたよ！メダル。あれ、なんだろう？このメダル。でも黒だしアंकのとは関係ないよね。」

流石比奈ちゃんメダルを見つける。

アंक「でかした、比奈！」

すると突然壁が壊れて中からグリードが出てきた。ガメルとウヴァとメズールとカザリ、四人一気に出てきたのだ。

メズール「遅いから迎えにきちゃったわあ。」

メズールウウウ、早く復活してくれえええ！（テレビで）

アंक「くそっ！今度は落とすなよ映司！」

また投げるしかし今度はキャッチする映司。

映司「変身！」

ベルト「ライオン！トラ！チーター！ラッタラッタラトラーター！」

また黄色になった。

映司「うおおおおお？」

叫ぶと同時にめっちゃ輝き出す。

メズール「きゃああああ！」

メズールはこの攻撃に弱いのだ。

アंक「早速退場！水棲系グリード、メズール！」

かなり無理あるような気がする。

映司「よし、まず一体。次アंक、ガタガタガタキリバ！」

アंकにメダルを要求する映司。

アंक「やりたきゃやれ！」

といって投げるアंक。

と言うとメダルを投げる

映司「わかった！」

ベルト「サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴーズ・・・サッゴッーゾオオ？」

今度は全身白ってことしといてください。全身白の仮面ライダーになった。コンボ三連続とかやべ。

比奈「コンボ三連続とか大丈夫なの？」

比奈ちゃんが心配してくれるだけで疲れは取れる・・・訳はない

映司「うおおおおお？ウホッ！ウホッ！ウホッ！」ドコンドコン

すごく、ドラミングする。するとすごい重力が発生して、グリーン二人が地面にめりコンドル！

映司「ウホッ！ウホッ！ゲホッゲホッ・・・」

叩きすぎでむせてしまった・・・映司痛恨のミス。

カザリ「収まった、今のうちに！」

勝てないとわかると逃げるカザリ。

ウヴァ「ちょっと、おいてくなよ！」

ドンマイ、ウヴァ。

比奈「大丈夫ですか？映司君。」

心配して駆け寄ってくる比奈ちゃん

映司「ゲホッ、何とか・・・」

アंक「調子に乗るからそうなるんだ！」

ウヴァ「クッソ〜！」

投げやりになるウヴァ

映司「もう大丈夫だから離れて、比奈ちゃん。」

そっいつてもう一回スキャンする。

ベルト「スキヤニングチャージ？」

そして、空高く飛び上がる、そして落下。その衝撃で重力が発生して、ウヴァが地面にめり込む、そして引き寄せられるウヴァ。何とか出ようとするができない。

ウヴァ「くそぉ！」

映司「せいやぁぁぁぁ！」

腕、頭の同時攻撃。描写が下手だからわかりずらいかもしれないがこの攻撃ほどえげつない攻撃はない。（当社比）

ウヴァ「うらあああ！」

アंक「一気にこんなに稼げるとはなあ！しかし、全身白コンボにも耐えるとは・・・映司、恐ろしい子。」

たしかに、映司、恐ろしい子・・・

映司「よし、残るグリードはカザリだけだな。」

長かった旅ももうすぐで終わる

アंक「おい、グリードなら俺もいるぞ。」

すると映司は驚いた様に

映司「なにいつてんだよ。グリードだけど俺達友達だろ？」

比奈「そうだよ、アंकは私たちの友達じゃない。倒すわけないよ。」

比奈ちゃんがそういうなら倒さない。

アंक「お前ら、馬鹿だな。」

そしてどんどん奥に進んで行く二人と一匹

アंक「おい、後ろから屑ヤミーがおってくるぞ！」

相当な数だ。どうする？

映司「くそ、アंकメダルだ！」

メダルを要求する映司、だが

アंक「屑やミーくらい俺でなんとかなる。お前はさっさと力ザリ倒してこい。」

メダルを投げる

アंक「俺のメダルだ、大切にしろよ？」

映司「ああ、わかった。お前も早く追いつけよ。メダル取り損ねるぞ？」

そう言う同比奈ちゃん遠くに進んで行く。

映司「もう少しで頂上だ。」

といった時、比奈ちゃんが言った

比奈「映司君、本当に行くの？倒せると思っの？」

映司「わからない、でもやらなくちゃいけないんだ。もう誰も悲しませたくないから。」

比奈「無理だよ。勝てるわけないよ。映司君、コンボのやり過ぎで疲れてるじゃない。」

映司「比奈ちゃん・・・」

比奈「逃げよう？二人で誰も知らない土地まで逃げて静かに暮らすの。だって私映司君の事が・・・」

頬を赤める比奈ちゃん。な、なにをいう気だ。や、やめれえ！それ以上言ってはいかん。て、俺が書かなきゃいいのか。

映司「大丈夫だよ、比奈ちゃん。奇跡は必ず起きる。そうだ、いい事を思いついた。この戦いが終わったら結婚しよう！」

映司に言わせてどうするんだ。

比奈「本当？嬉しい！」

あばばば、俺の娘が・・・

映司「だから、行こう！」

比奈「うん。」

そして、ついにたどり着いた。

カザリ「へえ、ここまで来るとは本当にやるんだね。」

映司「お前を倒して、終わりだ！」

意気込む映司

カザリ「どうかな？もう一人いるって事忘れたのかい？」

意味不明なことを言うカザリ

映司「なんだと？」

比奈「どういう事？映司君。」

比奈ちゃんが聞く

アंक「お前らか。グリードを倒そうなんて馬鹿な事やってんのは。」

アंकがもう1人だと？

映司「お前は誰だ？」

比奈「もしかして、アंक？」

アंक「鳥系グリードのアंक。よくわかったな。」

映司「何でわかったの？比奈ちゃん。」

すると比奈ちゃんが

比奈「匂いがアंकと一緒にだったから。」

すげえ、比奈ちゃん

映司「じゃあ、俺たちと一緒に居たアंकは？」

アंक「ああ、あいつは俺の偽物だ。」

映司・比奈「な、なんだってええ？」

な、なんだってええ？

カザリ「馬鹿だよね、自分がアंकだとおもっているんだから。」

映司「え？という事は・・・比奈ちゃんと結構するという事はアंकが義兄さんという事はこいつも義兄さんと呼ばなきゃいけないって事？」

映司は混乱した。

比奈「落ち着いて、映司君。別にアंकが私のお兄ちゃんってわけじゃないから。心配しないで？」

映司「そうか。よかったああ。」

アंक「おい、なに安心してんだ。」

映司「あ、変身！」

アंकから受け継いだ、赤いメダルをスキャンする。アंक、お前の屍を跨いで俺はもっと強くなる・・・

比奈「死んでないから、アंक。」

エスパー？

ベルト「タカ！クジャク！コンドル！タアアジャアアドルウウウ？」

全身真つ赤のコンボになった。しかもこのコンボでは、タカ頭が特別なものになるのだ！胸のマークも特別なものになる。

映司「はあああ！」

空高く飛び立つ。このコンボでは、空も飛べる。そして、胸に左手をかざすとなんかほむほむがつけてる感じのが出て来る。そして、メダルをもつかいスキャンする。

ベルト「スキヤニングチャージ？」

すると足がすごい事になる。

映司「せいやあああ！」

映司の強烈キックが炸裂する。

比奈「やった？」

煙で良く見えなかったのが晴れて見えてくる。

カザリ「な・・・なんで？」ばたん

なんと、アंकは近くにいたカザリを盾がわりにしてしまった！

アंक「近くに居たお前が悪い。」

映司「お前、仲間だろ？何でそんな事をするんだ！」

そして今度はメダルをベルトから取り出しさつき出したなんとかス
ピナーに入れる。

ベルト「タカ！クジャク！コンドル！ギンギンギン！ギガスキャン
？」

すると、全身真っ赤は炎に包まれたならああ、きいっとお、目に写
るうう、すべての物を焼きつくうすうう。

映司「うおおおお！」

アंक「効かないな、自分のコンボでダメージを食らうわけないだ
ろ。」

映司「何だと？」

アंक「返してもらっぞ、俺のコアメダル！」

すると、めっちゃすごい、技を出して来てメダルを取られてしまっ
た。

映司「うわっ！しまった。」

比奈「映司君！」

メダルが無い、これでは打つ手が無い。どうする？

腕アंक「情けないぞ、俺が行くまでに倒してるんじゃないのか？て、誰こいつ？」

アंकを指して聞く。

映司「なんか本物のアंकなんだって。で、お前偽物。」

アंक「ああ、そうだ、残りのメダルを持って来てくれてありがとう。これで俺は完全復活する！」

やばいな、これは

腕アंक「何だと・・・俺が偽物？なら今までの俺のやって来た事は全部フィクションであり実際の人物、団体、事件とは一切関係ありませんだったなんて・・・ウソダンドコードーン！」

相当ショックを受けたアंक。

アंक「いまだ！」

またよくわからない技を出すアंकたぶん炎系の技！

腕アंक「うわあああああ！」

腕アंकに命中！効果はいまひとつのようだ！しかしコアメダルがほとんど出てしまった！

映司「あれ、同じ属性なのに攻撃効くの？」

アंक「腕だけのこいつはなんにもなれない、不完全な存在なんだ

よ。だから自分の属性すらふせげない。存在してるだけ無駄なんだよ！」

アंक「俺は・・・」

止めを刺されたかんじのアंक。

映司「しっかりしろ！アंक。お前がいなきゃ、ここまで登ってこれなかった。例えお前がアंकじゃなくてもあんなわけわからん奴よりお前の方が俺にとってはアंकだ！」

ふうん？そうなんだ？

アंक「そうだぞ！あいつの言うとおりだ！金髪トサカ！！よくわかんねえやつのことなんかきいてんじゃねえ！はっ！俺は一体・・・」

よくわかんないのにのりうつられたアंकその手にはイマジンメダルが！

アंक「なんだ？このメダル。まあいいか・・・映司！メダルだ！」

といって、イマジンメダルを投げる。

映司「でも、アंकメダル一枚じゃ変身できないよ！」

アंक「くそっ！なら俺のメダルを使え！受けとれええ！」

といってタカメダルを取り出そうとする。

映司「おいそれを使ったら、お前のコアが・・・」

そうなのだ、他のコアほとんどさっきの攻撃で取られてしまったのである、あとはアंकの体を構成するタカメダル一枚だけ。

アंक「気にすんな、どうせあいつにウヴァわれるくらいならおまえにやるよ！」

というとメダルを投げて消えた。

映司「アंक・・・2枚だけじゃ変身できないよ・・・」

比奈「そうだ、映司君！さっきひろったんだけどこのメダルつかって！」

そういつてシヨッカーメダルを投げる。

映司「え？何だ？このメダル。だけどこれでメダルが揃ったぞ。」

そう、タカ！イマジン！シヨッカー！三枚のメダルが揃ったのだ。

アंक「くそっ！余計な真似を！」

映司「変身！」

そしてみんなから受け継いだメダルをスキャンする！

ベルト「タカ！イマジン！シヨッカー！タマシイタマシイタア
アアマシイライダーダマシー！！」

たしかこんなかんじだった。

そう、友情パワーによって新しいコンボが誕生したのだ！

比奈「あの足コンドルの色違いじゃ・・・」

映司「それ以上言っちゃいけない！比奈ちゃん。」

比奈「ごめんなさい！」

素直に謝れるのはとても素敵なことだね。みんなも何か悪いことをしたときは素直に謝ろう！

アंक「くそ！この俺がまけるわけないだろうが！」

また炎攻撃をする。しかしぜんぜん効いていない。

映司「くらえ！みんなの思い！」

メダルをスキャンする！

ベルト「スキヤニングチャージ？」

すると、さっきのアंकの攻撃で残ってた周りの炎が手の中に集まる！そしてショットカーメダルの形をした炎を投げる。

アंक「炎？馬鹿か、俺に効くわけ・・・何だと？このおれが押さるのだと？」

そう、この炎は特別なんだ。防げるわけがない！そしてさらにタカ

メダル、イマジンメダルの形をした炎を打つ！

映司「そうだ、俺はみんなの思いも背負って戦っているんだ。たった1人で戦っているお前じゃ話にならない！せいやああああ！」

アंक「うわあああ！」

倒した。これで街に平和が訪れる。

映司「という夢を見たんだ。」

翔太郎「俺たちの扱いひどくないか？特に俺の！」

フィリップ「確かに、僕すぐに殺されちゃったよ。」

照井「俺なんて敵だぞ？」

亜樹子「いや、まだいいよ。私一回も出てきてないんだよ？」

アंक「なんだよ！俺の偽物って、ふざけんじゃねえぞ！」

映司「俺だって、見たくて見たわけじゃ無いし、しょうがないだろ。」

フィリップ「いや、だからってこれはない。」

翔太郎「だよなあ、俺がもっと活躍すればよかったのに。」

映司「まあ、二人の仇は討ったんで、まあ、今ならなんでもいけそうですね。」

亜樹子「あ、いけないなあ。まだ目が覚めてないみたいだね。プールに一回落ちとく？」

映司「え？出てこなかったのそんなに悔しかったんですか？」

翔太郎「よし！落そうぜ。そんで目を覚まさせてやろうぜ？」

フィリップ「いいね。」

アंक「その話乗った！」

照井「自業自得だな。」

映司「え？ただ夢で見た事を話したただけなのに……」

亜樹子「じゃあ、いつくよぉー！」

映司「うわあああ！」ぼとん

第五回目（後書き）

地の文つけて見たんですけどキモかったんでやめます。あ、今回はドルアーガを参考にしました。最後らへんの展開とか書いてる自分でもサッパリだったんで、わからなくてもしょうがないですよ。オチですが第五回にしてやっとで落ちましたね。今回いつもにまして読みずらかったかもしれませんが、最後まで読んでくれてありがとうございます。

第六回目（前書き）

楽しみにしてた皆さんすいません！遅くなりました！

第六回目

翔太郎「これが、焦らしプレイって奴か。」

フィリップ「何を言ってるのかわからないけど、楽しみにしてる人いたのかな？翔太郎。」

翔太郎「いたに決まってるんだろ！更新してない時だって、一人や二人は一日に見にきてくれてたよ！」

亜樹子「それは更新したら、暇つぶしに見てみるか程度だと思うよ？残念だけど。」

照井「ふっ、一人や二人って所詮この程度だよな。お前の書く物なと。」

翔太郎「うーん、やっぱり俺はこの角度が一番帽子が似合うのかなあ、フィリップ！」

フィリップ「何だい？いきなり。」

翔太郎「俺ってやっぱり帽子が誰よりも似合っちゃうのかな？」

フィリップ「うーん、どうだろう？ねえ、アキちゃん？」

亜樹子「翔太郎君？全然、まだまだだね！」

翔太郎「まあ、この大人の渋さはまだガキにはわかんないか。」

亜樹子「何ですって？」

翔太郎「なんだよ！」

フィリップ「まったく、ケンカはやめたまえ。」

真木「まったく、騒がしいですね。」

フィリップ「Dr・真木？一体どうしたんですか？」

翔太郎「こっちは今立て込んでんだ！用があるなら今度にしてくれ！」

真木「そんなこと言って良いんですか？せっかく、良い物を持ってきたと言っのに。」

亜樹子「え？なにになに？」

真木「ふふふ、よく聞いてくれました。その名も・・・誰でも簡単にハードボイルドになれる銃！」

フィリップ「まんまだね。」

亜樹子「ネーミングセンスないなあ」

翔太郎「・・・」

フィリップ「どうしたんだい？翔太郎。」

亜樹子「流石に翔太郎君でも引つかからないよね。胡散臭すぎる。」

真木「そうですか、なら私はこれで。」

翔太郎「な、何だとおおお？誰でも簡単にハードボイルドになれるだとおおお？」

フィリップ「翔太郎？いきなりどうしたんだい？」

亜樹子「ていうか、反応遅っ！」

翔太郎「それなら、是非、是非とも俺にやらせてくれ！」

亜樹子「えええ？翔太郎君正気？」

フィリップ「まさか、本当にやる気じゃないだろうね？」

翔太郎「別にやりたいわけじゃないけど、せっかく持ってきてくれたのにこれじゃあ真木先生が可哀想だろ？」

亜樹子「さっきまでと態度が全然違うね。」

真木「あなたなら、そう言ってくれると思ってましたよ。でわさっそく。」

翔太郎「俺に任せとけ！」

亜樹子「ああ、馬鹿らし、行こう？フィリップ君。」

フィリップ「翔太郎！それは危険だ！やめてくれええ！」

翔太郎「もう、これしかては無いんだよ！うおおおおお！って怖いから亜樹子で試し打ち。」バシユ！

亜樹子「あばばばば・・・」

フィリップ「アキちゃん？だから危険だと言ったんだ！」

翔太郎「あれ、この後ろ姿はまさか？」

亜樹子「・・・翔太郎おお、半熟に帽子は似合わねエって言ったよな？」

翔太郎「おおおお！」

真木「実験は成功しました！私たちの未来に良き終わりが訪れんことを。」

翔太郎「なにいつてんだよ！これからじゃねえか！」

アंक「そのとき、そいつがこう言ったんだ。コアメダルが一枚、コアメダルが二枚、コアメダルが三枚、コアメダルが四枚、コアメダルが五枚、コアメダルが六枚、コアメダルが七枚、コアメダルが八枚、コアメダルが九枚、一枚足りない・・・それは俺のコアだアあああああ！」

比奈「きゃああああ！」ドゴッ！

映司「もう、比奈ちゃん怖がりすぎだよ。はは・・・」

比奈「でも、怖かったんですよ!」

映司「やり過ぎだよ。」

アंक「・・・」

映司「まあ、アंकには良い薬になったかもね。」

比奈「そういえば、この体、お兄ちゃんのだったんだ!ゴメンね?
お兄ちゃん!」

照井「本当に良いのか?フィリップ。」

フィリップ「ああ、翔太郎ではダメなんだ。僕のPowerについてこれないんだ。でも、照井竜。君なら。」

照井「今なんていった?・・・おい、フィリップ!左はもうダメだ
って?ダメとか言ってる間は絶対にダメなんだよ!」

フィリップ「でも、このままじゃ・・・きつと」

照井「お前が、左に悪魔とあいのりする勇氣あるかなって聞いたんだろ?お前が先にリタイヤしてどうすんだ!」

フィリップ「でも・・・もう翔太郎とはうまくやって行く自信が無

い。」

照井「そんなこと無い！きつとあるはず！翔太郎と仲良くできて、また元のように変身できる方法があるはず！もっと考えるよ！」

フィリップ「・・・エクストリームメモリ。」

照井「ほら、あるじゃ無いか！俺の行った通りだったろ？」

フィリップ「やっぱり、僕の相棒には翔太郎しが務まらないな。」

照井「声が小さい！もっと大きな声で！」

フィリップ「もう一度、悪魔とあいのりしてくれるかな？翔太郎！」

照井「ぜんっ全気持ち伝わってこないよ！」

フィリップ「僕には君が必要なんだ！翔太郎おおお！」

照井「わかったけど、俺に言ってどうすんだ！そんな事！」

フィリップ「・・・はい。」

真木「特技は地球の本棚とありますが？」

翔太郎「はい、地球の本棚です。」

真木「そのちきゅうのほんだなとは一体なんですか？」

翔太郎「相棒の必殺技です。あ、ちなみにちきゅうと書いてほしつて読むんです。」

真木「え？相棒の必殺技？」

翔太郎「はい、これがあればなんでも検索できます！」

真木「でもそれはあなたの必殺技じゃなくて、相棒の必殺技なんですよね？」

翔太郎「俺と相棒は一心同体なんです。だから、相棒の必殺技は俺の必殺技同然です！」

真木「はあ、で？その地球の本棚とは我が社に入るうえでなんのメリットがあるとお考えですか？」

翔太郎「これがあればヤミーなどが出てきても一発でどこにいるのかが出てきます。」

真木「いや、ヤミーは直ぐに倒したらメダルが増えないじゃないですか。」

翔太郎「でも、その他のことでも調べられます。例えば・・・知代子さんの事とか。」

真木「ふざけないでください。なんでそこで知世子さんが出てくるんですか。それに字がちがいます。」

翔太郎「知世子さんのパンツの色はですね・・・」

真木「聞いてません。帰ってください。」

翔太郎「あれ？良いんですか？怒らせちゃってあなたの秘密バラしちゃちますよ？地球の本棚使っちゃいますよ？」

真木「いいですよ？使ってください。地球の本棚とやらを。それで満足したら帰ってくださいね？」

翔太郎「チツ！運がよかったな。今日はフィリップの調子が悪いみたいだ。」

アंक「あアゝ暇だ。」

翔太郎「おい、アंक！」

アंक「あ？なんだよ！この半熟！」

翔太郎「おい、見たぞ！25話！なんだあれは！」

アंक「はあ？お前なに言ってた？」

翔太郎「俺はなア、アंक。24話での次回予告の時のあいつを倒されたら困るつてのは映司の事を言ってると思ってたのに、何なんだ！お前は！！」

アंक「だから！お前は、なにいつてんだ！ってさっきから言ってるだろうが！」

翔太郎「まったく、俺の予想ではな、タジャドル以外で苦戦してそして、アंकがさっきの事を言って、メダルを渡す、しかし意外に強くてタジャドルでも勝てない。そして、川に映司が落ちて次回に続いて最初は映司よりも、自分のメダルの事しか心配してないけど、比奈にさとされて、映司の事を心配する。みたいな感じを予想してたんだよ！」

アंक「あ、終わった？」

翔太郎「聞いてなかったのかよ！」

アंक「まったく、ってどこまではきいた。」

翔太郎「全然聞いてないじゃねえか！少しは俺とフィリップの事を見習ったらどうだ？」

アंक「はあ？俺と映司がお前らみたいな関係だと？」

映司「覚悟しろ！ヤミー！俺がお前を倒してやる！」

アंक「おいおい、それを言うなら、俺達がだろ？相棒！」

映司「だったな。アंक！メダル！」

アंक「ああ！」

アंक「ないな。」

翔太郎「頑張れよ！俺も応援するから、な？映司だって、本当はお前と仲良くしたいはずだ。お前だって最初は緊張するかもしれないでもそれは最初だから！俺も最初はフィリップ見た時は、何だこいつ？と思ったけどな、あいつが俺の事を相棒と認めてくれたんだ。あいつ、最初なんだったと思う？悪魔とあいのりする勇氣あるかな？だぜ？そんな事言われなくてもやってやるってんだよ！それに、あそこ切り抜けるにはあれしかなかったしな・・・っていねええええ！！・・・ん？書き置き？えーと、話長い。だとおおおお？」

シュラウド「それでは、第一回、ダブルが好きならこれ位当たり前？フィリップ「もういいから、早く始めてよ。」

シュラウド「Light・・・えーと、それでは回答者を紹介したいとおmフィリップ「いつものメンツだよ。早く問題しゃべりなよ。」

亜樹子「ねえ、フィリップ君シュラウドさんにたいして冷たくない？」

翔太郎「あー、それは俺も思っていたけど・・・」

フィリップ「ん？どうかしたの？二人とも。」

亜樹子「ななななんでもないよ？」

翔太郎「ああ！別にお前のシュラウドへの態度がおかしいと言っていないぞ？」

亜樹子「バカ！翔太郎君のバカ！」

翔太郎「あ・・・」

フィリップ「え？何か言った？」

翔太郎「ふいー、セーフ。」

亜樹子「危なかったね、本当気を付けてよね。」

シュラウド「それでは第一問。エクストリームメモリの頭文字はなんでしょう。」

フィリップ「簡単だね。」

亜樹子「えーと、確か・・・これだった様な？」

翔太郎「エクストリームだから。コレだろ！」

シュラウド「えーそれでは回答者の皆さんが答えを書き終えた様なので、答えを見せてもらおうと思います。ではLighthouseさんから。」

フィリップ「簡単だね。答えはXさ！」

亜樹子「えー？エクストリームなんだからEでしょ！」

フィリップ「甘いね、アキちゃん。これでは×何だよ。」

亜樹子「えー？本当に？」

翔太郎「まあ、亜樹子は分かってたが、まさかフィリップ。お前まで間違うとはな。」

亜樹子「亜樹子はつてなによ！」

フィリップ「と言う事は、翔太郎はこのふたつでもないってこと？」

翔太郎「ああ！俺の答えはAだ！」

フィリップ「……」

亜樹子「……」

フィリップ「A？」

亜樹子「なぜ？」

フィリップ「いや、アキちゃんの間違いは分かるよ？普通はEだからね。でもAって。」

翔太郎「いや、エクストリームのAだろ！」

亜樹子「ローマ字ですらない。」

フィリップ「これはひどい。」

翔太郎「で？正解はなんなんだよ！」

シユラウド「正解はL i g h tのXです。」

亜樹子「えー？」

翔太郎「はあ？」

フィリップ「アキちゃんは惜しかったけど、翔太郎は勉強した方がいいよ？」

亜樹子「いつもローマ字で書いてるからそんな事になるんだよ！これを機会に勉強しなね。」

シユラウド「第二も〜ん。私の性別はどっちでしょうか？」

翔太郎「いや、普通に声とかからして・・・なあ？」

亜樹子「うん、おんなだよな。」

シユラウド「本当にいいの？見た目に騙されてるんじゃない？声にしたって変声機使ってるのかもしれないし。」

翔太郎・亜樹子「・・・え？」

翔太郎「え？シユラウドってフィリップのげふんげふんだよな？」

亜樹子「うん、多分フィリップ君のげふんげふんだよ。」

翔太郎「だよな？じゃあ、あれは嘘？」

亜樹子「でもあの自信のあれはもしかしたら男なのかも。」

翔太郎「え？じゃあ、フィリップのげふんげふんじゃないのか？」

亜樹子「うーん、そこらへんどうなの？フィリップ君。」

フィリップ「いや、普通に女でしょ。」

亜樹子「ですよー」

映司「あーお腹すいた」

比奈「じゃあ、学食行きませんか？」

亜樹子「あ、二人とも学食行くの？じゃあ、私たちも一緒に行つていい？」

比奈「良いですよ？ね、映司君。」

映司「え？うん。」

亜樹子「じゃあ、行こっか、竜君も。」

照井「なにっ？俺もか？」

亜樹子「君もだ。と言っわけだから行こっか？」

映司「でも、ここの学食高くないですか？」

亜樹子「あー確かに高いよね。」

比奈「美味しいからちよつと高いくらいじゃそんなきになんないですけどね。」

映司・亜樹子「甘い！甘すぎだよ？比奈ちゃん！」

映司「俺たちにとってはその数百円が命取りになるんですよ！」

亜樹子「そうだよ！ねえ、竜君。」

照井「そうか？」

亜樹子「なん・・・だと？竜君が私の意見に反対？」

映司「いや、貧乏にはきついですって。」

アंक「まあ、確かに高いよなア。あそこの学食。アイスもないし。」

亜樹子「アंक君は

そっちが本音だね？アイス。」

アंक「悪いーか？ああ？」

亜樹子「怖い！助けて竜君。」

照井「そうか。」

亜樹子「な、なに？」

比奈「で？それがどうしたのよ。アंक。」

アंक「俺が、安くしに交渉してきてやっても良いって言うてんだよ。アイスのついでだけだな？ただで食える様にしてやるよ。」

亜樹子「いつちゃった・・・」

比奈「まあ、ただで食べれる様になるとは思わないけど。」

映司「じゃあ、アंकに期待して、学食に行つてようか。」

アंक「おい、こうがみいるか？」

里中「こうがみなら、なかにいますが。」

ガチャ

アंक「おいしいい！なんでここの学食にはアイスおいてないんだよおお！それとたけええんだよ！」

こうがみ「おお、アंक君か。そろそろ誰か学食が、高いと講義してくると思つていたが、まさか君がくるとはな。」

アंक「ただにしてもらいにきたぜ。それとアイス！」

こうがみ「うーんただは無理だな、アंक君。」

アंक「だったら、お前を倒して、俺がTOPになればいいってことか。」

こうがみ「アツハハハ、それは無理だよ。アंक君。このシステムは全て私の意思で止めたり、再開したりできるんだ。お、丁度いい。見て見たまえ。」

アंक「ああ？映司？」

映司「お、やっと俺の番か。何にしようかな。やっぱここはコレだな。ポチつとな。って出てこない、え？どうなってんだ？出て来いよ。」ばんばん

アंक「あいつなにやってんだ？」

こうがみ「言ったとおりだろ？アंक君。まあ、私は優しいからね、70%までならまけてやってもいい。」

アंक「はあ？70%？もつと安くしろ！」『大口叩いて行った割に70とかだったら、絶対比奈に殴られる。』

こうがみ「いや、70は変えられない。」

アंक「くそ！50だ！」

こうがみ「70」

映司「ちょ、なんで出てこないんだよ！出て来いよ！はい、出てきた〜・・・ははっ。なんで出てこないんだよ。」

おい！いつまでやってんだ！後ろつかえてんだぞ！さっさとしろ！

落ち着きなよ。

映司「俺が悪いのか・・・なんで出てこないんだよ。」

こうがみ「で？どうするんだい？」

アंक「くそっ！70で良しとしてやるよ！」『あー帰りたくねえー』

こうがみ「ハッピーバースデー！！謙虚な君に免じて60%にまけてあげよう！」

アंक「なん・・・だと？つかアイスも増やせよ。」

こうがみ「アंक君！アイスは裏メニューであるんだよ！知らなかったのかい？」

アंक「何だと？それは本当か？」

たくなにしてんだよ！俺にかわれ！出てくるじゃねえか！俺のハ-

ドバイル并きた！

映司「え？俺のかねで買ってた。つか、なで普通に出てきたの？」

アंक「おい、アイス！1個！」

おばちゃん「そんなメニューないよ。」

アंक「何だと？」

里中「いやあ、まさかあのアंकが妥協するとは思いませんでした
ね。」

こうがみ「ははっ！まさか70で良いと言った時は流石に焦ったけど
ね。」

里中「でも、アイスなかったですよね？」

こうがみ「ああ、あれは嘘だからね。」

里中「ですよー」

翔太郎「なあ、シユラウドの顔見たくね？」

フィリップ「何だい？突然。」

亜樹子「全然？」

照井「全くだ。俺は帰るぞ。」

亜樹子「そくだよね？」『ちよつと見て見たかったかも、』

翔太郎「あアゝどんな顔なのかなああ？タラコ唇？それとも・・・」

照井「別に気になってないからな？」

亜樹子「別に暇なんだから付き合っても良いんじゃない？」『楽しそうじゃん！やろうよ。竜君！』

翔太郎「まさか、シユラウドがあんな顔だったとはなゝまさか、あんな顔だったとはなああー」チラッ

照井「くそっ！行けば良いんだろ。別に気になったわけじゃないかな？」

フィリップ「えー、本当にやるの？別に良いじゃないか。あんなの顔なんて。」

翔太郎「なんだよ、怖いのか？」

フィリップ「怖くないよ、あんな奴。あんなの子だと思つと恥ずかsバシン

亜樹子「たとえ、嫌いでも、産んでくれたお母さんにそんな事言っちゃダメでしょ！」

フィリップ「ええええ・・・」

翔太郎「これから、そいつのマスクはぎに行こうとしてる奴のセリフじゃねえ・・・」

亜樹子「うーん何か案ない？」

翔太郎「そして普通に戻った。」

照井「なら、食べ物をあげると見せて、みるというのはどうだ？まさか、たべるときも包帯つけるとは考えられない。」

翔太郎「おいおい、そんな誰でも考えられそうな案で大丈夫か？」

照井「大丈夫だ、問題ない。」

亜樹子「でも結構用心ぶかそうじゃない？誘ってもこないんじゃないかな？」

照井「それについても大丈夫だ。」

シユラウド「まさか、来人がご飯に誘ってくれるなんて、嬉しいわ。」

フィリップ「う、うん。」

照井「な？」

亜樹子「すごいね、竜君。」

翔太郎「すごいけど、そのどや顔うぜえええ。」

シユラウド「あら、連れも一緒だったのね。」

翔太郎「どーも。」

亜樹子「本当なら家族水いらずで食べさせてあげたいんですけどね。すいませんねええ。」

シユラウド「なんか、こんなに見られてると食べずらいわ、というかあなた達は食べないのかしら？」

亜樹子「いやいや、今日はシユラウドさんの日頃の行いに感謝しての食事会ですから。」

翔太郎「ああ、別に怪しい事企んでないから！顔が見たいとか思っ
てないから！」

亜樹子「またかよ！翔太郎！！」

シユラウド「え？何か言ったかしら？」

亜樹子「あはは、何でもないです！」

翔太郎「おいおい・・・フィリップといいこいつと良いこの親子耳
妻ってんじゃねえか？」

亜樹子「聞かれなかったからよかったけど、またかよ！翔太郎君！

本当気を付けてよね。さつき本当ね、怒りで君つけるの忘れちゃったよ。」

フィリップ「本当、気を付けてくれよ？僕が頑張って呼んできたんだから！」

照井「全く、最近だらしねえな。」

亜樹子「翔太郎君はいつもだらしないよ！本当！」

翔太郎「いや、ひどくね？間違いは誰にでもあるだろ。人間だもの。」

シュラウド「さつきからなにこちゃこちゃ話しているの？」

亜樹子「何でもないですよ。」

翔太郎「ほらほら、冷めないうちに食べてくださいよ。」

フィリップ「みんなそう言ってるんだし、僕たちの事は良いから食べなよ。」

シュラウド「そう？ならいただきまーす。」シュルル

翔太郎「き、きたあああ！」

亜樹子「あ、あと少しでみえる。」

照井「・・・」ゴクリ

フィリップ『みんななんでそんなに必死なんだか。そんなに見たいものかな？』

アंक「おい、お前らなにやってんだよ！」ガシッ

翔太郎「な、何故このタイミング？いつもならめんどくさいとか言
って、俺たちには絡まないのに。」

比奈「何いきなりどっか行っと思ったたら。なにしてんの！」

アंक「いや、なんか美味そうな匂いがして。」

亜樹子「はっ！そ、そうかシユラウドさんにだしたチョコレートパ
フェがいけなかったのか！アंक君め、このスイーツ！」

アंक「ああ？なんだと？」

フィリップ「て、食べ終わっちゃってるよ！みんな！」

亜樹子・翔太郎「「なんだって？」」

シユラウド「久しぶりに食べたから美味しかったわ。じゃあ、帰る
わね。」

亜樹子「なん・・・だと？」

翔太郎「お前らのせいで、見れなかったじゃねえか！」

比奈「なんかよくわかんないですけど、ごめんなさい。」

アंक「あ？なにいつてんだ？あ、俺にもチョコレートパフェ一つ。」

翔太郎「てええ、なにナチュラルに頼んでんだよ！」

アंक「悪いのか？」

翔太郎「悪いいよ？」

亜樹子「ちょ、ちょっと！竜君のようすがおかしいんだげど。」

翔太郎「あ？そんなのBボタン連打してれば良いだろ！見れなかったか・・・」

亜樹子「いや、本当真面目に聞いてよ！」

フィリップ「どうかしたの？」

照井「まさか、シユラウドがあそこまで美しかったとは・・・俺の彼女より可愛かったぞ。」

亜樹子「え？俺の彼女つてもしかして私？もう、竜君ったらあ！つて俺の彼女より可愛かったぞって言った？今俺の彼女より可愛かったぞって言った？」「竜君！目を覚まして！私の方が断然かわいいでしょ？」

翔太郎「と言う事は、照井は見たのか？」

照井「ああ、言葉では言い表せないくらいやばかった・・・」

アंक「お前らなにさっきから言ってるんだ？」

比奈「はあ、シユラウドさんの顔ですか・・・」

アंक「なんか面白そうな事やってんじゃないか！」

翔太郎「くそっ！こうなったらもう一回だ！行こうぜみんな！」

亜樹子「て、竜君はどうすんのさ！」

翔太郎「動けないものの事は放っておけ。今はシユラウドだ！」

フィリップ「そういえば、火野映司の姿が見えないようだけど・・・
どうしたんだい？」

比奈「あー、なんか風引いたみたいですよ？」

亜樹子「えー？映司君風引いたの？全く子供は風の子元気な子って
言うのにね！全く翔太郎君をみらないなよ！」

翔太郎「なあ、それは俺が馬鹿っていつてんのか？」

亜樹子「あ、馬鹿でも分かった？」

翔太郎「亜樹子おお！」

フィリップ「馬鹿は風を引かないって、そらは気づかないってだけで馬鹿も風は引くんだよ？」

亜樹子「へえ、そうだったんだ。じゃあまず、映司君のどこ行こうか。」

比奈「因みに、なにしにいくんですか？」

亜樹子「え？もちろん連れてくるために。」

比奈「え？話し聞いてました？映司君風邪って。」

亜樹子「うん、聞いてたよ？でも風邪だからっていえにいたら、よくなるのもよくないよ。」

比奈『だ、だめだこいつ。』

亜樹子「じゃあ、竜君。待っててね。映司君起こして、シユラウドさんの顔みてるからね。じゃあ、行こうか。」

アंक「あ、追加な？」

翔太郎「そんでお前は当然の様にお代わりすんな！」

亜樹子「私達の戦いはこれからだ！」

翔太郎「あの・・・純正じゃないメモリって触っても勝手に刺さったりしませんよね？」

アंक「いい、アイスだけあればいい。」

フィリップ「まっずいなー左手透けかけてんの気づかれたら心配されちゃってまずいなア」

莊吉「なんでもいってくれ、亜樹子。俺今ブルドーザーに押し潰されかけてるから電話しづらいと思うけどさ。」

カザリ「うん、お休み、鷹の目に気を付けて戦ってね。うん、まあ、経験上ね。」

翔太郎「また、言っちゃったよ、お前はもういないってのにな・・・フィリップ。」

大道「今からこのモニターで俺が演説するわけだけど、本当にメモリ持ってきてくれるのかよ。」

照井「すぐに分かる、押して鳴ればメモリ、鳴らなければ酢昆布だ。」

亜樹子「一目で分かった、それ酢昆布でしょ。」

翔太郎「ハードボイルドじゃない自分？・・・てのはちょっと想像できないかなア？」

霧彦「宇宙からみたら俺、風都君っぽく見えてんのかな。」

レイカ「きつとメモリの方から刺さりにきてんだろうな。」

照井「サツとメモリをだしてベルトにさす感じ。俺はそんな感じ。」

映司「あの雲、パンツに似てない？」

フィリップ「ううん、大丈夫。最後の変身で消えちゃう僕も悪いしさ。」

翔太郎「ベルトなんてなくなつて俺たちはつながってる！」

後藤「俺ってそんなに誤射してるイメージある？それどこ情報よ、それどこ情報よ」

山城「あーそっかーフィリップ君まだこの話知らないんだーそっかそっかーごめーん。」

琉兵衛「エクストリイイイイイム？」

亜樹子「映司君の家の前についたけどどうしよっか。」

比奈「本当に来ちゃったよ。」

翔太郎「さつさと映司連れてこようぜ！」

亜樹子「だね。」ピンポンピンポンピンポンピンポン
ーン

フィリップ「出ないね。」

比奈「もう帰りませんか？」

亜樹子「いや、ここまで来たんだから、引けないよ！」

翔太郎「呼べば出てくんじねえ？」

亜樹子「だね、じゃあ、こうやるから・・・分かった？」

アंक「はあ？俺はやんねえぞ？」

比奈『はあ、やるしか無いのかな。』

翔太郎「じゃあ、やるか！」

亜樹子「エージ！」

フィリップ「エージ！」

比奈「エージ。」

翔太郎「エージ！」

アंक「やんねえよ？俺はやんねえぞ！」

翔太郎「おいおい、恥ずかしいのはお前だけじゃないんだよ。」

亜樹子「そうだよ、ファイト！」

比奈「アイスあげるから。」

アंक「仕方ねえな、ちょっとだけだかな？」

亜樹子「よし、じゃあもう一回やろっか。エージ！」

フィリップ「エージ。」

比奈「エージ。」

翔太郎「エージ！」

アंक「か、カモーン！」

亜樹子「・・・出てこないね。」

比奈「いや、もう本当にやめときましようよ。」

フィリップ「だね。もう出て来ないよ。」

亜樹子「うーん、しょうがないね。」

翔太郎「じゃあ、シユラウドの顔見てこようぜ。照井をあそこまで
するとは、見る価値あるだろ。」

亜樹子「いたよ！シユラウドさん！」

翔太郎「でつけえこえだすんじゃないねえ！ばれたらどーすんだ！」

アंक「おめえも、でかいんだよ！」

比奈「アंकもね・・・」

翔太郎「俺、一回尾行やって見たかったんだよねあゝ！あ、どうせならアンパンと牛乳持つてくればよかったなあゝ！しまったなあ！」

亜樹子「ちよつと、馬鹿な事言つてないでよ！見失うよ！」

アंक「押すんじゃないねえ！ちよつと、俺はみ出してるんだからよ、ばれるつつの！」

比奈「ちよつと、シユラウドさんこつち向いたよ！」

亜樹子「ほら！翔太郎君がよくわかんない事いうから、ばれたじゃない！」

翔太郎「ちげえよ！アंकがはみ出してたからだよ！」

アंक「何だと？大体お前らのせいではみ出したんだろうが！」

フィリップ「静かにしたまえ、本当にバレるよ。」

亜樹子「て、こつちに向かつてくるよ」

翔太郎「落ち着け！こういう時こそ落ち着くんだ！俺達は今地球と一体だ！バレないバレない。」

アंक「だからうつせえ！」

亜樹子「アंक君もだよ！ってあたしもか・・・ば、バレるうう。て、あそこで止まったよ。」

シユラウド「さすが、私の娘ね可愛いわ。」

比奈「あれ、あのままいっちゃいましたよ?」

亜樹子「何だっただろ・・・」

翔太郎「若菜姫のポスターみてたっばいな。」

亜樹子「とにかく見つからなくてよかったよ。」

フィリップ「あ、曲がったよ!急がないと!」

翔太郎「やつべ!」

亜樹子「早く早く!見失っちゃうよ!アंक君も走って!」

アंक「しょうがねえなあ。」

比奈「こんなんで大丈夫なのかな?」

翔太郎「い、いねえ。」

亜樹子「本当だ。」

フィリップ「さすが、神出鬼没のシユラウドだ・・・」

シユラウド「あなた達ここでなにやってるのかしら?」

5人「うわあああ!？」

シユラウド「そんなに驚かなくてもいいじゃない。」

翔太郎「いきなり現れるなよ・・・」

亜樹子「そ、そうだよ。びっくりした」

アंक「お、俺はびっくりしてないからな？」

比奈「アंक声震えてるよ？」

シユラウド「で？なにしてたのかしら？」

亜樹子「い、いやあくきょうは大変お日柄も宜しくて絶好のお散歩日和だね！」

翔太郎「あはは！全くだ！こんな日に家にいたら腐っちまうよ！」

アंक「こんな日にアイス食べたら美味しいだろうなあ！」

比奈「さっき食べたじゃん。」

アंक「うつせえ！」

シユラウド「じゃあ、私はもう行くわね。」

翔太郎「ああ、」

亜樹子「さようならあ」

フィリップ「だめじゃないか。」

アंक「なんで、帰したんだよ！あそこで顔見せてくださいっていえばよかったじゃないか！」

翔太郎「なら、お前がどうか？」

アंक「いや、いい。」

比奈「もう見れないんじゃないですか？」

翔太郎「諦められるかよ。」

アंक「だめだな、このままじゃ、これからは一人一人で行こうぜ。」

翔太郎「確かに、数が多いとばれ易いしな。」

亜樹子「じゃあ、誰がはぎとれるか勝負だね！」

翔太郎「思ったんだけど、それやったら圧倒的にフィリップ有利じゃない？」

亜樹子「ならさ、さっきもフィリップ君にってもらえばよかったんじゃない？」

アंक「いや、俺たちがいるからダメだったろうな。」

翔太郎「だよな。」

フィリップ「じゃあ、僕が参加しなければ良いんじゃない？」

亜樹子「それで行こうか！」

比奈『なんか、最初は見るだったのに、勝負になってる。フィリップ君に頼ませた方が良いのに。』

亜樹子「じゃあ、順番決めようか。」

翔太郎「ジャンケンポン！」

比奈「私が一番かあ。どうしようかな。というか私の事あつちは知ってるのかな？」

シュラウド「あら？比奈ちゃんじゃない。」

比奈「あ、シュラウドさん。というか私の事知ってたんですね。」

シュラウド「もちろん知ってるわ。」

比奈「なんか、感動した。この人から剥ぎ取るなんてできないよ。じゃ、じゃあ私はこれで。」

シュラウド「ええ。」

比奈「ごめんね。みんな、無理だった。」

翔太郎「しゃーないしゃーない。」

亜樹子「最初からできちゃったらつまないしね。」

翔太郎「じゃあ、次は俺だな。」

翔太郎「おし、今度はちゃんと尾行する為にアンパンと牛乳買ってくるか・・・お、ちょうどシュラウドもいたぞ！こいつは長くなりそうだな。だがアンパンと牛乳がこっちにはあるからな。長期戦でも大丈夫って・・・シュラウドなかなか動かないな。」

翔太郎「まさか！・・・やられた！人形とか！」

翔太郎「てへっ！ごめんね。」

アंक「まあ、失敗すると思ってたけどな。」

亜樹子「まあ、翔太郎君だもん。期待は裏切らないよ。」

アंक「まあ、次は俺だからなちゃちゃっと終わらせてくるか。」

アंक「おい、シュラウド！アイス食わないか？」

シュラウド「いえ、さっき食べたからいいわ。というか誰？」

アंक「何だと？」

翔太郎「といふかな、アंक。食べ物作戦は失敗したばかりか。」

比奈「私も知られてたのにアंक覚えてないとか。ぷぷっ」

アंक「うつせえ！」

亜樹子「まあ、この亜樹子様に任せなさい！」

亜樹子「いた。見つからない様に・・・サッ！サササッ！」

シユラウド「なにしてるのかしら？亜樹子ちゃん。」

亜樹子「ば、ばれた？」

シユラウド「そりゃ、あれだけ派手な動きしてたら、誰だって気付くわ。」

亜樹子「いやあ、暑いすな。シユラウドさんもその包帯外したらどうです？」

シユラウド「大丈夫よ、案外これ通気性よくって。亜樹子ちゃんもつけてみる？」

亜樹子「あー、いえ結構です。」

翔太郎「けつきよく、亜樹子もダメじゃねえか。」

亜樹子「いけると思っただけだな」

フィリップ「別に良いじゃないか。見れなくても。シュラウドの顔
面包帯っていうじゃないか。」

亜樹子「え？なにそれ。」

翔太郎「聞いた事ねえよ！そんなの。」

比奈「まあ、つまり見なければどんな顔かいろいろ想像できるって
事だね。」

フィリップ「そうそう、だから良いんじゃないかな？」

翔太郎「だな、飽きたし。」

亜樹子「そうだね。」

第六回目（後書き）

えーと、取り敢えず更新する日がわからないという人は、普通は土日、遅くて月火水、早くても金曜でそんなくらいにみてくれるといとおもいます。あとまた、できたら週一にして行きたいなと思います。書いてる時はあとがきなりに書くとか考えてたけど忘れた。

第七回目（前書き）

えーと、遅くなりました。その割には、あんまり出来は良くないです！すいませんつつかこれだと何時もは出来いいみたいです。すいません。

第七回目

土「大体分かった。」

夏海「ちよつと、土君！本当に分かったんですか？」

ユウスケ「そーだよ！お前さっき寝てたろうが？聞いているはずないだろうが！分かった分かったいつてりや良いってもんじゃねえんだよ！」

海東「まったく、朝から騒がしいね、君達は。」

土「君達はじゃない！ユウスケだけだ。」

夏海「そうです。土君のいう通りです。うるさいのはユウスケ君だけです。」

ユウスケ「夏海ちゃんまで・・・ひどいよ！」

海東「確かに。夏メロンと土のいう通りだな。うるさいのはユウスケ、君だけだ。」

夏海「私は夏メロンじゃありません！」

土「そうだぞ、海東。夏みかんだ。夏メロンなんかじゃないからな？」

夏海「土君のいう通りです。夏メロン何かじゃありません！」

土「そうだよな、夏みかん。」

夏みかん「って土君も違いますよ！もう、怒りました！笑いのツボ！」

土「あー、ちよつ、ちよつと、タンマ！それはマズ・・・アハハハ。」

海東「な、何で僕まで・・・アツハハハハ。」

土「で？夏みかん。話つてのは何だ？」

夏海「土君やつぱり聞いてなかったんじゃないですか！」

ユウスケ「ほらな！俺の言つたとおりだったろ！」

土「あー、ユウスケお前本当うるさい。」

ジユググベ「バンザゾ？ゴロデゼソ！ジガギツシビビレチラダダジヨ！」

ツバガ「ジユググベ！ボボゼザリントボボドバゼザバゲ！」

バヅリ「ツバガブン、ジユググベブン！バビギデスボバババサガギゼグ！デデバダギラゼ！」

海東「君たち良い加減にしたまえ！」

土「冗談だよ、冗談！」

ユウスケ「まあ、ケンカはマジだけどね？オラぁ！表出る！土！」

夏海「全く！ケンカはやめて下さいよ。」

土「ああ？やってやるです！ここでお前をやってやるです！」

鳴滝「おのれ、デイクイドオオオオオ！お前のせいでこの話もグダグダになってしまった！」

土「鳴滝！？」

鳴滝「おのれデイクイドオオオオオ！！」ダキッ！

土「うわっ！は、離れる！」

鳴滝「もう少し・・・このままでいさせて／＼／」

夏海「うわ・・・鳴滝さん、そっちの人だったんですか・・・」

土「勘弁してくれ・・・」

ユウスケ「よかったじゃないか！土、お前ら結婚しちゃえよ！」

海東「よしてくれないか？土は僕のだ！」

鳴滝「お前のせいだ・・・お前のせいで私の価値観も破壊されてしまった／＼／」

夏海「ちょ・・・もう私の近くに來ないでくださいね。鳴滝さん。」

土「おい、この状況なんとかしてくれ！」

夏海「無・理。」

土「いい顔だああ。」

ユウスケ「ところで何で俺たちこんなところにいるんだ？」

夏海「なんででしょう？。」

土「なんでってお前この小説が第10回目を迎えるからな。節目に俺たちが呼ばれたってわけだ」

ユウスケ「へえ」

夏海「あれ？でもこれまだ第7回目ですよ？」

土「なんだと？」

ユウスケ「本当だ」

土「どうゆうことだ？」

夏海「知りませんよ」というか土君

土「なんだ？夏みかん」

ユウスケ「さっきから思ってたんだけどな・・・」

土「ユウスケお前もか？なんだよ」

夏海「土君の名前土になってますよ？」

土「なってるわけ・・・本当だ！！絶対にゆるさねえ！」

ユウスケ「ハハ、お前はもう土に返れて事じゃないのか？」

夏海「アハハ、面白いこといいますね。ユウスケ君」

土「つまんねえよ。なあ夏海」

夏海「おお、珍しく名前で呼びましたね。どうしたんですか？」

土「俺の笑いのツボ押してくれないか？笑わないとやってられない・・・」

夏海「いいですよ！笑いのツボ！」

ユウスケ「これを食べたものはたちどころに笑ってしまうのである！」

土「ハハ・・・笑えないぜ。つつかせめて名前直してくれよ・・・」

夏海「ということで本編始まるよ」

ユウスケ「ばいばい！」

亜樹子「おっはよー。竜君！とその他大勢のみんな。」

翔太郎「俺はズラじゃねえよ！」

フィリップ「ついでに僕もだ！」

比奈「いきなりどうしたんですか？」

亜樹子「竜君！おはよおお！」

照井「そんなに大声を出さなくても聞こえてる。所長。」

亜樹子「あ、ゴメンね？竜君。」

比奈「え？照井さんが冷たい？」

亜樹子「そうなんだよおお。本当朝挨拶してもうるさいって言われるし。私どうしたらいいのおお」

映司「どうしたんですかね。」

アंक「ただ単にお前に飽きたそれだけだろ。お前とは遊びだったんだよ。」

亜樹子「うわーん！」

翔太郎「まあ、実際アंकの言うとお」比奈「アंक酷い！」

映司「そつだよ！亜樹子さんの気持ちも考えるよ。」

フィリップ「今は流石に言いすぎだよ、アंक」

翔太郎「あー・・・アंकひどい！」

アंक「おい！お前明らかに最初俺に同意しかけたよな？」

翔太郎「知らねーし。え？なに？知らねーし。」

アंक「おい！こつち見るよ！」

フィリップ「もういいだろ？でも、本当なのかい？アキちゃん。勘違いとかは？」

比奈「そうですね。きつとお腹減ってたんじゃないかな。」

亜樹子「そんな事で、竜君が冷たくするはずないもん。どうしてこんな事になったんだろ・・・」

映司「ちよつとアंक偵察して来いよ。」

アंक「あ？なんで俺が！」

比奈「そつだよ！亜樹子さんにひどい事言っただからそれくらいしなよ！」

翔太郎「じゃ、がんばれよ」

フィリップ「がんばれよって翔太郎もいくんだよ？」

翔太郎「なにiiiiiii!？」

アंक「一緒に行こうぜ？先輩！」

翔太郎「何で俺まで？」

フィリップ「いや最初アंकに同意しかけてたの聞いてたからね？」

比奈「それにアंक一人だと怠けそうだしここは翔太郎さんをお願いしたいんです！」

翔太郎「なんだよ・・・そうだったのか。それならいつてくれよな。アंकのお守りは俺に任せとけ！いこうぜアंक！」

フィリップ「比奈ちゃんも翔太郎の扱いわかってきたんだね。」

比奈「え？何のことですか？」

アंक「おい・・・ほんとにこれで良いのか？」

翔太郎「静かにしろ！アंकせっかく変装してまで尾行してんだ。黙ってる。俺、変装もしてみたかったんだよなあ！」

アंक「お前もつるせえんだよ！それにこの変装でいいのかよ！」

翔太郎「はあ？どこから見てもアंकと翔太郎だろ？ばつちりじゃ

ねえか。」

アंक「俺がお前の、俺の変装をお前がしてどうすんだ！」

翔太郎「あ・・・っべーな」

アंक「っべーなじゃねえ！」

翔太郎「何勘違いしてるかわからないけどこれわざとだから、後輩に洞察力つけてもらうための演技だから。アंक、この変装のおかしいところに気づくなんて成長したな・・・俺感激だ！」

アंक「うつせー！ごまかされねえよ！？」

照井「おい、お前らこんなとこで何してんだ？」

翔太郎・アंक「バレたあああああ！！！」

照井「何がだ？」

翔太郎「えつとなあ俺たち二人の仲を確かめてたんだよな？なあアंक。」

アंक「そうそう。翔太郎俺たちならできる！」

照井「馬鹿二人にかまってられないな・・・俺は帰るぞ？」

翔太郎「何だとおおお？」

フィリップ「あの二人大丈夫なんだろうか？」

比奈「うーん、たぶんですね。」

映司「比奈ちゃんってけっこう毒舌だね・・・」

翔太郎「何なの？あの態度。おいアंकやっちまおうぜ？」

アंक「お前にはいい事いな。俺も今そう言おうと思ってた
とこだ。」

翔太郎「てえええるいくううん？」

照井「・・・」

翔太郎「シカト・・・」

アंक「おいおい、俺たちをシカトするとはいい度胸じゃねえか！
ああ？」

照井「邪魔だ。どいてくれないか？」

アंक「ここを通りたければ俺たちを倒してからにしろ！」

翔太郎「そうだ！倒してからにしろ！」

照井「いいんだな？倒しても。」

アंक「ああ？やれるもんならやってみろ！こっちはな通信空手うけてたんだぞ？」

翔太郎「奇遇だな。俺も通信販売で物買ったことあるんだわ。」

アंक「この俺たちを倒せるかな？」

翔太郎・アंक「うおおおおお！！！」

照井「ふん！」

翔太郎・アंक「……」

翔太郎「なんだよ、通信空手ってたいたことないじゃねえかよ・・
・お前があんなに意気込んでるから勝てると思ったのによ」

アंक「ああ？それを言うならお前の通信販売とかなんだそりや物
買っただけじゃねえか！」

翔太郎「あ？ウィンドスケールなめんな？」

アंक「やんのか？」

翔太郎「やってやるよ。さっきは隠してたけど実はこの服全部の重
さあわせて120kgなんだ」ドスン・・・！

アंक「宇宙服!？」

翔太郎「うっそだよ〜ん!んなわけねえじゃん。その名のとおり風のように軽いぜ!」

アंक「あゝ、まあわかったから服着たらどうだ？」

翔太郎「・・・うん」

葛木葵「あ、刑事さん、刑事さん!あの人です!突然叫んだかと思うと急に脱ぎだしたんです!」

照井「こいつか。まったく人前で脱ぎだすとは・・・絶望がお前のゴールだ!って左お前なにをしている?」

翔太郎「照井!??ってちがう!何かの間違いだ!」

アंक「ちがうっておまえ脱いでたじゃん」

葛木葵「そうよ、私見てたから!」

翔太郎「いや、まあ確かに脱いではいたけど・・・すみませんでしたあ!」

照井「まったく、手間取らせてくれたな。次はないからな?」

翔太郎「はい、ありがとうございます。刑事さん!って照井刑事じゃねよ!」

アंक「ノ、ノリツツコミだ・・・」

葛木葵「早く行こう？竜」

照井「ああ、そうだな。葵」

翔太郎「え？葵？いつからそんな名前で呼ぶ仲になったのかな？ねえアंकさん」

アंक「まったく、亜樹子さんという人がいながらひどい人。ねえ、翔太郎さん？」

照井「所長？なぜそこで所長がでてくる？」

翔太郎「ひどい！やっぱり亜樹子さんとは遊びだったのね！」

アंक「ひどいわ！」

照井「なんなの・・・こいつら」

葛木葵「ちょっと、あんなやつらほっとこ？竜」

照井「そうだな。行くか。葵」

翔太郎「・・・」

アंक「・・・」

翔太郎「行っちゃったね・・・」

アंक「行っちゃったな・・・」

翔太郎「どうする?」

アंक「どうするか・・・」

比奈「遅いと思ったらなにしてるんですか!」

翔太郎・アंक「うわああああ!」

フィリップ「あははは、さっきの君たちジ。リみたいに髪の毛ブツ
ツてなつてたよ?」

翔太郎・アंक「ジブ。?」

映司「ジブリですよ、ジブリ」

比奈「とうとう伏字なくなっちゃったよ!」

映司「てか、話しがズレてますよ!」

比奈「あつ、そうか。で?何か分かったんですか?」

翔太郎「ああ!分かったぜ。あいつには女が出来てた!」

フィリップ「何だつて?それは本当かい?」

アंक「ああ、間違いない。名前はなんだっけな・・・あ、あ何と
かだよな。なあ、翔太郎」

翔太郎「うーん、あ、か。亜樹子じゃね?」

比奈「あー、なるほど！亜樹子さんか。ってな訳ないでしょ！
どん！」

翔太郎「ゴフツ！その薄れゆく意識の中で私はたしかに見たんです。
俺を見て笑うアンクの姿を・・・てめえ！はかったな？」

アंक「何の事だよ。葵だろ？覚えられないのかよ。それくらい」

フィリップ「それは大変だ。ぼけてきたんじゃない・・・」

比奈「おじいちゃん、ここ段差あるけど一人で大丈夫？」

映司「俺に掴まってください。おじいさん。」

翔太郎「おお、すまないねえ。全く近頃の若いもんは年寄りをいた
わるって事を知らないもんだから・・・しよれに比べてあんたらは、
優しいねえ・・・って誰がじいさんだ！」

アंक「5点」

フィリップ「1点」

比奈「限りなく0に近い1点」

映司「まあ、4点」

翔太郎「低っ！？あ、そうか10点満点中か。それならまあまあか
な？」

比奈「いえ、100点満点中です。」

翔太郎「え？マジで？なら400点満点中11点しか取れなかったのか？」

フィリップ「しょうがないよ。あの出来じゃあ、まあ次がんばろ？」

アंक「と言うか、一人10点満点でも低いだろ」

映司「余計な事言つなよな、アंक」

比奈「だから、話がズレてますよ！別に翔太郎さんがつまないことなんていつもの事ですしどうでも良いじゃないですか！」

翔太郎「つまっ？」

フィリップ「翔太郎、ドンマイ。」

映司「そ、そういえば、亜樹子さんは？」

翔太郎「どうせ・・・俺なんて」

アंक「あいつはどうせショックで家に引きこもってんじゃないのか？」

比奈「確かに、アंकにしてはまともな意見かも！」

映司「ひーきこもりと決めるまえに探してみなよ」

フィリップ「いきなり歌い出したよ、火野映司どうしたんだい？」

比奈「うーん、取り合えず照井さんを探しましょうか。」

フィリップ「じゃあ、二手に別れようか、ほら翔太郎も」

翔太郎「どうせ、俺なんて・・・」

比奈「あー面白かったですよ？翔太郎さん」

翔太郎「だよな？だよなーそれで？ジャンケンだっけ？早くしよ
うぜ！」

比奈「じゃあ、グツとパーであつた人！」

翔太郎「グー」

映司「パー」

フィリップ「パー」

比奈「パー」

アंक「パー」

翔太郎「いや、ちょっとおかしい！なにこれ・・・なんで俺以外み
んなパーなの！？」

アंक「シラネ」

比奈「じゃあ翔太郎さんは、照井さんのほうをお願いします。こっ

ちは今後の展開も含めてマックで作戦会議してますんで」

フィリップ「比奈ちゃんはマックっていうんだ。僕はマクドかな」

映司「あ、俺もマクドです！」

アंक「俺はマックだな」

比奈「マックですよ、やっぱり」

フィリップ「いや、マクドしかないね」

映司「立ち話もなんですし、ついてからにしませんか？」

比奈「そうだね、じゃあいこっか！」

アंक「普通の人はマックだけだな？」

フィリップ「いやいや・・・」

翔太郎「え？ちょ、ちょっと！」

フィリップ「あ、がんばってね、翔太郎」

アंक「日本の未来は君に任せた！」

比奈「がんばってください！」

翔太郎「いや、ちょっとまってよ。一人でやらせるのはあまりに酷
つてもんじゃ・・・」

比奈「じゃあ、私一人でやります。みんなはやすんでください」

フィリップ「いやいや、女の子一人に任せてられないよ。僕が一人でやるよ」

映司「じゃあ、俺がやりますよ!」

アंक「いや、お前らじゃ頼りにならねえ。ここは俺が」

翔太郎「じゃあ、俺が一人でやるよ!」

比奈・フィリップ・アंक・映司「」「」「どうぞどうぞどうぞ!」「」

翔太郎「・・・」

比奈「じゃあ、がんばってください!」

アंक「自分から志願したんだからな?お前がんばれよ?」

フィリップ「なにも好き好んできみにそうゆうことをさせてるわけじゃないんだ。それだけはわかってほしい。じゃ、がんばってね」

映司「元気があれば何でもできる!」

翔太郎「えええええ、行っちゃったよ!」

ウヴァ「こんなとこでなにしてんだ？」

翔太郎「なぜお前？」

ウヴァ「お前の出番をウヴァいにきたのさ！」

翔太郎「つまんねー」

ウヴァ「ウヴァアアアアアアン！！」

翔太郎「泣くなよ・・・」

真里奈「あ、翔ちゃん。久しぶり！」

翔太郎「おお、真里奈か。なにやってんだ？」

真里奈「翔ちゃんこそ何やってるの？」

翔太郎「まあ、ちよつとした依頼を受けてな？肩慣らしにやってるんだ」

真里奈「へえ、暇だからついていい？」

翔太郎「ああ、いいぜ？」

真里奈「そういえば、翔ちゃんがおやつさんって言うてた人どこいったの？」

翔太郎「おやつさんは一人サバイバルにいった」

真里奈「へえ・・・ところで依頼って何？」

翔太郎「照井の彼女について・・・だったっけ？」

真里奈「いや聞かれても私聞いてないよ」

翔太郎「まあとりあえずそんな感じ」

真里奈「うーん、あんまりそういう個人的の秘密を探るようなことは感心しないな」

翔太郎「なんだっけそういうのプライベート？」

真里奈「え？何それ・・・」

翔太郎「いやそういうの英語でなんていうんだっけ？」

真里奈「アハハハ、それをいうならプライバシーでしょ。」

翔太郎「ま、まあそれはおいといてさっさと探そうぜ？照井を」

真里奈「あ、いたよ。照井君」

翔太郎「早っ！」

比奈「うーん、翔太郎さんうまくやってるかな？」

フィリップ「やってるんじゃない？」

アंक「そもそもなにしてたんだっけ？」

映司「忘れたって事はたいしたことじゃないんだろ？」

アंक「それもそうだな。腹もいっぱいになったことだしそろそろ帰るか」

比奈「そうだね」

フィリップ「じゃあみんなまたあした」

映司「さようなら」

比奈「じゃあね」

アंक「またな」

真里奈「ねえ、翔ちゃん？」

翔太郎「ん？なんだ？真里奈」

真里奈「私たちこうやって尾行してるけどどうするの？」

翔太郎「うーん、とりあえず一人になったところでこっぴーッ」と

真里奈「え？なんか怖いんだけど・・・」

翔太郎「うそだって、とりあえず別れるまでまとうぜ？」

翔太郎「ユビスマ2！よっしゃああああ！！」

真里奈「ユビスマ0、ああああ」

翔太郎「下手だな、真里奈は。ユビスマ1！よっしゃあああああ！
また勝っちまったよ」

真里奈「いやああ翔ちゃん強いなあ」「こうして負けてあげないとだめだもんね・・・」

翔太郎「だろ？次はな・・・」

真里奈「そろそろ動くころじゃない？はい、あんばんと牛乳！」

翔太郎「お、気が利くじゃねえか！あんがとな」

照井「おい、おまえらなにやってるんだ？」

翔太郎「なんだ？なにがいけなかったんだ？なぜバレた」

照井「なぜって・・・おまえはどこにいてもすぐにわかる俺に見つけられないときなんかない」

翔太郎「え・・・それって俺のことが・・・」

照井「ねえよ」ばこ

翔太郎「ぶへっ!!」

真里奈「大丈夫？翔ちゃん！」

照井「なら俺は帰るぞ？」

翔太郎「ちよつと待てよ、まだ終わってないぜ？」

照井「ほう、あの攻撃は全治3ヶ月はかかる攻撃だったはずだが？」

翔太郎「へっ、俺をそこいらのやつらと一緒にするなよな。俺のプライバシーと埃にかけて負けるわけには行かないな」

照井「はっ、俺の動きについてこれないやつが何を言っている」

翔太郎「わりいが俺はスローガンなんでね、やっと体が温まってきたとこだ。本番はこれからだぜ？」

翔太郎「はあはあ・・・やるじゃないかお前も」

照井「お前もな・・・」

真里奈「ふああああ、ねえ翔ちゃんいつまでやってるの？」

翔太郎「あと、100文字くらい・・・」

真里奈「そろそろ暗くなってきたし早くしてね・・・私のどか沸いたからジューズかって来るね」

翔太郎「あ、俺飲むヨーグルトで」

照井「マスター、いつもの」

真里奈「わかった。じゃあいつてくるね」『照井君のいつものって何！？しかもマスターって・・・』

翔太郎「な！？お前常連だったのか！？」

照井「俺に質問するな」

翔太郎「ああ！？」

真里奈「まったく、二人とも子供なんだから二人とも買ってきたよ
！・・・」

翔太郎「ハアハア・・・中々やるな照井イ」

照井「お、お前だつて・・・ハアハア」

真里奈「二人とも何してるの？やっぱり二人はそういう関係だったのね・・・」ダッ

翔太郎「え？何言つてんだつてちよつと待てよ！」

翔太郎「何だったんだ、昨日は真里奈のやついきなり帰るなんて・
・あ、おーいフィリップ！」

フィリップ「まさか、君がそんな趣味の持ち主だったとは、僕のことそんな目でみてたのかい？」

翔太郎「はあ？何いつてんだおまぐええええ・・・」

亜樹子「ごつめーん、間違つてサッカーボールがそっちにいつちや
ったよお」ぺっ！

翔太郎「きたな！？つかなんでサッカーボール・・・」

亜樹子「サッカー・・・やろうぜえ？」

翔太郎「いや、とりあえずなんでこんな扱いひどいの？俺」

亜樹子「わからないの？これだから翔太郎君は・・・ねーフィリップ君」

フィリップ「ねー」

翔太郎「いや、わかってー！！相棒からひどい扱いうけるわサッカーボールぶつけられるわ唾までかけられるとは、思っても見なかったよ！」

亜樹子「お前の血は何色だああああ！！」ばーん

翔太郎「ぐふっ！」

フィリップ「で、でたーアキちゃんの必殺技、ケブラドーラ・コン・ヒーロ！」

亜樹子「まあとにかく一緒にきてもらおうか・・・二人とも手伝って」

翔太郎「うーん、もう食べれない・・・はっ!!」

亜樹子「やっとおきたみたいだね、翔太郎君」

翔太郎「まぶしっ!?!ライト向けるのやめて」

亜樹子「どうしてこんなところにつれてこられたか・・・かわつてるよね?」

翔太郎「いやぜんぜん」

亜樹子「うそおっしやい!!」ばしーん

翔太郎「いでえええ!?!」

フィリップ「まあまあアキちゃん、落ち着いてどうどう」

亜樹子「自分でいう気にはならないの?今ならまだマミるだけで勘弁してあげるよ」

翔太郎「いやマジで俺がなにしたってんだよ」

亜樹子「ば、バッキヤロオオオ！」バきっ

翔太郎「だから痛いって！！」

亜樹子「私から竜君ねつとっておきながらよくそんなことがいえたね！というか私の前に姿を現せたね！」

フィリップ「まったく、道理で昨日一人でもさがすっていったのはこういうことだったんだね」

翔太郎「いやそれお前らが押し付けたんじゃないか！それにお前男の俺に寝取られるお前もなんだよ！！」

亜樹子「ほら、やっぱり私から竜君寝取ってたんじゃない！！」

翔太郎「いや、言葉のあやだってもし寝取られたとしたらって事であつて俺が寝取ったわけじゃないって」

フィリップ「そうやって必死になつてるのも怪しい・・・」

亜樹子「カツどん食べたんだから正直に話さない！」

翔太郎「食べてねえし！」

亜樹子「おめえの飯はねえから！」

フィリップ「証人もいるんだから観念したら？翔太郎」

翔太郎「マジで？」

亜樹子「どうるるるるるるるるるる．．．じゃかじゃん!」

真里奈「翔ちゃん．．．」

翔太郎「あ、お前．．．」

亜樹子「さ、翔太郎君の秘密をどーんといっちゃって!」

真里奈「実は、昨日翔ちゃんと二人で見張ってただけで見つかったちゃってそしたらいきなり翔ちゃんと照井君がいきなり絡み合いになって私がジューズ買いに行って帰ってきたときには．．．」

亜樹子「それって．．．」

フィリップ「つまり．．．」

翔太郎「アッー!!ってそんなことしてないわ!」

真里奈「でもなんかそのときの二人の声．．．なんか色っぽかったっていうかなんていうか」

翔太郎「ねーよ」

亜樹子「うううう．．．」

フィリップ「アキちゃん!？どうしたの?」

亜樹子「私も一応女の子なのにこんな男に負けたのかと思うと．．．ううう」

翔太郎「本当わからんやつだな・・・」

亜樹子「じゃあ証拠見せてよ!」

翔太郎「いや、本人に聞けよ・・・」

亜樹子「そうだね!それがあつたね!じゃあ聞きに行こうか」

翔太郎「たつく、はじめからそうしろよな・・・まじなぐられぞんじゃねえか俺・・・まあがんばれよ」

亜樹子「何いつてるの?翔太郎君もくるんだよ?」

翔太郎「私聞いてない!」

亜樹子「似てねえんだよ!」ばーん

翔太郎「ぐつはあ!!」

亜樹子「ククク・・・今宵の虎徹は血に飢えておるわ」

フィリップ「アキちゃん!まだお昼前だよ!」

真里奈「しかもそれスリッパ・・・」

亜樹子「竜君、おはよう!」

照井「ああ、所長。おはよう」

亜樹子「あのさ、竜君に聞きたい事があるんだけど・・・」

照井「なんだ？所長？」

亜樹子「あのくもしかして竜君って付き合ってる人とかいる？もしかしたらそれって翔太郎君とか？」

照井「いつてる意味がわからないが」

亜樹子「そ、そうだよ。変な事聞いてごめんね」

翔太郎「なんで俺の名前だしやし！」

フィリップ「それにちよつと直接的すぎなような？」

亜樹子「だってまだ翔太郎君の疑いは晴れてないんだよ？翔太郎君がホモだっていう事は！しょ・う・た・ろ・う・く・ん・がホモだってことは！！！」

翔太郎「馬鹿野郎！あんま大声だすな、俺がホモだって誤解されんだろ」

北村「翔太郎君もこの悩みを抱えていたんだ。俺以外にもそういう趣味のやつがいて安心したよ。俺たち良い友達に慣れそうだな！」

翔太郎「いや、お前だれだよ」

北村「君の同土さ」

翔太郎「ほらみる、お前のせいで変なの付いたじゃないか」

亜樹子「えー私のせいなの？」

翔太郎「そうだろ」

亜樹子「とりあえずもつと手がかりがほしいね。ほかのところもあたってみよう」

翔太郎「無視が無視なのか？」

フィリップ「とりあえず翔太郎が見た女の子に会ってみるってのは？」

亜樹子「そ、そうだね！泥棒猫め覚悟しろ」

翔太郎「どこにいるのかわかるのか？」

亜樹子「わかんない」

翔太郎「だめじゃん・・・」

亜樹子「携帯とって確認とかは？」

フィリップ「どうやってとるのってかそれっていろいろとどうなの？」

亜樹子「まあ見ててよ」

翔太郎「えー行くのかよ・・・」

亜樹子「竜君、今帰り？かばん持ってあげるよ！」

照井「え？」

亜樹子「ほらいいからかばんかして、もってあげるから!!」

照井「いや、ちょっとわけがわからないんだけど・・・」

亜樹子「私が持ってあげるっていつてるのほらかしなさい！」

亜樹子「かゝしゝなゝさゝい！」

翔太郎「とめたほうがいいんじゃない？」

フィリップ「たしかにこれはとめたほうがいいかもしれない」

翔太郎「そうかもしれない・・・」

フィリップ「ちょっと、アキちゃんやりすぎだつて・・・」

翔太郎「やめろよお！」

照井「お、おいお前らまでなんだ！」

翔太郎「や、やめろっていつてんだろお」

照井「おい、地味に左のこずきがうざいんだけど」

亜樹子「みんなやめて」

照井「とかいいつつ所長も俺の足踏んでるじゃないか」

照井「しかも誰だ、さっき胸ポケまさぐったやつ」

フィリップ「僕じゃないよ？」

亜樹子「私でもないよ？」

翔太郎「おれでもないぜ？」

照井「うそ付け」

亜樹子「じゃあ私たちこれから用事あるからじゃあね」

照井「え？」

翔太郎「で？携帯は手に入ったのか？」

亜樹子「携帯は手に入らなかったけど変わりにこんなものが・・・」

フィリップ「ってこれDSじゃないか」

翔太郎「え？まさか？」

亜樹子「なんでDSを胸ポケに入れてたんだろ？カセットになにかな」

翔太郎「え？なんて？」

亜樹子「カセットになになって」

翔太郎「いや、普通ソフトっていうだろ」

亜樹子「いやいやカセットだよ、常識的に考えて」

翔太郎「ソフト」

亜樹子「カセット」

翔太郎「ソフト」

亜樹子「カセット」

翔太郎「ソフト」

亜樹子「カセット」

翔太郎「ソフト」

亜樹子「カセット」

翔太郎・亜樹子「どっちだと思っ？フィリップ（君）！！」

フィリップ「どっちでもいいよ！」

翔太郎・亜樹子「よくないよ!!」

フィリップ「とりあえず中身を見てみない？」

亜樹子「いやでもそれはプライバシーの侵害じゃない？」

翔太郎「何をいまさら・・・」

フィリップ「とりあえず見てみようか」

翔太郎「あ、これって・・・」

フィリップ「翔太郎がやってた？」

亜樹子「ラブプラス？」

翔太郎「ヴってブだろ・・・」

フィリップ「どうやら僕たちはまんまと照井竜の手のひらの上で踊らされていたって事だね」

亜樹子「え？どういうこと？」

フィリップ「ニセの彼女まで用意して隠したかったものそれはこれだったんだ！」

亜樹子「え？」

翔太郎「え？」

フィリップ「え!？」

照井「参った・・・まさか取られないようにバックじゃなく胸ポケに入れたのが仇になるとは・・・あれを見られたら終わりだ・・・」

後藤「あ、照井・・・貴様」

照井「どちら様？」

後藤「俺の顔を忘れたとはいわせんぞ」

照井「いや、ごめん忘れた」

映司「どうしたんですか？後藤さん」

後藤「どうしたもこうしたもない。おれのDSをこいつが取ったんだよ！返せおれのDS」

照井「あ・・・ななななにいつててるるんだ。みみ身に覚えがないなーだだいたい証拠はあるのか？」

後藤「たしかに俺がお前に取られたという記憶があるんだよ」

映司「え!？そうなんですか？照井さん」

照井「ひひひ人の記憶とかそそんな曖昧な物をしし信用するとかどうかしてるぜ、おい。いい今なら謝ったら許すからそのくらいに

しとけ？」

比奈「思ったんだけど動揺しすぎでしょ……」

映司「比奈ちゃん！？」

後藤「そうだな、記憶なんて曖昧なもので人を疑うとか最低だな俺は……すまなかったどうか許してくれ」

比奈「えええ……」

映司「さすがの俺でも引くわー」

照井「まあ判ってくればいいんだ、それじゃあな」

亜樹子「……取り敢えずこのdsは竜君に返しておこうか」

フィリップ「……そうだね」

亜樹子「でも本当に恐ろしいのは竜君だよ」

翔太郎「え？なんで？」

亜樹子「今まで私達にばれずにこれをやっていたんだからね翔太郎君はすぐにばれたというのに……竜君、恐ろしい子……」

フィリップ「いや、それは翔太郎がバレるのが早かっただけだと思う」

亜樹子「ですよー」

翔太郎「ねえーよ!」

翔太郎「てか、ゲームに負けるとか俺に負けるよりひどいよ?」

亜樹子「え?・・・」

フィリップ「ちょ、翔太郎なに言ってるのさ僕でも言わなかったことを・・・」

翔太郎「嘘に決まってるじゃん!亜樹子さんが本気出せば照井のやつなんてイチコロですよ」

亜樹子「そ、そう?」

フィリップ「そうそう、イチコロだよ。僕たちも一緒に考えるからさ」

翔太郎「え?」

フィリップ「いや、ここはこういうしかないでしょ・・・」

亜樹子「じゃあ、どんな方法がいいかな」

翔太郎「押してダメなら引いてみるって言っし、引いてみたら?」

亜樹子「え?私押した事ないよ?」

フィリップ「まあ、とにかく引いてみなよ」

亜樹子「うん、わかった!」

亜樹子「あー、竜君そこいて」

照井「え?」ドンガラガッシャー

翔太郎「その引くじゃねえ」

フィリップ「まあ、予想通りって言ったら予想通りだけど・・・」

亜樹子「だ、大丈夫? 竜君。あ、DS落としたよ」

翔太郎「しかもそこで返すのかよ・・・」

照井「ああ、すまない」

亜樹子「まったく、竜君はドジなんだから!」

フィリップ「ちょっと、アキちゃん! そんなんじゃダメだよ?」

亜樹子「えー、そうかなー？」

翔太郎「いや、どうみてもダメダメだろ、素人目でみてもあればダメだ」

亜樹子「あ？」

翔太郎「なんでもないっす」

フィリップ「じゃあ、次からはこれを持って作戦を行おう」

亜樹子「これって、通信機？」

フィリップ「うん、これで僕たちが指示を出していくからアキちゃんはそのに従ってくれればいいよ」

亜樹子「なるほど！」

亜樹子「こちら、目標を発見、オーバー」

フィリップ「なら、こんどはツンデレで行こうオーバー」

亜樹子「ラジャー！オーバー」

翔太郎「因みにオーバーってのはOver to youつまり
どそその略なんだぜ？オーバー」

亜樹子「どうでもいいよ！オーバー→」

照井「所長じゃないか、どうしたんだ？こんな所で」

亜樹子「べつ、別に竜君を待ってたわけじゃないんだからね？勘違いしないでね！」

照井「そうか」

亜樹子「早くどっか行つてよ、そんなに近くに居られたら周りのひとに勘違いされちゃうじゃない」

翔太郎「照井さんと亜樹子さんが一緒に帰ってるわ〜いったいどう言う関係なのかしら」

フィリップ「詮索は良くないよ、でもこれってどう見ても付き合ってるよね〜」

照井「あいつら・・・」

翔太郎「なあ、これでいいのか？フィリップ。オーバー→」

フィリップ「・・・ノーコメント、オーバー→」

亜樹子「ほ、ほら早速見ず知らずの人達から勘違いされちゃったじゃない！でもどうしても竜君と一緒に帰りたいって言うなら帰ってあげてもいいよ？」

照井「いや、所長がいやならいい。用事もあるしな」

亜樹子「しょうがないなーもー。一緒に帰って・・・え？」

照井「それじゃあな、所長」

亜樹子「ちょーっと待ったー！ディーフェンスディーフェンス！」

照井「地味にうざいぞ、所長」

亜樹子「う、うざい？（「」；）」

翔太郎「目標、依然沈黙を保ったままだ、オーバー→」

フィリップ「そんなにショックだったのか、アキちゃん・・・オーバー→」

亜樹子「ちつともダメじゃない二人ともしっかりしてよね！」

翔太郎「こうなったら奥の手だ・・・」

フィリップ「奥の手？」

亜樹子「大丈夫なの？それ・・・」

翔太郎「その名もオムライスを食べれない女をアピールせよ！」

亜樹子・フィリップ「オムライスを食べれない女をアピールせよ

「なにそれ？」

第七回目（後書き）

えーと、今回いつもより翔太郎の扱いが酷いなと書いてる時ずっと思っていました。他の部分とかも合わせてあとで修正するかもしれないです。今回も最後まで読んでくれてありがとうございます！

第八回目（前書き）

ちよくちよく書いてたんですけど、いろんなものが誘惑してきて、最近比奈ちゃんメツチャかわいいしな

第八回目

亜樹子「ねえみんなモンハンしようよ」

翔太郎「モンハンって何だよ」

亜樹子「えー、翔太郎君今時モンハン知らないとかないわー」

翔太郎「そんな事言ってもよーフィリップはしってるのか？」

フィリップ「当たり前じゃないか、当然知ってるさ。モンハンとはモンスターハンターの略だね」

亜樹子「おっ！流石フィリップ君翔太郎君とは違うねえ」

翔太郎「モンスターハンターって何？」

亜樹子「ゲームだよゲーム。一時期すごいはやったんだよねー」

翔太郎「へえ、でなんでやろうと思ったんだよ。大体お前ゲーム持ってたか？」

亜樹子「持っていないよ」

フィリップ「持っていないのにやろうとしてたの？いつもながらアキちゃんには驚かされるよ」

亜樹子「だからまずはゲーム買わないと」

翔太郎「よくそんな金あるな。別にいいけど」

亜樹子「なにいつてんだい。翔太郎君達も買うんだよ？」

翔太郎「はあ？」

フィリップ「達ってことはまさか僕も？」

亜樹子「当たり前でしょ！これは所長命令よ！！」

翔太郎「なんで俺たちまで・・・」

フィリップ「翔太郎諦めなよ。こうなったアキちゃんを止めれる人はいない・・・」

翔太郎「いや、待てよ？一人いるぞ照井がやりたくないといえれば良んじゃないか？」

フィリップ「そうかもしれない・・・」

亜樹子「何やってんの二人とも！早くいくよ？やっぱりこういうゲームはみんなでやらないと楽しくないからね」

翔太郎「ちよつとまった。照井は誘わないのか？」

フィリップ「そうだよ！せっかく買っても照井竜がやらないんじゃない意味ないと思うよ？」

亜樹子「あー、それならもう言っているよ？今買いに行っただって」

翔太郎「なん・・・だと？」

フィリップ「諦めるしかないね、翔太郎」

翔太郎「・・・」

亜樹子「やれば二人ともハマるって！早くいくよ」

翔太郎「はぁ・・・」『なんやかんやでPSP本体とモンハン3rdを買ってしまった俺達。因みに色は俺がピアノ・ブラック、フィリップがスピリテッド・グリーン、亜樹子がブロッサム・ピンクって所か』

亜樹子「さあて買ってきた所で早速やるうか！今竜君もこっちに来るって」

翔太郎「もうやんのかよ・・・ちょっと休ませろよ」

亜樹子「ダメダメ！時間は待ってくれないよ？翔太郎君」

翔太郎「名前何にしようかなーうーん、やっぱ俺自身が切札だから切札にしよう」

フィリップ「意味がわかんないよ。なら僕は疾風にしようかな」

亜樹子「おお、二人ともカッコいいね！だったら私は所長にしようかと！」

翔太郎「なんだよそれ」

亜樹子「いや、二人とも漢字二文字だから私も・・・ね」

翔太郎「なるほどな、でもフィリップ。お前に疾風は似合わないな。本棚とかでいいだろ」ポチッと

フィリップ「あー、何勝手に名前決めてんの！それを言ったら翔太郎だって切札なんて名乗るのは早いよ。半熟とかでいいよ！」ポチッと

翔太郎「ああ？お前何してやがんだ！」

フィリップ「これでおあいこだね翔太郎」

亜樹子「まあまあ、名前なんてどうでも良いじゃん。早くやろうよ」

翔太郎「しょうがないな取り敢えず武器は太刀にしようっと」

亜樹子「ふーん、じゃあ私は片手剣にしようっと」

フィリップ「なら、僕はスラッシュアックスにするかな」

亜樹子「じゃあ、みんな早く集会浴場にきて。オフラインじゃなくてオンラインだからね」

フィリップ「あ、所長いた。これがアキちゃんだよな」

亜樹子「そうそう、本棚がフィリップ君だよな。ちょっと半熟遅いんだけど！」

翔太郎「もう居るってのお前からこそいないじゃ無いか！」

フィリップ「って翔太郎。オフラインで入ってるじゃ無いかオンラインじゃ無いとダメなんだよ」

亜樹子「最初にいったじゃん。やっぱりダメだね翔太郎君は」

翔太郎「おお、本当だ早速やろうぜ」

亜樹子「最初はやっぱりちよっと簡単そうなのからやろうか」

翔太郎「簡単なのか・・・特産キノコの宴とかどう？」

亜樹子「そうだね、それでちよっと操作確認しながらやってみようか」

フィリップ「翔太郎にしては、地味なのを選んだね。普通に狩猟クエスト選ぶと思ってたよ」

翔太郎「ま、まあな」『死んだらダサイしな、初めてやるから操作確認しないと』

亜樹子「じゃあ貼ったから、早く」

翔太郎「おっしや！頑張るぜ」

映司「え？モンハン？」

比奈「そうそう、一緒にやらない？」

映司「いいけど、俺ゲーム持ってないんだ・・・」

比奈「大丈夫大丈夫。私二個持つてるし！」

映司「ふーん、ならいいか。アंकもやるか？」

アंक「当たり前だろ！お前ら俺抜きで楽しい事しようたってそうはいかないんだからな？」

伊達「お、楽しそうなのしてるね〜俺も混ぜてよ」

比奈「いいですよ、ねみんな」

映司「うん、でも意外ですね。伊達さんがゲームって」

伊達「俺だってゲームくらいするよまあいいや早速ひと狩りいこうぜ？」

比奈・映司「おー！！」

比奈「じゃあどれ行きます？」

アंक「強そうなのいこうぜ」

映司「アंकお前大丈夫なのかよ」

伊達「まあ、アंकはああ言ってるが映司とアंकは初めてなんだろう？ならジャギイ10頭当たりでいいんじゃない？」

比奈「そうですねじゃあ貼りますよ」

アंक「俺が貼る！」

映司「えー、お前貼り方分かるのかよ」

アंक「どうやるんだ？」

伊達「わかんないのかよ・・・取り敢えず女のキャラに話しかける」

アंक「おい、比奈ってキャラのステータスが出てきたぞ？」

比奈「それ私のキャラだよ！もう良い私が貼るね？」

映司「うん、アंकに任せてたら時間がなくなる・・・」

比奈「よっと、はい貼ったよ」

映司「はい」

伊達「よっしゃ」

アंक「俺のすごいとこ見せてやる」

翔太郎「やっと終わった・・・」

亜樹子「特産きのこ採るだけだから簡単かと思ったら案外めんどくさかったね」

フィリップ「うん20個も採るのはさすがに疲れたね」

翔太郎「誰だよこのクエストやるって言ったの!!」

亜樹子「翔太郎君でしょ・・・」

翔太郎「だがもう操作方法是わかったもう誰にも俺をとめることはできないぜ？」

フィリップ「どうだか」

照井「すまんな遅くなった」

亜樹子「竜君！おそいよ」さっそくやる」

翔太郎「そっぴや照井キャラの名前何にしたんだ？」

照井「まだ決めてない。はじめてすらいなからな」

亜樹子「なら私が考えてあげる！うゝん私が所長で翔太郎君が半熟フィリップ君が本棚だから・・・課長でいいんじゃない？」

照井「なんで課長？」

亜樹子「なんとなく」

翔太郎「いいじゃん、課長。お前にお似合いだぜ課長」

照井「だまれ半熟」

亜樹子「竜君も早く準備して、4人でやろうよ」

フィリップ「おお、照井竜は大剣なんだね」

照井「まあな」

亜樹子「今度はどのクエに行く？四人だし普通に狩らない？」

翔太郎「だな、ならジャギイ簡単だったしドスジャギイいかな？」

フィリップ「そうだね、それでいこう」

亜樹子「うーんでも大丈夫かな私死にそうな気がする・・・」

照井「一回くらい死んでも大丈夫だろ所長」

亜樹子「そうだね、大丈夫だよ」

翔太郎「心配すんな、俺が亜樹子の倍の働きはしてやるからよ」

照井「どうだか・・・」

翔太郎「少なくとも照井、お前よりは働いてやるよ！」

亜樹子「よし貼ったよ」

翔太郎「俺は準備できたぞ」

フィリップ「僕も」

照井「俺もだ」

亜樹子「それじゃあ出発!!」ぱーぷー

照井「所長、俺の分の応急薬もっていつていいぞ」

亜樹子「え? いいの!？」

照井「ああ」

翔太郎「ぐぬぬぬ・・・なら俺だっていらねえし。亜樹子俺の分ももっていつていいぞ」

亜樹子「え? 翔太郎君大丈夫なの?」

翔太郎「ドスジャギイってもジャギイだろ? 楽勝だつての」

フィリップ「ほんとかな?」

翔太郎「ほんとだよ! 俺、太刀でならドスジャギイだつてなんだつて狩れるよ」

亜樹子「ふーん、じゃあいつこか」

翔太郎「それになあ、応急薬がなくなつてこっちには持つてきた回復薬が・・・」

半熟「ゴツクン・・・ピカーン」

翔太郎「あ・・・間違つて□押しちゃった」

フィリップ「え？なんかいった？」

照井「さっき何飲んだんだ？」

翔太郎「なんもいつてないし・・・あれだよ、あれ」

亜樹子「どれ！？」

翔太郎「じゃあ分かれて探そうぜ、みんな」

フィリップ「わかった」

亜樹子「おっけ」

アंक「おい、まだ始まんないのかこっちはもう準備できてんぞ？」

比奈「いや、私たちみんなアंक待ちだからね？」

映司「そうだよ、早く□押せって」

アंक「え？」

伊達「入り口で□押せって事」

比奈「それをやって準備完了するんだよ？」

アंक「それならそうと先に言えよな！」

比奈「それくらい説明書みなよ」

アंक「ほら、押したぞ」

比奈「それじゃ行きますよ？」ぱーぷー

アंक「応急薬は全部おれんだ！誰にもわたさねえ！！」

伊達「まあいいやジャギイなんて簡単だろ」

比奈「ですよねー」

映司「それなのに必死になって応急薬とっちゃうって・・・」

アंक「うつせえ！」

映司「あ、クーラードリンク飲んどかないと」

比奈「そうだね」

アंक「そんなのなくたって倒せるっての」

アंकは力尽きた

アंक「あ・・・」

映司「おい、誰だよそんなのなくなつて倒せるつて言ったやつ」

アंक「いや、ジャギイにやられたんじゃないやなくて暑さにやられたんだから、そこんところしく」

比奈「どつちもどつちでしょ・・・」

映司「伊達さんもなんでボウガンで来てるのにメインの攻撃が殴るか蹴るんですか！」

伊達「いや、つい癖でね」

翔太郎「ドスジャギイ中々見つからないな・・・あっなんか音楽変わったぞエリア2！エリア2！」

フィリップ「エリア2がどうしたの？」

翔太郎「ドスジャギイ見つけた！」

亜樹子「いや、こつちにも他とは違う大きさがいたよ。多分こつちだよ・・・」

翔太郎「いや、それ多分ジャギイノスだから、うわメツチャ体力持ってかれる！みんな早く来て！」

亜樹子「・・・ヤバイ、死んじゃう」

照井「所長、大丈夫か？」

亜樹子「竜君！」

照井「所長・・・」

亜樹子「竜君！」

翔太郎「ちよつとなにやってんの、二人とも、早く助けに来て！ヘルプミー！」

亜樹子「あ、ちよつとベースキャンピングで回復してからいくね？」

翔太郎「アイテム使えよお！」

亜樹子「もったないよお！」

照井「そんなやつ、左おまえ一人でも楽勝だろ？」

翔太郎「あー、期待してくれるのは嬉しいけど、もうダメやられるって！くそ、こうなったらフィリップきてー！！」

上手に焼けました

翔太郎「誰！？こんなときにのんきに肉やいてるやつはー！！」

フィリップ「あ、僕」

翔太郎「フィリップ」

半熟は力尽きた・・・

翔太郎「・・・」

フィリップ・亜樹子・照井「「「「「「」」」」」」

フィリップ「・・・どんまい」

カザリ「へえ、なかなか面白いね、このゲーム」

メズール「でしょう？ やっぱリモンハンはみんなでやるものよねえ」

ガメル「メズール、俺もやりたい！！」

メズール「ガメルはPSPもってないでしょ？ それに四人までだから私と交換交換でやりましょうね」

ガメル「うん」

ロスト「早く次行こうよ。これなら一人でやったほうが早いよ・・・」

真木「待ってください、いろいろと準備が必要なんですよ」

メズール「あれ、そういえばウヴァは？」

カザリ「あいつ、PSP持っていないからいじけてるんじゃないかな？」

ウヴァ「買ってきたぞPSP！俺も混ぜてくれ」

カザリ「残念だけど、ウヴァ。君とは一緒にはできない」

真木「残念です」

メズール「ざぁんねん」

ロスト「気がちるからどっかいて」

ウヴァ「何でだ？PSPとモンハンかって着たのに・・・」

カザリ「ウヴァ。僕たちがやってるのはモンハン3rd。君が買ってきたのはアイルー村一緒にできるわけないよ」

ウヴァ「何だと？」

メズール「仮に一緒のだとしてもこれ4人までだから」

ロスト「お前の席ないから！」

ウヴァ「なん・・・だと!？」

第八回目（後書き）

オーズもそろそろ終わるね。なんだかなあ、寂しくなってくるね

第九回目（前書き）

とくになし

第九回目

照井「・・・リリース」

翔太郎「カットオオ、カット、カットオオ！」

亜樹子「竜君、しっかり！」

照井「あ、ああ」

翔太郎「じゃ、フィリップから」

フィリップ「う、うん」

翔太郎「はい、アクション？」

フィリップ「さ、・・・さくらあ！クロウカードの気配や！」

照井「う、うん。闇の力を秘めし鍵よ、真の姿を我に示せ。って本当にやらなきゃダメなのか？」

翔太郎「カット、カットオオ。木ノ本おお、そんなセリフ台本にないぞ？木ノ本おお」

照井「なんで、俺がこんな事を・・・」『何故俺達がこんなことをしているかというと、数時間前に遡る』

照井「部のPRビデオ？」

亜樹子「うん、部のPRビデオを作ってもっと私達の事を知ってもらおうと思って」

翔太郎「めんどくさいだろそんなの。なあ、フィリップ」

フィリップ「うん、確かに」

亜樹子「なあに言ってるの！最近なんて依頼と言ったら、ジュース買ってこいだの、学食の席確保してだの、パシリばっかじゃん。その癖翔太郎君何もしないじゃん！」

翔太郎「そんなの、俺のする事じゃねえからな。照井あたりにやらせときゃいいだろ」

亜樹子「じゃあ、何だったらやるのよ」

翔太郎「うーん、殺人事件とかだったらハードボイルドに解決してやるぜ？」

亜樹子「その自信はどこからくるんだろうね、フィリップ君」

フィリップ「あ、僕の出身地は大阪だよ？」

亜樹子「え？出身なんて聞いてないよ？」

フィリップ「え？」

亜樹子「こつちがえっ？だよ・・・」

翔太郎「おいおい、亜樹子はこれでも滑舌はいいほうなんだぜ？」

亜樹子「これでもってなによ、ねえ竜君」

照井「ああ、そうだな」

フィリップ「ゴメンゴメン。でどうするんだい？作るの？」

翔太郎「めんどくさいからいいだろ」

亜樹子「そんな事言っているの？翔太郎君」

翔太郎「ああ？何がだよ」

亜樹子「これで知名度が上がれば、依頼はくるわ翔太郎君はモテるわもついい事ずくしじゃない」

翔太郎「な、なんだとおお！？お、俺がモツテモテだとおおお！？」

姫香「すいませえん」

翔太郎「どうしたんだい？お嬢さん？何か困ったことでもあったのかな？」

姫香「実は姫香の王子様を探して欲しいんですぅ」

翔太郎「なるほどね、このハードボイルド探偵、左翔太郎に任せな」

姫香「た、頼もしいですぅー！もしかして、貴方が私の王子様？」

翔太郎「お嬢さん、そのセリフは本当に好きな人にいつてやるんだな。さあ、貴女の王子様を探しに行きましょうか」

姫香「は、はいいい。／＼／」

翔太郎「うーん、なかなか見つからないな、君の王子様」

姫香「もういいんです。実は・・・」

翔太郎「なにいつてんだ！依頼をきつちりこなすのがハードボイルドって奴だぜ」

姫香「だからあの、私の王子様はあなたしかいないんですぅ！依頼を頼みにきたなんて言っただけ、あれは嘘だったんですぅ。私の王子様はあなたしかいないんですぅ！だから、私と付き合ってください！」

翔太郎「姫香ちゃん・・・」

ガラッ

真里奈「その告白ちよつとまっただあゝ！」

翔太郎「真里奈？どうしたんだよ」

真里奈「私だって、翔ちゃんのことずっと前から好きだったもん？」

翔太郎「まじで？」

真里奈「マジだよ、翔ちゃん全然気づいてくれないんだもん」

比奈「ちよつとまっで、それなら私だってブラコンとか言われてるけど本当は翔太郎さんの事が好きだったんです！」

翔太郎「何だつて？」

あすか「あすか、大きくなったら翔太郎さんのお嫁さんになるー！」

翔太郎「こんな、幼女まで、これは人生一度目のモテ期つてやつか？」

フィリップ「翔太郎！僕の事忘れるなんてひどいじゃないか。僕たちは二人で一人の・・・／／／」

翔太郎「お前まで！？つかなんだよ、何てれてんだよ！」

若菜姫「あんたと付き合っただけでもいいって言うてんのよ？このわたしが！喜ばないよね！」

翔太郎「若菜姫まで？」

レイカ「もちろん私が本妻よね？」

翔太郎「お、お前まで・・・お、俺はいたいどうすればいいんだああ！！」

亜樹子「翔太郎君、いつまで妄想してんの！」パン

翔太郎「いてっ？なんだ、さっきのは俺の妄想だったのか。よかったような、悪かったような・・・」

フィリップ「で？どうするんだい？やるの？やらないの？」

翔太郎「はあ？悪いけど、男には興味無いから悪いな」

フィリップ「なにいつてるんだ、翔太郎」

亜樹子「フィリップ君はPRビデオの事を言ってるんだよ？」

翔太郎「なんだよ・・・そういうことか・・・」

フィリップ「まったく、なにかんちがいしてるんだか」

照井「まあ、左らしいといったららしいがな」

フィリップ「だね」

亜樹子「で？やるの？」

翔太郎「やるに決まってるじゃ無いか！言っとくけど、モテモテに引かれたわけじゃないからな？お前らがどうしてもっていうから」

亜樹子「まあ、それでいいよ？」

翔太郎「なんか、ム力つく！」

フィリップ「じゃあ、内容どんなのにしようか？」

亜樹子「撮るからには派手な方がいいかもね。爆発をバックに事件解決とか！」

翔太郎「確かに派手な方がいいってのは一理あるかもしれない」

フィリップ「でも、いきなり爆発が起きたら不自然じゃないかい？」

照井「なら、爆発はやめたほうがいいんじゃないか？」

翔太郎「いや、まだだ！まだ、何か手があるはず」

亜樹子「うーん、なかなかいいアイデアうかばないね」ポロツ

亜樹子「あっ！」

翔太郎「あぶない！」

フィリップ「ウィンガーダイヤモンドレビオーサ？」

翔太郎「まさか・・・！」

亜樹子「フィリップ君って、」

翔太郎・亜樹子「魔法使い！？」

ガシャン

翔太郎・亜樹子「ですよねー」

翔太郎「そうか、魔法が使える設定なら爆発が起きてもいわけかわんないぞ」

照井『魔法が使える事に違和感を感じるんだが・・・』

亜樹子「ちよつとまって、翔太郎君」

照井『もしかして、俺と同じ事を思ったのか所長。言ってやれ』

亜樹子「魔法と言ったら、魔法少女だよね？なら、やっぱり主役は私かな？」

照井「だ、ダメだったか・・・」

亜樹子「ん？どうしたの？竜君」

照井「いや、なんでもない」

翔太郎「んーじゃあ、前に見たCCさくらで作るっぜ？」

亜樹子「そうだね、面白くなくてもそれなら原作好きな人が見てくれる人いそうだね」

フィリップ「それって・・・自虐？」

亜樹子「え？」

翔太郎「え？」

フィリップ「え？」

亜樹子・フィリップ・翔太郎「「「「・・・」」」ジ―

照井「な、なんだよ」

亜樹子「え？何でもないよー」

翔太郎「だよなあ。なんでもないよな」

フィリップ「え？」

亜樹子「え？」

翔太郎「え？」

亜樹子・翔太郎・フィリップ「「「「・・・」」」ジ―

照井『何？このノリ・・・うざい』

照井「え？なにそれ怖い」

翔太郎「まったく、照井はダメだな」

フィリップ「うん、こればかりは翔太郎の言う通りだ」

照井「何なんだ！こいつらは！」

亜樹子「じゃあ、配役決めようか」

翔太郎「じゃあ、まず主役のさくらと行きたいとこだが、ケロベロスことケロちゃんから決めるか！」

亜樹子「関西弁喋るから、フィリップ君ね！」

フィリップ「え？関西なら他にもいるじゃないか！アキちゃんだつてそうじゃないか！」

亜樹子「私は主役だし、竜君はリー君だし・・・翔太郎君は・・・関西じゃないしね」

翔太郎「どうせ俺は関西じゃないさ・・・」

亜樹子「ほら、フィリップ君のせいで！こうなったらフィリップ君がやるしかないね！」

フィリップ「わかった、やるよ」

翔太郎「じゃあ、次は主役のさくら決めるか。と言いたいとこだが、実はもう決めてあるのだ！」

亜樹子「はいはい！私だよね！」

翔太郎「さくら役は木ノ本に決定！」

亜樹子「木ノ本？だれ？竜君知ってる？」

照井「いや、知らん」

翔太郎「そこの、お前だよ！照井！」

照井「何故俺が木ノ本なんだ」

翔太郎「お前の芸名だろ？」

照井「所長、こいつはなにを言っているんだ？俺にはサッパリだ」

亜樹子「私もわかんない。仮に木ノ本だとしてなんで竜君がさくら役なの？」

翔太郎「忘れちゃったのか？亜樹子。さくらの苗字を」

亜樹子「忘れるわけじゃない、えーと・・・まさか！？」

翔太郎「そう、そのまさかさ！さくらちゃんも木之本なんだよ！」

亜樹子「なんだってええ？つてでも苗字一緒でもお兄ちゃん役とかお父さん役とか色々あるじゃん！その中でなんでさくら役なの？」

翔太郎「さくらちゃんの誕生日は何月だ？」

亜樹子「何月だっけ？」

フィリップ「4月1日でしょ？」

翔太郎「そう、4月1日だ」

照井「俺の誕生日は4月1日じゃないぞ？」

翔太郎「ぶっちゃけ誕生日は関係ない」

亜樹子「じゃあ何で聞いたのよ！」

翔太郎「亜樹子、お前はなんにでも理由理由、それがなくちゃいけないのか？ちがうだろ？理由がなくなっただけいいじゃない！さくら役がてるいでもいいじゃない！」

亜樹子「た、たしかに・・・」

照井「ええええええ！？言いくるめられたよ・・・」

亜樹子「そ、そうだよ。翔太郎君！私が間違ってたよ！私が主役やりたいばかりに私よりも適役がいるのにわがままいつちゃって・・・みんなごめんね？」

照井「間違ってたないよ？所長何も間違ってたないよ！」

翔太郎「亜樹子、お前ならわかってくれるって思ってたぜ、間違いないなら誰でもある気にするな。なあフィリップ、照井！！」

フィリップ「う、うん」

照井「そうだな・・・」

照井「こうして今に至る・・・」

翔太郎「がんばってくれよ、このPRビデオ成功するかはお前にかかってるんだぞ？照井」

亜樹子「そうだよ、竜君！私の分までさくら役がんばってよ！」

フィリップ「というか、これ誰が撮るの？」

翔太郎・亜樹子「え？」

亜樹子「えーと、竜君がさくら役でフィリップ君がケロちゃん役、翔太郎君が監督、私が照明・・・誰だろうね？」

翔太郎「・・・」

映司「え？PRビデオ？」

亜樹子「うん、部のPRビデオ作ろうと思ってね。協力してよ」

映司「いいですよ。ね、みんな」

伊達「おうよ！この伊達組に任せなさい！」

翔太郎「おお！なんか頼もしいな」

比奈「取り敢えず役割分担しましょうか。どんなの作るんですか？」

翔太郎「CCさくら」

比奈「え？」

翔太郎「CCさくら作るって言ったんだよ。因みに監督が俺でメイクさんが亜樹子、

照井がさくら役、フィリップがケロちゃん役だ」

映司「あ、俺も見てました！」

翔太郎「あれ面白いよな」

照井「な、なあ、人数も女子も増えたんだし俺じゃなくても良いんじゃないか？」

翔太郎「ダメダメ、比奈もギリギリ魔法少女って言うには遅いからな・・・」

アंक「確かにな・・・」

メズール「なら、私は？」

翔太郎「おお、見た目はまあまあだな」

カザリ「でも、それだとメズール800歳超えてるでしょ」

メズール「な、何言ってるのかしら、私はピチピチの16歳だわよ？かしこだって使っちゃうわ！かしこ」

カザリ「いや、アウトでしょ・・・」

ガメル「メズール悪くいった！おでカザリ許さない！」

翔太郎「という事なんだ、さくら役は照井お前にしかできない」

亜樹子「そうだよ！竜君がんばって」

照井「いや、それ言ったら、年齢どうこの前に男なんだが俺・・・」

翔太郎「ちつ、わーったよ。そんなにやりたくないなら、やらなくていいよ俺がやるから」

亜樹子「いやいや、私がやるよ」

フィリップ「いや、僕が」

映司「俺がやるよ！」

比奈「じゃあ、私が」

アंक「しょうがないな、俺がやってやるよ」

伊達「なら、俺の出番って事？」

カザリ「みんなはすっこんでてよ。ここは僕がやるよ」

メズール「なら、このピチピチのわたちがやるわ！かしこ」

ガメル「メズール、頑張れ、メズール、頑張れ」

真木「なら私も・・・」

照井「じゃあ俺がやるとは言わないからな？引つかかるものか！絶対に！！」

比奈「でも、これやっても意味なくないですか？」

亜樹子「確かに・・・部とまったく関係ないもんね」

翔太郎「こうなったらやっぱり俺が事件をハードボイルドに解決するのにしようか！取り敢えず題名はハードボイルド探偵左翔太郎、温泉宿に行くゝ呪われた温泉は紅く血塗られてゝどうよ？」

フィリップ「どうよって言われても・・・」

ロスト「ないと思う」

翔太郎「何だと？って誰こいつ？」

亜樹子「迷子かな？」

映司「あ、その子アंकの弟ですよ」

亜樹子「へえー、名前は何ていうの？」

ロスト「アंक、僕はアंकっていうんだ」

フィリップ「へえ、アंकっていうんだ」

翔太郎「いや、兄弟そろって同じ名前とか親面倒くさがりすぎたろ！？」

亜樹子「確かに、呼ぶ時面倒くさそう・・・」

亜樹子「アंकく〜ん」

アंक「あ？」

ロスト「なに？」

亜樹子「みたいなの？」

伊達「それならいい方法がある」

映司「さっすが伊達さん！」

伊達「ちっこい方がアंक、デカイほうがアankoこれで決まりだろ」

ロスト「いいね、おいアンコ。これでアイス買ってこいよ」

アंक「あゝ？」

ロスト「アイス買ってこいよ」

アंक「あゝ あゝあゝ？」

映司「おい、アंकやめろってお前のほうがでかいのにみっともないぞ？」

比奈「そうだよ、アंक君が怖がってるよ」

ロスト「こゝこわいーだれかたすけてー」

翔太郎「まあここはひとつ大人になれってアंक」

アंक「軽く俺に対するいじめだろこれ・・・」

亜樹子「まったく脱線してるよ！もうこれ悪い癖！！」

伊達「だな。もうめんどいし左の案で行くか」

真里奈「キヤー、みんな来てウヴァ君が・・・」

翔太郎「ウヴァがどうしたって！？」

ウヴァ「・・・」

フィリップ「死んでる・・・」

亜樹子「え？うそでしょ？」

フィリップ「いや、本当だ。死因はあそこから落ちたことによる転落死だね」

映司「そ、そんなウヴァはこれでも黒帯だったのに・・・そんなウヴァを落とせるなんていたい・・・」

真里奈「私が見たときにはもう落ちてました・・・」

カザリ「ウヴァ・・・最近見ないと思ったらこんな姿になって・・・」

メズール「私たちが一緒にモンハンをやってあげてたら・・・」

フィリップ「これは、一人の犯行でもあるし複数で襲ったかもしれない、性別は男女どちらの可能性もあるし、身長は彼より大きいとか小回りの利く小柄を生かしたのかどちらともいえない・・・年齢は10歳から20歳、もしくは30から60台の可能性もある・・・」

比奈「・・・あ」

亜樹子「しっ」

比奈「あ、はい」

フィリップ「つまりこれから察するに犯人は、第一発見者の真里奈ちゃん、君しかないんだ・・・」

真里奈「ち、ちがいます。私じゃないです」

フィリップ「いいわけなら署でするんだね」

真里奈「本当だよ！！信じてよ！！」

翔太郎「そのとおりだぜ、フィリップ。さっきから見させてもらったがな、その推理はちよっとおかしいんじゃないか？」

真里奈「翔ちゃんは私のこと信じてくれるの？」

翔太郎「当たり前だろ？それに俺はハードボイルドだからな。相手の目を見ればわかる、真里奈はうそを付いてない！」

フィリップ「確かに、そう言われて見ればそうかもしれない・・・」

アंक「おい、だったら犯人は誰なんだよ？人殺しと一緒にいるなんて考えられないな、俺は部屋に戻るからな」

翔太郎「おい、一人は危険だぞ！」

アंक「人殺しと一緒にいるほうが危険だろ」

アंक「ぎゃあああああつあああああ」

翔太郎「今の声は!？」

映司「アंकの声だ!」

亜樹子「アंक君も死んでる・・・」

フィリップ「なんてこったい・・・」

翔太郎「・・・なんだこの違和感は」

カザリ「グリードばかり殺されてる・・・次はメズールかガメルか、僕か誰が殺されるんだろうね・・・」

亜樹子「何でそんなに冷静でいられるの?もしかしてあんたが犯人なんじゃないの!？」

カザリ「僕じゃないよ」

カザリ「うわsああああああ」

翔太郎「そして一人また一人と殺されていった・・・」

亜樹子「もうやだよ・・・おうちに帰りたいよ・・・」

フィリップ「でも、つり橋が切られててここから出る方法はない・・・」

後藤「なら俺たちはここで殺されるのを待つしかないってのかよ！やってられるか！！」

映司「あつ、後藤さん！一人は危険だって・・・」

後藤「うわあああああああ」

比奈「そんな後藤さんまで・・・」

翔太郎「犯人はいたい誰なんだ？そして俺があの時感じた違和感・・・そうか、亜樹子！全員集めてくれ犯人がわかった！」

亜樹子「全員そろってるけど・・・」

翔太郎「あ、そう・・・」

フィリップ「で？犯人がわかったんだよね？誰なんだい？」

（5時間後）

翔太郎「・・・であるからして、犯人はあいつしかいないんだ・・・」

亜樹子「あいつ？」

翔太郎「もういいだろ、出てこいよアंक」

亜樹子「え！？」

比奈「アंकは死んだんじゃないんですか！？」

映司「うん、確かに俺たちアंकが死んでるのみたよ！」

翔太郎「なんか、おかしくなかったか？アंकの死体・・・」

亜樹子「確かにいわれてみたら、髪の毛がトサカつてなかったかも・
・・」

映司「でもそれとこれといった何の関係が・・・」

フィリップ「あ・・・」

翔太郎「そういうことだ。泉信吾の体を捨てて自分は死んだと見せかけて裏でみんなを殺していった・・・そうだよな、アंक」

アंक「ああ、そうだよ」

映司「アंकどうしてこんなことしたんだよ！！」

（5時間後）

アंक「・・・というわけだ」

翔太郎「なるほどなあ、アंकお前も苦労してたんだな・・・」

亜樹子「ねーよ・・・」

フィリップ「確かにこれはひどい・・・」

翔太郎「はあ！？どこが・・・いいだろハードボイルド探偵左翔太郎が行く温泉宿ハアゝビバノンゝよかっただろ？」

亜樹子「ねえよ・・・ねーよ！」

フィリップ「あのやつつけ具合ただものではない・・・」

亜樹子「そうだよ、全編通してやつつけ感がひどかったよ！」

翔太郎「いや、本当はもつとすごい感じになる予定だったんだよ！でも飽きたってか・・・第三回の目がないのもこの回でフラグ回収的な感じで使おうと思ったんだけどめんどくさくなっちゃってさ」

亜樹子「あー確かに第三回だけ目が付いてないよね」

翔太郎「それに前に刑事さんの髪型ってこんなだったのかって今回の話のためにやったんだよね」

フィリップ「ちょっと何言ってるかわかんないです・・・」

大道「おう、お前ら何やってんだ？」

フィリップ「あ、義兄ちゃん」

ミーナ「誰？」

大道「ああ、俺の弟にバカたち」

翔太郎「馬鹿ってなんだ！」

亜樹子「あの、ミーナさんでしたか？」

ミーナさん「ええ、そうだけど・・・」

亜樹子「もしかして、シンケンピンク役の！？」

翔太郎「ええええー！？マジで？」

フィリップ「確かにいわれてみれば似てる・・・」

亜樹子「あの、よかったら変身シーンやってほしいんですけど・・・
一発装着！！ってやつ」

翔太郎「違うだろ・・・見てろ？一撃必殺！」

フィリップ「違うから。こうだよ、一品必着」

翔太郎「お前のが一番わけわかんないから」

ミーナ「なんなこの人たち・・・」

大道「ああ、無視していいから」

第九回目（後書き）

これはひどい。やつつけ具合が酷い・・・今回も読んでくれてありがとうございます。

第十回目（前書き）

そついや、グリードカザリ以外みんな一回退場したね

第十回目

ロスト「ウノ！後一枚だよ？誰も僕を止めることはできないよ」

アंक「くそつ、わが弟がなかなかずるがしい・・・」

メズール「あら、私もウ・ノ！」

ガメル「やったね、メズール！」

メズール「ありがとう、これもガメルのおかげよ？」

ガメル「でへへへ・・・」

カザリ「どうやら、この勝負、僕とアंकの一騎打ちになりそうだね・・・」

アंक「そのようだ・・・」

メズール「そういえば、ウヴァは？」

カザリ「ウヴァならあつちで一人でカバディしてるよ？」

ウヴァ「カバディカバディカバディカバディ・・・」

ガメル「なんでウヴァウノやらない？」

メズール「なんででしょう？」

ガメル「うーん、わかんない・・・」

カザリ「虫頭にはウノは無理だよ」

アंक「確かになあ、虫頭には無理だ」

ロスト「アंकも鳥頭じゃないか・・・」

アंक「それをいっただらお前だってそうだろうが？」

ロスト「アंकよりはすごいもん！」

アंक「うそ付け！世の中になどうあがいたって覆せないものがあるように、兄より優れている弟なんていねえんだよ！」

ロスト「この間、掛け算9の段までいえるようになったんだから！」

アंक「ほう、なら試してやろう、 9×9 はなんだ？」

ロスト「81！」

アंक「そう 9×9 は81だが、昨日俺が食べたアイスの数は何本でしょうか！」

ロスト「・・・」

カザリ「ロストの勝ち」

真木「上がり・・・」

アंक「・・・あ！」

カザリ「いつのまに・・・」

真木「皆さんがしゃべってる間に」

メズール「というかいつからいたの!？」

アंक「このやろう、卑怯だぞ。もっかい勝負だ」

ロスト「あ、ちょっとまって」

アंक「な、なんだよ・・・？」

ロスト「勝負僕が勝ったんだから、アイスかってきてね？」

アंक「してねえよ!？そんな約束!？」

アंक「くそっ、今日なんかマジでついてないわ」

映司「あ、アंक」ポン

アंक「あ？」

映司「ごきげんよう、どうかしたんだろ。顔を見れば一瞬でわかる」
アंक「うつせえ！」ボコ

映司「ウボアー」

アंक「ちっ、何だよいきなり」

映司「それはこっちのセリフ！いきなり殴るなんてひどいじゃないか！」

アंक「いや、なんかつかつとなって・・・」

映司「ひでえ・・・」

北村「おい、アंक何俺の映司にひどいことしてるんだ」

映司「なんか今北村君がさらっとひどいこと言ったような？」

アंक「あ？お前には関係ないだろ。ホモはすっこんでろ！」

映司「おい、いくらなんでも言いすぎだろ、北村君に謝れよアंक」

北村「きにするなよ、映司。でも、ちよつと悪いなと思ってるなら教えてほしい映司の好きな食べ物嫌いな食べ物、映司が好きなこと嫌いなこと、映司が行きたい場所、映司の好きな体位・・・そしてアंकお前には負けないからな！映司のパートナーは俺だ」

アंक「いつから俺が映司のパートナーになったし！」

映司「あ、警察ですか？ちょっと不審者が……ええはい、すぐ来てください」

北村「!？」

警察「不審者はどこですか？」

比奈「警察はや!？」

映司「あ、あそこです」

北村「ちよつと待ってください、誤解です。映司、この人たちに誤解だつて言ってくれ」

映司「北村、今まで友達だと思ってたけど今日までだ、次からは話しかけないでね」

北村「俺だつて、お前のことはホモたちだつて思ってるよ」

映司「早く連れて行ってください」

北村「えいじいいいい、俺だ結婚してくれえ!!」

アंक「お前も苦労してんだな」

映司「アंक……」

アंक「なんだよ、おかしいか？」

映司「お前・・・熱でもあるんじゃない・・・」

アंक「お前、あとで屋上な」

比奈「二人ともなにしてるの？」

映司「いや、ちょっと男同士で・・・な？」

アंक「な？いわれても」

比奈「え！？アंकって男だったの？」

映司「え？」

アंक「あ？」

比奈「というかグリードに性別ってあるの？」

映司「えーと、そこらへんどうなの？アंक」

アंक「いや、どう見ても男だろ俺！？」

比奈「いや、そらお兄ちゃん的身體じゃないっすか」

映司「比奈ちゃん・・・」

アंक「だとしてもだ、言葉使いで分かるだろ、男って」

比奈「いや、男言葉の女の子かも知らないよ？」

ガメル「おで、コーヒー牛乳」

カザリ「僕、紅茶」

真木「・・・コーヒーをブラックで、あとキヨちゃんにミルクティーを」

アंक「なら、俺もコーヒー、砂糖たっぷりな」

ロスト「ぷっ！」

アंक「なんだよ！」

ロスト「べっつにー？」

アंक「俺は甘党何だよ！」

ロスト「自慢できる事じゃないよね」

アंक「お？お？やんのか？」

カンカンカン

カザリ「ロストの勝ち」

アंक「・・・」

ロスト「じゃあ、僕もコーヒーマグで」

メズール「いいけど、苦いわよ？」

アंक「どうせ、ブラック飲める僕カッコいいとかおもってんだろ」

ロスト「何いつてるんだか・・・」ゴクゴク

ロスト「・・・ブツ」『な、なにこれすつごく苦い・・・』

アंक「おい、かかったんだけど・・・」

ロスト「アंकが変な事いうからだよ！別に苦かったとかじゃないから！」

カザリ『苦かったんだ・・・』

メズール『苦かったのね・・・』

真木『苦かったんですね・・・』

映司「苦かったんだ・・・」

アंक「なんでお前がここにいるんだ？」

映司「え？だめ？」

アंक「この面子でなんで居んだよ、それよりも良くかけたな？熱かったんだけど」

ロスト『でもどうしよ、苦くてもう飲めないよ・・・』

アंक「シカトか？お？お？やんのか？」

カンカンカン

カザリ「ロストの勝ち」

メズール「でもなんか、ブラック飲んでる人いいなーって思うわぁ」

アंक「へえ、なら俺もブラック飲もうかな」

ロスト「なら、アंक僕の飲mアंक「いやいい」

アंक「せっかくいれてもらっただから全部のめよ（＾　＾　）」

ロスト『こいつ、僕がこいつのをわかっててわざと・・・』ギリッ

ウヴァ「お、みんななにしてんだ？」

ガメル「グリードみんなでお茶会開いてる」

ウヴァ「え？俺呼ばれてないけど・・・」

メズール「え？てつきりカザリ辺りが誘ってるかと思ってたわ」

カザリ「僕もメズールが・・・」

ガメル「おれ、お前の事忘れてた」

アंक「俺も」

ロスト『苦い・・・』

真木「私も」

映司「じゃあ、俺も」

ウヴァ「べ、別に俺こういうの好きじゃないし？誘われなくてもいかなかったけど、なんで完璧グリードの俺じゃなくなてなりかけの奴呼んだの!？」

カザリ「誰が呼んだんだっけ？」

メズール「紫の坊やは最近はウヴァよりも一緒にいる時間が多いしねえ」

映司「俺かつてに来ました」

ウヴァ「いいのかそれ!？なら俺もくれば良かったな・・・」

後藤「伊達さん、それはアクエリアスじゃなくてポカリです」

伊達「どっちでもいいじゃないそんなの」

後藤「伊達さん、それはイン何とかじゃなくてイカ娘でげそ！」

伊達さん「名前覚えてないとかイカデックスデイスってんのか？あ？」

後藤「伊達さん、そっちはカナ、マナじゃありません」

伊達「後藤ちゃん、じゃあどうやって見分けるのさ？」

後藤「わかんないです」

伊達「おい！」

映司「・・・後藤さん？」

後藤「・・・ん？」

映司「・・・特にないです」

後藤「・・・え？」

映司「特にないです」

後藤「じゃなくてじゃあ何で呼んだ？」

映司「・・・なんとなく？」

後藤「なんとなくか・・・」

映司「はい、なんとなく」

後藤「・・・」

映司「・・・」

後藤「・・・」

映司「・・・」

後藤「・・・」

映司「・・・」

後藤「帰るか」

映司「ですね」

ヤス「あ、卵ヤスッ!？」

アंक「なあ、映司」

映司「何？アंक」

アंक「暇」

映司「ふーん・・・俺も暇。アंकなんかやれよ」

アंक「・・・やだ」

映司「おいおい、子供みたいなこというなよ」

アंक「じゃあお前がなんかやれよ、そしたら俺もやる」

映司「やだ・・・」

アंक「おい？さっきとってることが違うじゃないか、子供みたいなこというなよ」

映司「それこそ、子供みたいなことだろ。いつまでも愚痴口と・・・」

アंक「そっか、ごめん・・・」

映司「いやわかればいよ・・・」

アंक「・・・」

映司「・・・」

アंक「・・・」

映司「・・・」

第十回目（後書き）

来週ウヴァさん帰ってくるね。今週アंक帰って来たし、最後まで読んでくれてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5729q/>

WとOOOで学園物2

2011年10月8日16時07分発行